

# 目 次

## 特集 豊田氏、大内氏

|                             |       |    |
|-----------------------------|-------|----|
| 特集について                      | 編 集 部 | 1  |
| Ⅰ 豊田氏                       |       | 3  |
| 豊田氏初代輔長から14代種秀までの歴史上の記録について | 溝田 孝一 | 9  |
| 神上寺の聖観音像                    | 編 集 部 | 11 |
| 星ノ岡・平井城の戦い                  |       |    |
| ①土居得能氏勤王事績                  | 二神 俊一 | 12 |
| ②平井城の戦い                     | 二神 俊一 | 16 |
| ③首なし馬の伝説                    | 二神 俊一 | 25 |
| 幕府から豊田種治宛ての下し文              | 編 集 部 | 31 |
| Ⅱ 大内氏                       |       | 33 |
| 大内義隆公次男・幾代丸の話               |       | 38 |
| 1 利重忠氏による幾代丸の推論             |       | 38 |
| 2 伊予・法善寺を建立した豊田幾之進          |       | 41 |
| 3 「豊田家系譜」に見る義隆公の遺児たち        |       | 46 |
| 大内氏の末裔の話                    |       | 56 |
| 1 中島・熊田地区に残る「岩丸」伝承          |       | 56 |
| 2 山口家の先祖大内重隆の墓              |       | 56 |
| 3 あるホームページから                |       | 58 |
| 4 中島・宇和間地区の「多々良介」           |       | 59 |

## シリーズ

|                                      |       |    |
|--------------------------------------|-------|----|
| 系譜、家紋紹介 東予二神氏<br>(楠二神氏、国安二神氏、三津屋二神氏) | 編 集 部 | 60 |
|--------------------------------------|-------|----|

## 文書紹介

|       |       |    |
|-------|-------|----|
| 二神家内記 | 編 集 部 | 74 |
|-------|-------|----|

## 役員のつぶやき

|            |       |     |
|------------|-------|-----|
| 二神島への楽しい釣行 | 二神 浩三 | 93  |
| ホタル        | 二神 俊一 | 96  |
| 弟を偲ぶ       | 二神 重成 | 100 |
| 接点         | 二神敬之助 | 102 |
| 私のふたがみ島    | 二神 元信 | 107 |
| よろしく願います   | 二神 英輔 | 110 |
| 大人と小人      | 二神 久蔵 | 112 |
| 二神島訪問外伝記   | 二神 宏介 | 115 |
| 二神島の船踊り    | 豊田 渉  | 120 |

## 「ふたがみ」にまつわる話

|                       |       |     |
|-----------------------|-------|-----|
| 二神三姉弟、宮島管弦祭で篠笛演奏      | 編 集 部 | 123 |
| テレビドラマ「風のガーデン」に二神さん登場 |       | 124 |

|             |     |
|-------------|-----|
| 会 則 .....   | 126 |
| 役員名簿 .....  | 128 |
| 入会申込書 ..... | 129 |
| 編集後記 .....  | 130 |

# 特集について

二神氏を考えるとときに、豊田氏とともに大内氏の存在をぬきに考えることはできない。今号は、豊田氏、大内氏に関わるものを中心に取上げて紹介したい。

## 星の岡・平井城の戦い

豊田氏関連の伊予における記述で特筆すべきは、元弘3年（1333＝北朝：正慶2年）3月12日の「星の岡・平井城の戦い」についてであろう。

この戦いは、「忽那家文書」「三島文書」「正慶乱離志」（前半を『楠木合戦注文』後半を『博多日記』という）「太平記」「予章記」「伊予二名集」などに見える。そのほとんどに、時の長門探題北条時直軍が、伊予の土居・得能・忽那氏らと、久米郡星の岡・平井地域で戦をしている記述がある。

その中の「正慶乱離志」に、討ち死にした者の記述があり「一 豊田手人々上下十人」とある。「一ノ瀬史」によると、豊田種長、種藤が長門探題北条時直に従って官軍と戦っているので、ここでいう豊田は、山口の豊田氏であると思われる。

## 松山市平井町の豊田氏

現在の、松山市平井町辺りには、豊田姓の家が20軒ほどあり、町内の西宮神社境内には豊田氏を祀る「豊久神社」がある。平井町の近くにある日尾八幡神社（松山市南久米町）の玉垣には、豊田姓の刻まれたものを確認することができる。これらのことと、前述の「星の岡・平井城の戦い」との関わりはどのようなだろう。

そして、この年代は、豊田種家が山口から二神島に来たとされる頃と重なっている。それらとの関係はどのようなだろう。

## 大内義隆公の遺児たち

「星の岡・平井城の戦い」から200年後に、伊予の地で大内義隆公の遺児たちの話や末裔に関わる話などが残っている。それらは史実に沿うものや、かけはなれたものであるかも知れない部分もあるだろうが、疎かにするわけにはいかない。

この遺児たちを受け入れた背景には、豊田種家が二神島に来たこと、豊田種長・種藤が「星の岡・平井城の戦い」に参戦していることなどが、前提にあるのかもしれない。そのあたりに何かが拮めるのではと考えたのである。伊予の地に伝わる話や記録をつなげていく作業の中で何かが見えてくるかもしれない。そのことが、今後の二神系譜研究の一助になれば幸いである。

# I 豊田氏

まず、山口県豊田町の田中鑛藏氏による「豊田氏の興亡」から紹介したい。

## 1 豊田氏の祖

豊田氏は、藤原兼家の嫡男、関白の道隆から出ている。隆家、経輔の二代を経て長房に至り、長房の子輔長が豊田氏の初代となる。

隆家が太宰権師に任官して長和3年(1014)太宰府に赴任した。これが、豊田氏が生まれる端緒となった。この時、刀伊賊の来寇という大事件が起こった。時に、寛仁3年(1019)3月27日のことである。

刀伊(とい)とは、女眞(※注釈)のことで中国北部の松花江、鴨緑江の間に広がった民族で、後に清国を開いた。この刀伊の賊徒50余艘が、突然、対馬・壱岐を襲い、転じて博多を侵した。朝廷は太宰府に命じて賊徒を討たせ、諸神仏に祈祷する。隆家は直ちに、これを討たせるとともに、嫡男経輔を勅使として神上山につかわし、大御堂で戦勝祈願をさせた。

神上山とは、豊田盆地の西にそびえる山で、現在の華山(730m)である。古くから霊山として崇められている。奈良時代には、三所権現(上宮・中宮・下宮)が創建され、ついで中宮の近くに祈祷所の大御堂が建立された。

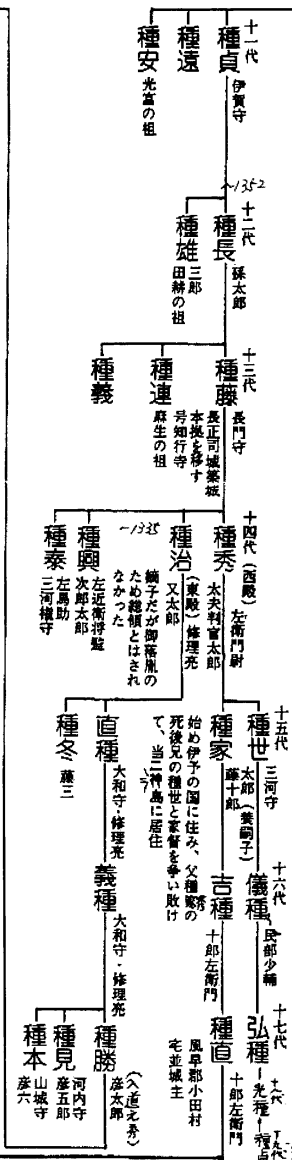
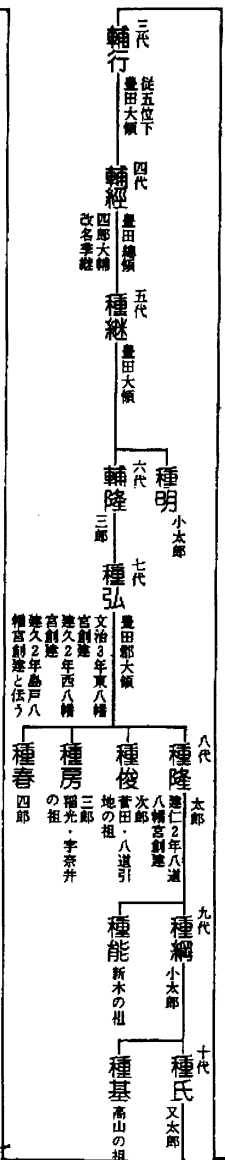
※ 女眞(じょしん)とは、10世紀以降、中国東北地方東部に住んだ、狩猟・牧畜を主とする民族の1つ

## 2 豊田氏の起こり

経輔の孫、輔長が豊田氏を名乗り、豊田氏初代となる。2代輔平

# 〔豊田氏系図〕 (田中鑛三氏資料より)

藤原氏(北家) 正位開白  
 隆家 正位中納言 号大炊御門  
 經輔 正位左衛門尉 推大納言  
 長房 正位左衛門尉 推大納言 本朝光  
 輔長 正位左衛門尉 推大納言 本名忠通  
 輔立 正位左衛門尉 推大納言 本名忠房 号兼地  
 大和守 豊田大津岡部領主  
 豐田氏 太宰大式・左京大夫 周防權守 初代 自是号豊田  
 豐田氏 推家使・權中納言 本尊權帥・兵部卿 權中納言 正位左衛門尉 推大納言



が、豊田郷に初めて土着する。一ノ瀬に居館を構えて、豊田氏の本拠とする。そして、大和大路堂の聖観音をいただいて神上山山麓の観音堂に安置させ、衆生済度の菩薩として定住記念とした。3代輔行から6代輔隆までは、それぞれ豊田氏繁栄に努力して、厚東氏や他の豪族と並んで中央に知られるようになった。

### 3 源平合戦（壇ノ浦の海戦と7代種弘）

#### ① 壇ノ浦の海戦と豊田氏

一の谷、屋島の合戦に敗れた平家は、最後の決戦場として、下関彦島に陣を構えて500艘の兵船を集めた。源義経は長府の沖に800艘の兵船をもって、これに対した。寿永4年（1185）3月24日、壇ノ浦の沖で平家が敗れ、8歳の安徳天皇は入水された。義経は、天皇と宝剣を大搜索し、遂に天皇の御遺骸を見つけ、これを豊田郷地吉に葬る。隣接する、豊東郡司、豊西大夫らは早くから平家に味方をしていたので滅ぼされたが、豊田種弘は源氏に味方したので、中世武将として長く西国に重きをなした。

#### ② 種弘が八幡宮を創建する。

豊田氏は、領内の民心を安んずるため、その信仰する八幡宮を要所に創建した。

東八幡宮 文治3年（1187）3月、豊田盆地の東側、殿敷の田圃の中に建立した八幡宮で、宇佐から勧請した。

西八幡宮 種弘が、建久2年（1191）に阿座上の地に建立した。宇佐から勧請。明暦2年（1656）現在地に遷された。

島戸八幡宮 種弘は、建久2年に島戸の馬城山に八幡宮を創建した。

八道八幡宮 8代種隆は、建仁2年（1202）に八幡宮を建立した。

#### ③ 市の発生

東八幡宮の南方は人が多く集まるので、定期的に物々交換の場を作った。これが本郷の市で、最初に始めた場所である。

#### 4 元軍の来襲と11代種貞

文永11年（1274）、弘安4年（1281）に元軍が九州に押し寄せてきた。このとき、周防の大内氏、長門の厚東氏・豊田氏その他の豪族が一斉に出陣して勇戦した。豊田種貞も、総大将として華々しく活躍した。

種貞は、元軍との戦いを反省して、防御設備として山上に城壘を築くことが大切であるとして、一ノ瀬の山砦を堅固にして山城の修築をした。日野集落の長谷観音は、種貞が、大和の長谷寺に模して建立したと伝えられる。また、長願寺は、豊田氏の菩提寺であるが、種貞の守り本尊の薬師如来像が安置されている。

豊田氏は、大内氏、厚東氏と共に防長の三大豪族となった。

#### 5 国乱と12代種長・13代種藤

元弘元年（1331）、後醍醐天皇が討伐の軍を起した時、種長・種藤は、厚東氏と共に長門探題北条時直に従って官軍と戦ったが、後に豊田氏は官軍に属し、建武の中興に功績をたてた。

後醍醐天皇の新政の後、足利尊氏が天皇に叛いて新帝「光明院」をたてた。これを北朝という。その為に、後醍醐天皇は、吉野に遷幸した。これを南朝という。ここに、南北朝が対立した。全国の武将は、南朝と北朝に分かれて争った。防長二国では、大内氏が南朝方、厚東氏は北朝方についた。豊田氏は、南朝方について、大内氏と共に厚東氏に対立した。

足利尊氏の次男、足利直冬が、父と仲たがいをし九州に走る。尊氏に対抗するため南朝方に味方して、北朝方の大友氏らと戦ったが敗れた。長門国の豊田種藤を頼って、一ノ瀬に潜んでいた。（観応3年11月13日）。翌年、神上山で、戦勝祈願をする。

観応3年（1352）10月18日、種長死す。長願寺に埋葬し、この時、重臣が殉死したという。近くに殉死の場所「朱満ヶ原」と重臣の墓所と伝えられる「千人塚」がある。長願寺には種長の供養板碑が建

てられている。巨大な板碑の中央にキリーク（弥陀）、カーンマー  
ン（不動）の二文字が、梵字で刻まれている。右上に、「種長御霊」、  
左下に「観応三年壬辰十月十八日」とある。下方に、数行の文字の  
跡と「大施主良祐」の字が見える。

## 6 種藤、居館を殿敷向山に移す

大内氏は、延文元年（1356）、北朝方の厚東氏を霜降山城に攻め  
て、九州に奔らせる。種藤は、厚東氏が衰えたので、新たに豊田盆  
地の北部に長正寺城を築いた。豊田氏の居館は、長正寺城の東方、  
殿敷集落の向山に設けた。これを西館と称した。これに対して、館  
の後ろの山を越した所に東館を設けて、種藤の側室の子種治が住ん  
だ。

## 7 豊田氏の家督争い

種藤の子14代種秀には、初め実子がなかったので種世を養嗣とし  
たが、後に実子種家が生まれた。種秀の死後、種世と種家とが家督  
を争い、種家が争いに敗れて豊田郷を去った。種家は、伊予国二神  
島に移り「二神氏」を称した。

二神氏は、伊予水軍の河野通直に従い、宮方として各地に転戦し  
て功績があった。種家の後、種直の代に二神氏は、風早郡小川村宅  
並城の城主となり、子孫連綿として現在に至っている。

## 8 豊田氏、大内氏に服属する

厚東氏が、正平23年（1368）のころ、滅亡して長門の形勢が定ま  
ったので、豊田氏は大内氏に降伏して円満に旧領地の授受が終わり、  
豊富な旧領地の一部を安堵され優遇された。豊田氏が大内氏に降っ  
たのは、おそらく14代種秀、庶流は初代種治であろう。

応仁の乱が終わって9年後の文明18年（1486）に庶流東殿と思わ  
れる、豊田入道元秀が大内政弘から一ノ瀬五十石の地を宛行われて



いる。

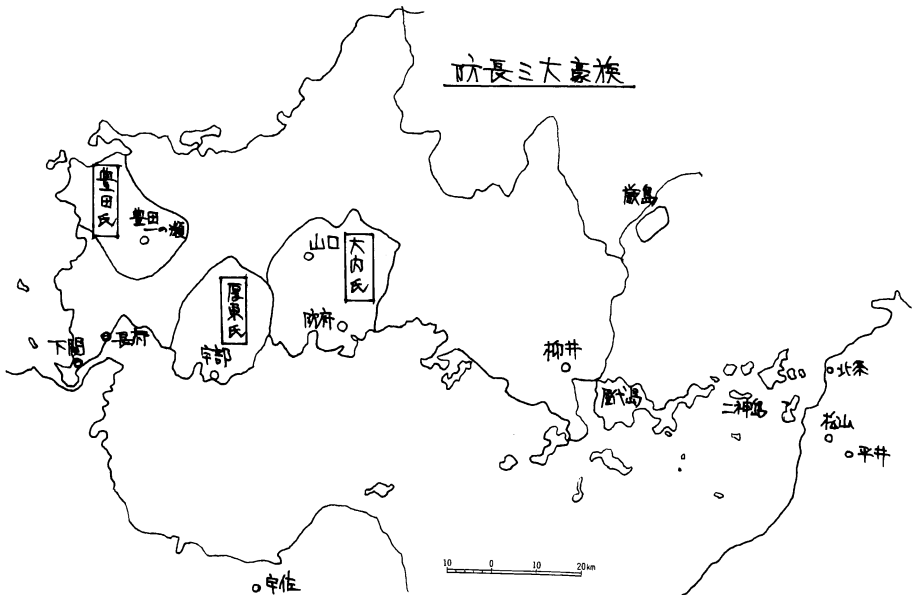
一ノ瀬の豊田氏館跡の東に「おびい屋敷」と称する雑草地がある。昔の館跡であろう。また、ここに紅白混じりの八重樫の大樹がある。500～600年は経っている。館ヶ浴椿と言っている。おびい屋敷はここにお堂があったと思われる。

「おびい」とは、豊田地方の方言で尼さんの意味である。

## 9 日輪寺と豊田氏の滅亡

正平18年（1363）24代大内弘世が、東八幡宮参道の東方に日輪寺を建立し、八幡宮に25石を寄進した。

天文23年（1554）失火により、日輪寺が全焼した。翌、弘治元年に大内義長が、日輪寺の焼失を激しく叱責し、豊浦奉行豊田房種の恥をとりあげた。弘治2年（1556）4月、20代豊田房種は自殺して、豊田氏は滅亡した。

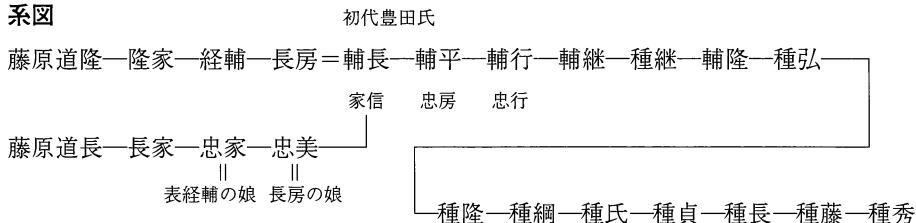


防長三大豪族勢力図

# 豊田氏初代輔長から14代種秀までの 歴史上の記録について

東京都 溝田 孝一

## 系図



「豊田氏（藤原北家道隆流）**初代輔長**は尊卑分脈、公卿補任に見えないので後世の粉飾と思われる」という記事を目にしたので、敢えて反論することにした。

若し、これが事実なら何故、大和国から「初瀬」の地名と長谷寺の長谷観音堂をわざわざ豊田という地に持って行ったのか、この事実は都の人物であるという証拠となるものである。

確かに長房（1030～1099）参議正三位太宰大貳、大蔵卿、周防権守には、娘の子が初代豊田氏となった実外孫也である。豊田に定住前は大和守家信と称して、大和の国に赴任していたと人と考えられる。そもそもこの時代、長房の娘、その父経輔の娘は忠家（藤原北家道長流）大納言正二位の妻、とその子忠美、三位従五位下の妻に嫁がしている。外孫とは忠美の子なのである。忠美の子は長門大掾（山口県豊浦郡豊田町）に任じられている。ここが重要であり疑われるところである。その後の豊田氏は、豊田の地において活躍することになる。

**7代種弘**は、記録文書、仁安2年（1167）正月21日 {太政官符案}、{兵範記} 裏文書として豊田郡大領に補せられ、東八幡宮（殿敷下山）を文治3年（1187）3月15日に創建し豊前守宇佐八幡宮より文治3

年(1187)勸請したと伝える{八幡宮縁起}。4年後の建久2年(1191)には西八幡宮を創建、ここには種弘の筆になる神体銘に{建久2年歳次晩春支干丙辰}とある。

**8代種隆**は中八道八幡宮を創建し、懸仏を作製、建仁2年(1202)7月23日豊田太郎藤原種隆とある。

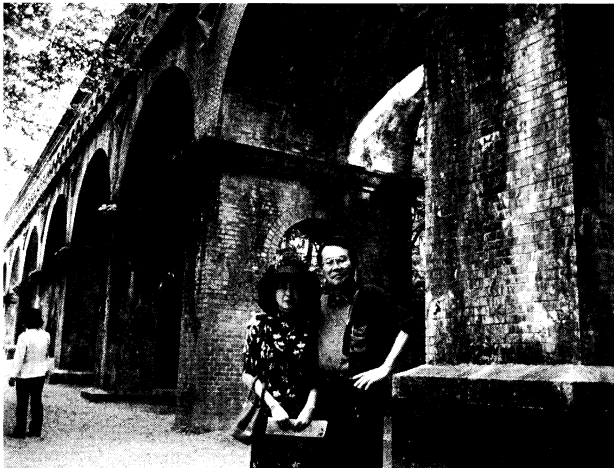
**11代種貞**は蒙古の襲来に対処して一ノ瀬の山砦を修築している。「勘仲記」によると、弘安4年(1281)6月14日条「今日宰府飛脚到来、異賊3百隻着長門浦」北九州に出陣とある。種貞の守り本尊が金輪山長願寺堂内にあり文永9年(1272)3月の銘ある薬師如来坐像がある。

**12代種長**は何かの事件に巻き込まれ「種長御霊」観応3年(1352)10月18日付板碑が墓地前にある。金輪山長願寺は、種長の祈願所として建立された。境内山麓より23基の5輪の空輪が発見され、豊田氏累代の墓石と判明。

元弘3年(1333)鎌倉幕府滅亡時の長門探題は北条時直、この時代、種長、**13代種藤**、その他の諸氏は御醍醐天皇の命を奉じて探題の館に迫り、時直は孤立無援に陥り1333年5月降伏した。その後、足利直

冬は1352年11月長門国豊田城入城、豊田氏を頼ったとある。この南北朝分裂と動乱の最中、**初代二神種家**は二神島に逃れこれ以降の歴史は二神氏となり今日に至るのである。

2009/09/11



奥様と

## 神上寺の聖観音像

山口市豊田町の神上寺（山口市豊田町江良）が保有する木造観音菩薩坐像である。

『神上寺縁起』に「白川院御宇輔長卿子息号豊田御領、以大和国大路堂正観音安置当山」とあり、豊田氏二代輔平が豊田郷一ノ瀬に定住した際、大和国大路堂の聖観音を神上寺に安置したという。



聖観音像（神上寺所蔵）

材の寄木造である。

この像は、山口県内でも数少ない鎌倉時代まで遡る彫刻の作例であり、後補の古色仕上げに覆われているが、保存状態も良好である。かつて、壮大な伽藍を誇り、長門の仏教文化の中心地であった神上寺ならではの優品であり、文化財として保存に資するものである。

参考：山口県教育委員会調書

神上寺は、慶雲元年（704）、役行者によって山岳道場が開かれたといい、元亨2年（1322）、現在地に移り、豊浦山神上寺となった。二度の火災に遭ったが、毛利氏により復興され、寺領三百石を賜った。寺宝として、「絹本着色仁王経曼荼羅図」（重文）、「絹本極彩色智界曼荼羅・理界曼荼羅」（県文）、「木造薬師如来座像」（県文）、「木造阿弥陀如来立像」（市文）がある。

聖観音像（木造観音菩薩坐像）は、鎌倉時代の13世紀後半から14世紀前半頃に制作されたとするのが妥当である。像高は60.7cm、檜

# 星ノ岡・平井城の戦い

## ①土居得能氏勤王事蹟

副会長 二神 俊一

先日、倉庫を整理していて、偶然珍しい書籍を発見した。「土居得能氏云々？あれっ、聞いたことあるな」と思い、いかにも、年季の経っている本である。急いで開けてみた。裏面の発行欄には、下記の記述があった。

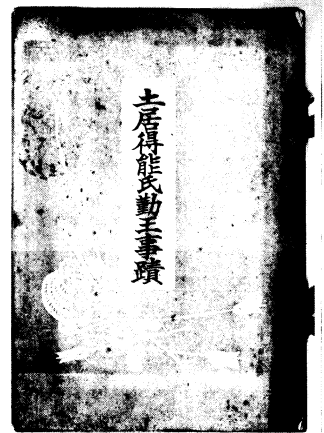
著 者 景浦直孝  
発行者 三浦仙章（愛媛縣温泉郡石井村大字南土居 萬福寺）  
発行所 愛媛縣温泉郡石井村大字南土居 土居得能勤王堂  
印 刷 昭和11年5月1日  
發 行 昭和11年5月5日  
非賣品 土居得能氏勤王事蹟奥附

これは、まさしく、元弘元年（1331）頃、後醍醐天皇方に味方した河野氏一族の得能氏、土居氏に関する書籍に間違いない。

表紙をめくると、「景浦稚桃述 土居得能氏勤王事蹟」とあり、「勤王堂」「六百年記念碑」の写真もある。

### 目次

- 1、元弘の譽
- 2、伊豫の河野氏
- 3、土居氏得能氏





松山市星岡～平井付近略図



萬福寺（松山市土居町）近くの公園内にある「土居得能勤王之碑」

- 4、星の岡の戦
- 5、論功行賞
- 6、足利尊氏の叛 土居通増の忠節
- 7、金崎の戦 得能通綱の忠死
- 8、土居得能氏子孫の忠節
- 9、結語

付録

星岡表忠之碑

土居得能氏勤王の歌

早速、住宅地図で土居町の「萬福寺」（住職：三浦章爾）を見つけた。星の岡から南へ重信川の間くらいである。現在は国道33号線と松山自動車道（高速道路）の交差点から、北東へ500メートル位の距離である。（星の岡古戦城跡と平井城跡を結ぶと、土居の萬福寺は逆三角形の頂点あたりの場所である）

「何か、手がかりがつかめるかな？」と思い、早速、現地調査に行ってみた。お寺の境内に2、3名、地元の方がいたので、三浦住職さんを尋ねたが、今、外出している由。夕方には「頼母子講」があるので、帰ってくるとのことだった。「土居得能氏勤王事蹟」の記念碑を捜している旨告げると、そこから、50メートルくらい西に公園があり、その公園に記念碑などが建てられていると教えてくれた。また、三浦仙章氏は、現在の住職のお祖父さんとのことであった。

教えてもらった公園には、確かに、昭和11年（1936）の「600年記念碑」は流石に年季が入っていたが、その手前に新しい記念碑が「650年記念碑」として建てられていたのには驚いた。

萬福寺および地元の方々の土居得能氏への思い入れの強さには敬服した。

「土居得能氏勤王事蹟」の最終ページ掲載の昭和11年5月5日、萬福寺住職 三浦仙章氏の文章を次ページに転載したい。

平成21年9月23日記す

我が愛媛縣下には古來忠勇義烈の士に乏しくは無い。然し混沌たる時勢に誕れて能く順逆を遯らす、終始一貫王事に盡せし土居通増、得能通綱兩公の如きは稀れである。

兩公逝いて六百年。不朽の美名を史乘に留むるも、未だ官社の奉祀に與かつて居ないのである。故に縣下の有志に募りて土居氏の城址温泉郡石井村大字南土居の地に勤王堂を建立し、二柱を遷しまつり、歳々五月五日を以つて祭典の日と定め、奉齋の誠を致し、去る昭和五年には前縣立松山高等女學校教諭景浦稚桃氏に依頼して土居得能勤王史を撰し、兩氏の事蹟を闡かにしたのである。爲めに詣養の人々は年々多きを加へつゝある。今又記念すべき歳に當り、勤王之碑を堂の境内に建設し、其の揮毫を同村出身功三級松本浩氏に請ひ、更に史實を普く世に知らしめんことを景浦稚桃氏に詢る。氏欣然として應諾せられ、直ちに本稿を撰して贈らる。仍りて亟かに梓に上せ、祭典の日に當り、忝しく本書を兩公の尊前に捧げ、汎く奉養の士に頒つものである。兩公を以つて、我が郷土の龜鑑と仰ぎ、以つて長へにその芳勳を傳へ、子弟教養の資とせられんことを切に望むものである。

昭和十一年五月五日

萬福寺住職

三 浦 仙 章 欽 識



## 星ノ岡・平井城の戦い

### ②平井城の戦い

副会長 二神 俊一

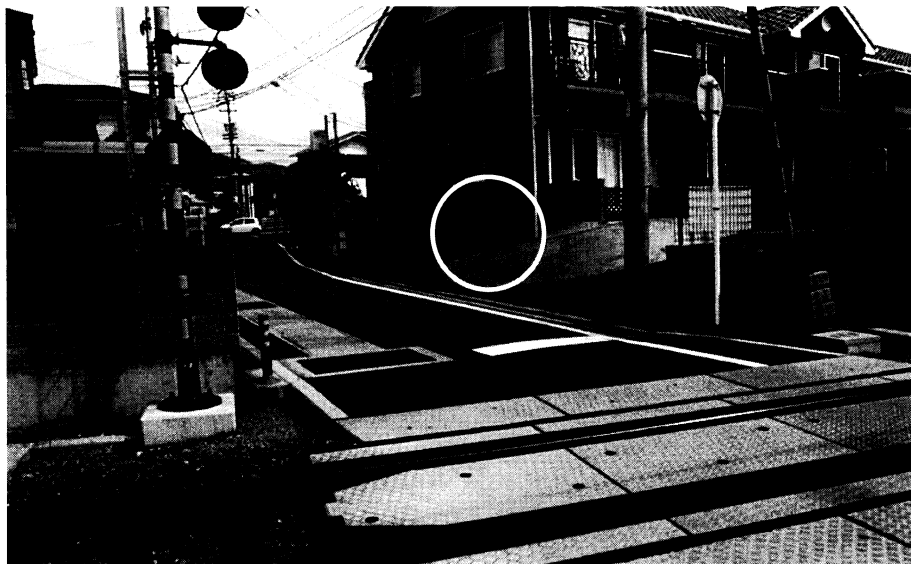
「海の民 ふたがみ」第5号、「系譜家紋紹介」No.4「畑中（はたけなか）二神氏」の欄で、二神浩三会長と私で「星の岡の戦い」などについて記述した。長門探題の北条時直を将として豊田氏の兵を含めた大軍が、伊予の土居・得能両氏の軍と戦ったのが、「平井城の戦い」、「星の岡の戦い」と呼ばれている。

二神氏の元祖である豊田種長が、愛媛県松山市郊外の小野校区内にある「平井地区」まで遠征していたかどうか、証となるものは無い。しかし、現在、平井地区には豊田姓が20軒も点在している（小野校区の電話帳で確認）ことと、何か関係があるような気がする。（後日、平井町の豊田さんに、そこらあたりを聞いて確認したいと思っている）

#### 1 平井城址

伊予鉄道横河原線の平井駅（松山市駅から東へ約15分）から、線路づたいに東へ200メートルくらい歩いていくと、小さい踏み切りがあり、踏み切りを渡った所に記念碑が建っている。そのあたりが、「平井城跡」であったといわれている。一名、「吉井城」ともいう。私が就学前の昭和25、6年頃は平井保育園があり、私もここへ通った記憶がある。現在は、アパートが建っており、碑はその横に鎮座している。記念碑の裏面には「大正14年11月25日に建立」「得能氏ノ戦跡建之」「平井城邊企主」の文字が刻まれている。表は「大義国華」の文字が大きく、その左下に「従五位得能通一書」と小文字で刻まれている。

郷土読本「ふるさと小野」(昭和57年3月24日発行)、松山市立小野小学校「ふるさと小野」編集委員会編集によれば、『平井城跡には、高市清儀(伊予国司橘四郎清正の子)という人が住み、五代にわたってこの土地を治めてきた。仁和3年(887年)11月3日、伊



平井駅(伊予鉄道横河原線)の近くにある記念碑(写真の○内)



平井城跡記念碑の表側(左)と裏側(右)

予国司河野玉澄という人が、梅川（今の小野川あたりか）から吉井川（今の重信川か）までの土地を平井城主に与えたという。

平井城付近には、幹のまわり7.5メートルもある大きな「かぶと松」とよばれる松があった。高市清興の子供の友直が、初めて戦いに出る時、城門の内にあった小さな松にかぶとをかけた。その松が大きくなったものだといわれている。それからずっと、土地の人々に親しまれてきたが、大正8年（1919年）頃枯れてしまった。』

## 2 与力松

以前、松山市平井町の小野小学校の校庭にそびえていた樹齢1千年という大きな黒松で、昭和22年2月23日に国の天然記念物に指定されていた。その後、惜しくも松くい虫によって枯れてしまい、昭和55年暮に伐採されてしまった。

小野小学校あたりの地名が「与力」と呼ばれていたことや、歴史上の与力武士に関係があることから「与力松」と名づけられていた。ありし日の与力松は、「高さ35メートル、木の周りが6メートル、樹齢1千年」という威容を誇っていた。小野小学校のシンボリックな存在で、小野小学校で学んだ人たちや教職員の心の拠り所となっていた。昨年、98歳で他界した、私の母千代子は、昔、小野小学校で教鞭をとっていた。私も含め、姉は全員、小野小学校の卒業生でもあり、「与力松」には、特別な思いがある。そんなこともあり、「与力松保存会」が結成され、現在では、小野小学校の校庭の跡地に「与力の丘」（樹型・記念碑）が建てられている。

鎌倉時代の中ごろの『貞永式目』によると、与力は武家に従った武士のことで、馬に乗って戦う者は与力、歩いて戦う者は同心と呼ばれていた。

今から、700年くらい前、後醍醐天皇（在位1318～1339）を中心とした公家（朝廷）方と北条高時が執権となって政治の実権を握っていた鎌倉幕府方とに、日本が二つに分かれていた時のこと。全国

の武士たちは、どちらにつくのが有利か考えていた。伊予の国（愛媛）の豪族達は、後醍醐天皇の朝廷方についていた。

鎌倉幕府は、鎌倉から遠く離れた土地の政治や乱れを治めるための役所として「探題」をおいていた。

伊予の国の受け持ちは、長門探題の北条時直だった。北条時直は、伊予の国の土居通増（石井郷土居＝松山市土居）、得能通綱（周桑郡徳田村常石城＝西条市丹原町）は、相共に提携して、反幕府の立場をとり、朝廷方について義兵を挙げた。そこで、北条時直は、兵を率いて、伊予国越智郡の石井浜に攻めてきたが、土居通増・祝安親の軍に向かえ討ちされ、逃げ帰ってしまった。

元弘3年（1333年）今度は、土居通増の本拠地を攻めようと伊予国松前の浜へ上がり、星の岡（松山市内国道11号線と33号線とに挟まれた小高い丘）あたりで戦った。（これを「星の岡の戦い」という）1333年3月12日に、突然攻められた土居・得能連合軍は、防戦しながら平井城まで引き上げた。

土居・得能の二人の大將は、そのあたりの有名な大松（与力松）の下で作戦を練り直した。附近の、合田・熊・玉井・来住・久保田・原・久保・堀内などの与力を集めて、策戦をめぐらし、反撃に出た。与力たちの大きい力で、長門探題軍は大敗し、北条時直父子は山林に身を隠しながら退散したという。

その頃の小野川あたりは、一面松原つづきであったが、大變立派な大松の下に与力たちが集まったことから、この大松を「与力松」と呼ぶようになった。

## 与力松

与力松は、愛媛県松山市平井町にある小野小学校の校庭に、そびえ立っていました。しかし、マツクイムシによって枯れてしまいました。在りし日の与力松は、写真のように立派で大変美しいものでした。高さ35m、周囲6m、樹齢1000年といわれる大きな黒松でした。

た。昭和22年2月23日国の天然記念物になりました。地上から7mのところまで二つの大きな幹に分かれ、沢山の枝をつけた美しい松でした。昔、小野小学校付近の地名が「与力」と呼ばれていたことや歴史上の与力武士に関係があることから名づけられたのです。

(郷土読本：ふるさと小野第1集から引用。)



手許に「愛媛県温泉郡 小野村史」(昭和35年5月1日発刊、小野村史編集実行委員会編、発行者 小野村長 宮内順市郎)がある。そこに「平井城の戦い」(77頁から79頁)が掲載されているので、改めて、ここに概要を転載してみたい。

## 【平井城の戦い】



伊予史精義に、後醍醐天皇英明の資を以て正統をつがせ給うや、北条氏の専横を憤り、之を滅ぼして大権を皇室にかへし以て承久の拳に報いむことを期し給へり。而して其の第一次の正中の拳は失敗に歸したりしが、やがて第二次の元弘の拳には誠忠の士雲の如く、遂に北条氏を滅亡の悲運に接せしめたり。我が伊予に於ては、温泉郡石井郷なる土居通増及周桑郡徳田村常石城なる得能通綱は、相共に提携して義兵を挙げたり。

時正に元弘三年閏二月なり。かくて長門探題北条時直は戦艦三百を率い來り攻め、温泉郡石井郷星の岡に屯するに及んで土居得能両氏は元弘三年三月十二日急に之をせめて、時直の軍を破りしかば、時直暫く身を以て免れたり。世に之を星の岡の戦という。

景浦稚桃氏は更に次の如く補説している。

後醍醐天皇が北条高時の暴戾に遭い給いし時、伊予の勤王家土居通増、得能通綱の二氏は元弘三年三月十二日を以て星の岡（石井村）に義兵を挙げた。この時にあたり附近の合田、熊、玉井、來住、久保田、原、久保、堀内等の諸豪族（これが与力連中だと思われる）は奪ってこの義軍に参加し一大勢力となったので、之に驚いた高時は長門の探題北条時直を将として大軍を以て星の岡を攻めさせた。

この時不意打ちのこと、て義軍は惜しくも敗れて一大松原であっ

た小野川附近（与力松附近）まで退却するに至ったがこの松原に屯ろして策戦をめぐらし、再び星の岡に逆襲して時直を敗走させ大勝を得ることが出来た。

正慶乱離志に曰く。閏二月十一日上野殿伊予に御渡りの処に船津に兵糧米を揚げ置、後向いある所に河野、土居九郎道増只一騎打出申様此に御向悦入候。只の大將にて御座らば心やすくも存候はんずるに、御一門にて御座れば心地よく候。又我身も河野にて候えば敵にはよも嫌い給はじ。今日は日も暮れ候。又明日可入見参申すとて引退おわる上野殿御方には明日は勢も集るべし。今夜可寄とて一千五百余騎にて土居九郎城郭を構へたる所に被寄、其夜上州御方には勢を所々に陣を取て被居云々と。

元弘三年閏二月十一日北条時直は伊予船津に上陸し、石手川の堤防を東上し星の岡附近に陣所を構へたるものか。正慶乱離志の記事に因れば、北条氏は星の岡山のみならず各所に陣所を設けしもの如し。

此時北条氏が何故に斬くも懸軍長駆して深く伊予の内地に侵入せしやに就いては、伊予精義にある如く、河野通盛（湯築城）大森彦七（砥部）大森春直（高井城）大森長治（周桑郡赤滝城）赤橋重時（難波立烏帽子城）等皆心を武家方に寄せたれば、北条氏は心潜かに之等に依頼せしものならん。

得能通綱は其の時常石城（周桑郡徳田村字得能に在り）にありしが、士卒を率いて讃岐道より下り本隊を平井城に進め、一部隊は山の内川（重信川のこと）の南を西に下りしものなり（此の事得能家の記録にあり）、又続伊予温故録に、右軍は平井城に、左軍は池田原に、とあり双方相符合す。

時直は其の夜、土居得能氏の居城に攻めよらんものと各処に陣を構へたる処、土居得能氏の為に逆襲され敗れ退く。其の後喜多郡根来其の他数ヶ所に於いて戦ありしが、同年三月十一日北条氏の別隊水居津（今の三津浜）に上陸し、先着部隊（船津上陸部隊）と合し、

同月十二日申時平井城に於て得能氏と戦い、北条軍敗れ時直以下今治に逃れ乗船す。此の時星の岡にも戦いありしと云う。こは土居氏との交戦なりしならん。

正慶乱離志戦死注文に、三月十一日伊予国水居津に上陸し尋で同日申時やがて寄て同十二日平井城に被討云々とあり。

伊予郷古考抄に、明神ヶ鼻城は、得能氏の重臣井門氏の居城にして、元弘三年春兩度の戦いに得能氏が長防の寄手を敗りし所なり、とあり。

温泉郡誌に、明神ヶ鼻城は平井谷にあり、平井城と云うとあり、此の戦が正慶乱離志には平井城とし、伊予古考抄には、明神ヶ鼻城と伝はりし事も温泉（地）誌によりて、明神ヶ鼻城は平井城なる事を明らかにしたるは両者の相違を解決し得たり。

予陽郡郷俚諺集にも、平井城は得能氏の属城なることを記せり。

之等の古書伝記によるも、星ヶ丘附近は土居氏の戦跡にして、得能氏の戦跡は平井城なることを証することを得るなり。然るに世の多くの人々は、土居、得能氏義挙の合戦を星ヶ岡山附近なるが如く考ふる者なしとせず。茲に古書を抜抄して得能氏の戦跡を明らかにする所以なり。

土居、得能氏は此の戦の後、難波立烏帽子城に赤橋重時を攻めて大いに之を敗り、重時遂に自殺す（此事日本外史にもあり）

同年六月四日後醍醐天皇京都に還幸させ給ふに際し、土居、得能二氏は部下を率いて兵庫に迎え奉り、其後は新田氏と行動を共にし、足利氏の叛するに及び淀川に尊氏の軍を敗りしが、延元二年三月六日足利高経と金ヶ崎城に戦ひ、新田義頭と共に尊良親王に殉し奉れり。今大和国吉野神社なる滝桜神社と祭るは、土居通増、得能通網の霊なりと云う。

生きては大君の股肱たり、死しては範を萬世に垂れ大和武士の典型なり、我が国史に亀鑑を遺して国難に殉ぜし得能氏の義烈に感動し頼山陽先生は大義国華の墨眼を紫鳳園に遺して去られしと云う。



大正十五年一月十六日播磨塚に於て、旅団幹部演習の際、第十一師団参謀本部附陸軍少佐（※氏名不詳）の軍事講演に、此の土居、得能氏、及北条氏の戦術配陣等を図上、及実地につき説明せられし中にも、得能氏は平井城を中心となし、明神山、汐見山城等に背陣の位置を定めたる事、及伊予郡八倉方面に於ても戦ありしことを述べたり。殊に平井附近の戦は星ヶ岡方面よりも激戦にてありし由、我国の戦術は、昔より中軍正面軍は少数の兵を多大に見せ掛け、右翼左翼へ大主力を用ひる方法を探りしものにて、北条氏もその例により中軍星ヶ岡山附近へは殊に三月十二日の戦には、北条氏は主力をもって向ひしものにて、意外の激戦なりし事を述べられたり、八倉方面にても戦ありしとは、得能氏の一部隊が重信川の南を下り、屯田原に屯集し居れるものとの戦ならん。又一節に播磨塚山崎の西南、及田窪以西は、其の当時の戦より推測するも大なる森林にてありしものと考定すると云えり。之は徳威原の事ならん。

（平成21年9月28日記す）

## 星ノ岡・平井城の戦い

### ③首なし馬の伝説

副会長 二神 俊一

#### 1 明神鼻城跡

平成21年10月12日、体育の日。二神浩三会長、二神英臣事務局長、豊田渉常任理事と私が、予ねて連絡をとっていた松山市平井町の豊田仁志氏宅を訪ね、豊田仁志氏の案内で、近くの明神鼻城跡などを探索した。

小野小学校の西の与力橋から小野川沿いに900メートルばかりさかのぼると、小野川向いに明神鼻がみえる。その山の麓には明神鼻



明神鼻と明神鼻池遠景



池からさらに接近して明神鼻<sup>みょうじんがはな</sup>の三角点を見上げた所  
(中央の鉄塔の下あたりに三角点がある)



明神鼻<sup>みょうじんがはな</sup>の三角点から松山平野（小野平野）を望む

池がある。その池の右手の山道を登っていくと、三叉路につきあたり、そこを左におれて、すぐ小高いところへ登ると、三角点がある。

三角点<sup>みょうしんがはな</sup>が明神鼻城の跡だといわれている。豊田仁志氏も小学校頃に登った記憶を辿りながら小道を登って行き、三角点はすぐに見つかった。雑木が茂っていたが、そこからは松山平野を見渡すことができた。明神鼻城<sup>みょうしんがはな</sup>には、得能家の家臣の井門（いど）氏が住んでいたそうで、元弘3年（1333年）の星岡から平井にかけての戦いで、当時の城主が大いに戦い、幕府方の軍勢にうちかった。

（注1）電話帖によれば、松山市内の豊田姓は170軒ほどあり、うち、平井町には、約12%、約20軒の豊田姓が点在していることが判明した。

（注2）1333年に平井城の戦が行われたのが、まさに（この時の平井城は明神鼻城<sup>みょうしんがはな</sup>のことらしい）当地域である。当時、平井城（明神鼻城）を守っていたのが、得能氏の軍勢であり、ここで、河野氏一族の土居氏、得能氏と幕府方の北条時直の軍が激しい戦をした。

## 2 首なし馬の伝説

『小野村誌』によれば、「元弘3年（1333年）3月、北条時直が、伊予の官軍、土居、得能の両氏を一挙に打ち破らんと、西国の軍勢を挙って、急に攻めてきた。この時、伊予の義臣たちは平井城を最後に踏み止まり、明神鼻にかけて激戦となった。このことは、諸書に見られ戦死者の名も記されている。ここに、この激戦にまつわる伝説が残っている。」

「毎年旧暦3月頃になると、暗い晩に限って、四辺静かになり何かおこりそうだと感じていると、明神鼻<sup>みょうしんがはな</sup>とおもわれるあたりから、“シャンチキ、シャンチキ、シャンチキ”という音が起こり、平井城跡の方へ何か近づいて来る。人々がこわごわ障子の隙間から覗い

てみると、血まみれの馬が乗る人もなく進んでくる。よく見ると、その馬には頭がなく、しかも馬を引いている人もいない。その鞍の様子から想像すると、名のある大将の乗馬である。“シャンチキ、シャンチキ、シャンチキ”の音は、ますます激しくなって、一種凄惨な風を伴って、たてがみを靡かせながら、馬は進んでいく。これを見た人は、一瞬“ぞーっ”と身の毛がよだち、気を失ってしまうほどであったという。

この首なし馬は、ノボリウチから平井城跡を見、さらに西に向かい、畑中<sup>はたけなか</sup>鋤先池（現在の徳阿弥池＝伊予鉄道平井駅の前に讃岐街道（金刀比羅街道ともよんでいる）があり、その讃岐街道に沿って徳阿弥池がある）から旧道（現在の讃岐街道）を西に下がり、鷹ノ子、久米に進み、来住<sup>きし</sup>から星岡<sup>ほしがわか</sup>の五カ森あたりで消えてしまう。

この道筋に当たる人に限ってこの「首なし馬」を見るといわれている。

この話は、元弘3年3月の激戦に恨みを吞んで戦死した人馬の魂が、仏になりきれず、いつまでも、味方のあとを追い続けているのだといわれている。」

（注3）私の実家（平井町、大正11年、平井谷、苅屋、畑中<sup>はたけなか</sup>の3部落を合併して平井部落を置いた）は以前から、この讃岐街道沿いにあり、正に、平井城跡から畑中<sup>はたけなか</sup>を西に向かう道沿いに居を構えている。

幼少の頃、この首なし馬の話を知り、怖かった記憶がある。

なお、今回、明神鼻城跡<sup>みょうしんがはな</sup>を案内して頂いた豊田仁志氏は、平井町（苅屋）に居を構えていて、お墓の調査（千福寺＝真言宗、の北側100mくらいの場所にある）でも協力していただきました。

(注4) 資料

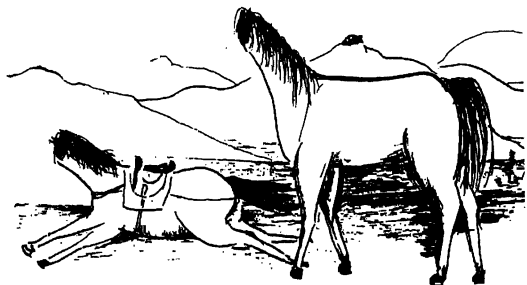
「小野村史」(昭和35年5月1日発行)

発行者 小野村長 宮内順市郎

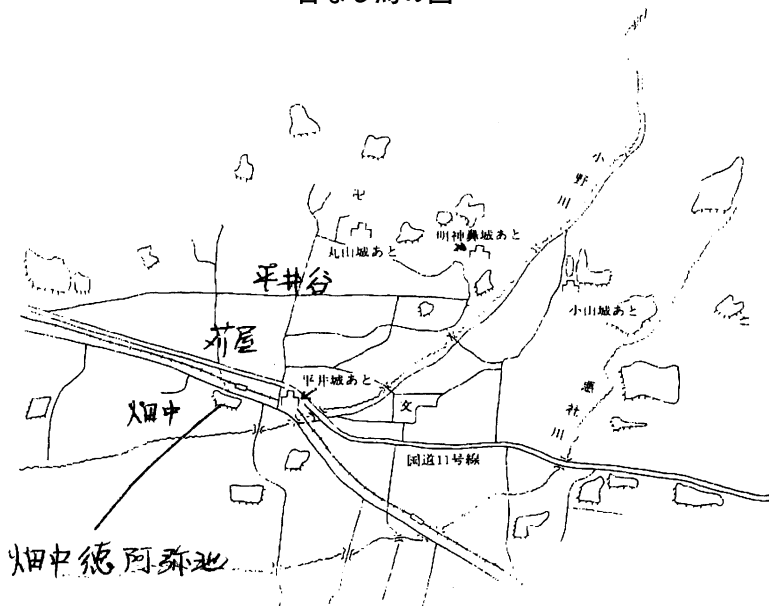
「郷土読本 ふるさと小野」(昭和57年3月24日発行)

編集 松山市立小野小学校

(「ふるさと小野」編集委員会)



首なし馬の図



小野地区の城址分布図



豊田姓のお墓が沢山ある墓地の調査

(平成21年10月18日記す)

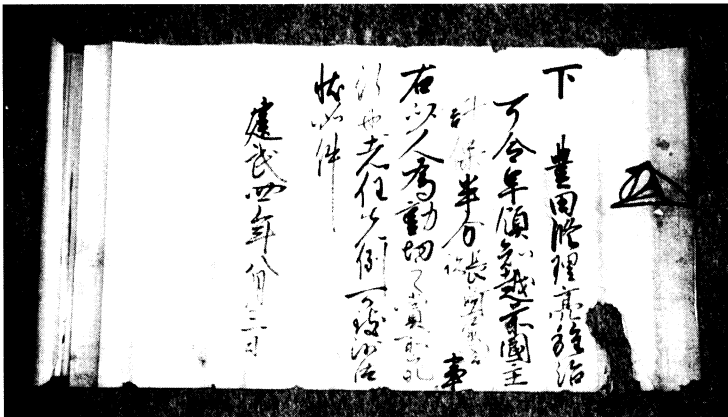
## 幕府から豊田種治宛ての下し文

このことについては、「海の民ふたがみ第8号」の14ページ～20ページに、二神浩三会長が詳しく述べられているので、詳しくはそちらを参照いただきたい。今回は、簡単な紹介にとどめたい。

この文書は、幕府から豊田種治宛てのものであり、綾延神社元宮司豊田栄年氏が所蔵しているものである。豊田二神略系図によると、二神島に移った豊田種家の叔父とされる人物である。種治は、種藤の子となっている。「本妻の子ではあるが、私生児のため総領を継がなかった」とある。

南北朝時代、種治は、新日吉（いまひえ）神社の社領を掠奪したことで豊前・宇佐に流されたとある。種治と伊予丹原の綾延神社とがどのような経緯で繋がるのかは、はっきりしないものの文書が残っているのは事実である。

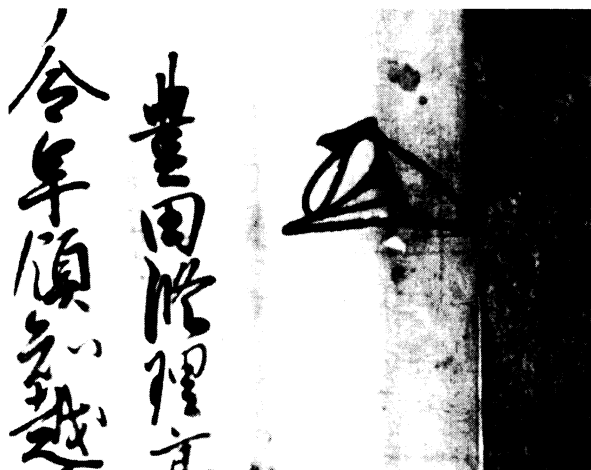
幕府から種治へ「越前国主計保半分 長崎左衛門入道跡」を宛がわれている。「主計保（かずえのほ）」は、現在の、福井市の南方約8kmの地域で鯖江市と福井市の間付近で、朝倉氏が居城とした一乗谷にも近いところにある。



足利尊氏の花押がある宛状



文書に遺されている足利尊氏の花押と綾延神社にある文書の花押を参考までに紹介する。



足利尊氏の花押がある宛状のアップ



足利尊氏の花押

幕府は、建武3年2月、京都を放棄し九州に下った。その後、筑前多々良浜の戦いで勢力を立て直し、湊川の戦いで新田義貞・楠木正成軍を破り、6月に再び京都を制圧した。

この下し文について、景浦勉氏は、「伊予史談183号（昭和41年11月）」で、次のように書かれている。「この文書は写しのようなものであるが、これによると南北朝初期の動乱期にあたり、土豪であった種治は武家方となって活躍したため、その功労によって幕府から、越前国の領地を給与されたことがわかる。」

## Ⅱ 大内氏

大内氏（おおうちし）は日本の氏族の一つ。周防国を本拠とする守護大名、戦国大名に成長した一族、周防大内氏が著名である。家紋は「大内花菱」。

### 多々良姓大内氏概略

#### 出自

日本の武家はいわゆる「源平藤橘」やその他の中央の貴族の末裔を称することが多いが、大内氏は、百済の聖明王の第3皇子である琳聖太子の後裔と称している。琳聖太子が日本に渡り、周防国多々良浜に着岸したことから「多々良」と名乗り、後に大内村に居住したことから大内を名字としたとする。しかし、琳聖太子の記録は古代には無く、大内氏が琳聖太子後裔を名乗るのは14世紀以降とされるため、この伝説は信憑性に乏しい。代々周防国で、周防権介を世襲した在庁官人の出であること以外は不明である。

#### 平安・鎌倉時代

平安時代後期の仁平2年（1152年）に発給された在庁下文に、多々良氏3名が署名している。これが多々良氏の初見であり、この頃すでに在庁官人として大きな勢力を持ち始めたと推定される。平安時代末期の当主多々良盛房は、周防で最有力の実力者となり、周防権介に任じられた。その後、盛房は大内介と名乗り、以降歴代の当主もこれを世襲した。

鎌倉時代になると、大内一族は周防の国衙在庁を完全に支配下に置き、実質的な周防の支配者となった。そして鎌倉幕府御家人として、六波羅探題評定衆に任命されている。

## 南北朝時代

南北朝時代に入ると家督争いが起こり、当主・大内弘幸と叔父の大内長弘が抗争した。

大内弘幸の子・大内弘世は、長門国守護の厚東氏と戦い、正平13年（1358年）にその拠点霜降城を攻略して厚東氏を九州に逐った。これにより大内氏の勢力は周防と長門の2カ国に拡大した。弘世は本拠地を山口（山口県）に移し、正平18年（1363年）に幕府に帰服した。

大内弘世の跡を継いだ大内義弘は、今川貞世（了俊）の九州制圧に従軍し、南朝との南北朝合一でも仲介を務め、明德2年（1391年）には山名氏の反乱である明德の乱でも活躍した。結果、和泉・紀伊・周防・長門・豊前・石見の6カ国を領する守護大名となり、李氏朝鮮とも独自の貿易を行うなどして大内氏の最盛期を築き上げた。しかし義弘の勢力を危険視した第3代将軍・足利義満の挑発に乗った義弘は、鎌倉公方の足利満兼と共謀して、応永6年（1399年）に堺で挙兵するも敗死した（応永の乱）。義弘の死後、再び家督を巡っての抗争が起こり、大内家の勢力は一時的に衰退した。しかし周防・長門の守護職は義弘の弟である大内弘茂に安堵された。

## 室町・戦国時代

大内盛見は、義弘時代の栄華を取り戻すため、北九州方面に進出した。幕府の信任を得たものの、少弐氏・大友氏との戦いに敗れ、永享3年（1431年）に大内盛見は敗死する。しかし、後継の大内持世は盛見に匹敵する人物であり、足利義教の信任を受け少弐氏・大友氏を征伐するなど、大内氏の北九州における優位を確立した。

大内持世は嘉吉元年（1441年）の嘉吉の乱に巻き込まれ非業の死を遂げるが、養子の大内教弘が勢力を引き継いだ。大内教弘の子・大内政弘は、応仁元年（1467年）から始まる応仁の乱で西軍の山名宗全に属して勇名を馳せ、乱の終結後は、九州での復権を目論んで挙兵した少弐氏・大友氏を再び屈服させた。それだけに留まらず室町幕府にも

影響力を及ぼす守護大名としての地位を保持し続けた。

大内政弘の後を継いだ大内義興は、少弐氏を一時滅亡に迫りやるなど北九州・中国地方の覇権を確立し、その勢力基盤を確固たるものとした。そして京都を追われた放浪将軍・足利義植を保護した。永正5年（1508年）に細川高国と協力し、足利義植を擁して中国・九州勢を率いて上洛を果たした。上洛後は管領代として、室町幕政を執行し、表面上は一大勢力を築き上げた。しかし長期の在京は、大内氏にとっても、その傘下の国人や豪族にとっても大きな負担となり、先に帰国した安芸武田氏の武田元繁や出雲国の尼子経久らが大内領を侵略し、足元を脅かす存在となった。その対応に苦慮した義興は京都を引き払い帰国して、尼子氏や安芸武田氏と戦った。

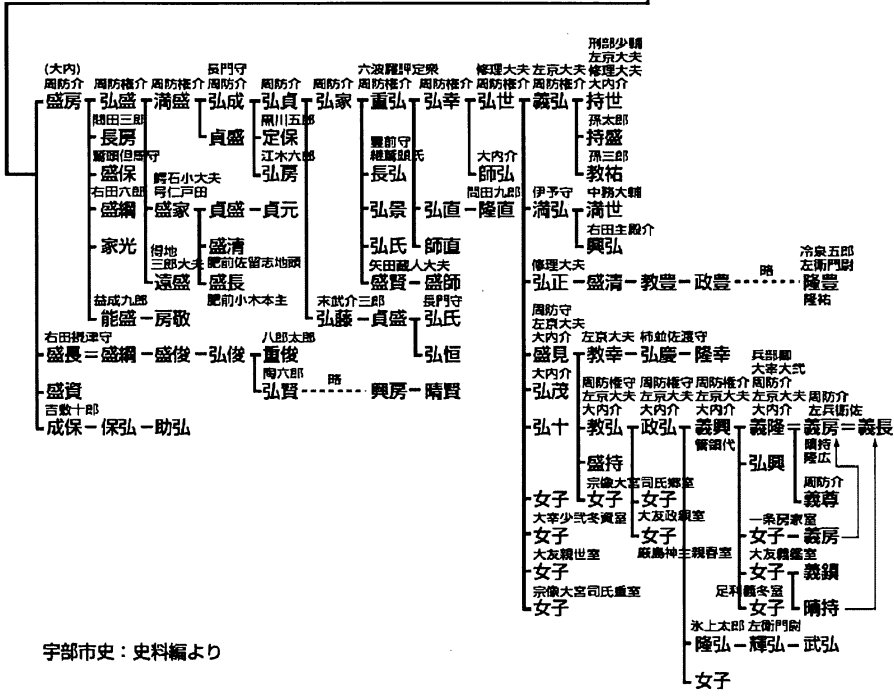
享禄元年（1528年）、大内義興が死去すると、嫡子の大内義隆が家督を継いだ。この時代には周防をはじめ、長門・石見・安芸・備後・豊前・筑前を領するなど、名実共に西国随一の戦国大名となり、大内家は全盛期を迎えた。さらには細川氏とも争って明との交易を独占し、さらに義隆が学問・芸術に熱心で、キリスト教布教を許し、公家や宣教師を積極的に保護したことから、大内領内には独特の山口文化（大内文化）が生まれ、文化的にも全盛期を迎えた。

## 衰退

大内義隆は陶興房や内藤興盛等の優秀な家臣に補佐されて、出雲の尼子経久・尼子晴久、筑前の少弐資元・少弐冬尚らと戦う一方、豊後の大友義鑑や安芸の毛利元就などとは何度か戦うも、最終的に融和策を講じた。また内紛の起きていた厳島神主家の家督争いにも介入している。天文5年（1536年）には少弐氏を再び滅亡に迫りやり、天文9年（1540年）から天文10年（1541年）には吉田郡山城の戦いで尼子氏を撃破したが、同年の出雲遠征に敗北し、養子の内藤晴持を失っている。この遠征の失敗により義隆は政務を放棄し、文芸や遊興に耽るようになる。さらに以前から燻っていた陶隆房ら武断派と相良武任を筆

頭とする文治派の対立が激しくなり、大内氏の勢力にも陰りが見え始める。天文20年（1551年）に、大内義隆は武断派の重臣の陶隆房の謀反に遭って、大内義隆は自害する（大寧寺の変）。これにより大内氏は急速に衰退し始めた。なお、これによって実質的に大内家は滅亡したとする見解も有力である。

琳聖太子-----多々良正恒-藤根-宗範-茂村-保盛-弘真-貞長-貞成  
 清致  
 盛実



滅亡

大内義隆の死後、陶隆房は以前義隆の猶子であった大友氏出身の大友晴英を当主として擁立、その偏諱を受けて晴賢と改名した。勿論、陶晴賢が実権を掌握し、この大内義長（晴英より改名）を傀儡として

頂点に抱くという形で大内氏は存続した。この晴賢の強引な手法に不満を持つ者も少なくなく、大内義隆の姉婿であった吉見正頼が石見国三本松で反旗を翻す。その反乱の鎮圧の最中に安芸国の最大勢力であった毛利元就も反旗を翻して、安芸国内の陶方の諸城を攻略した。弘治元年（1555年）、安芸国宮島で陶晴賢は毛利元就の奇襲攻撃の前に自害して果てた（厳島の戦い）。

家中を牛耳っていた陶晴賢の死により、大内家内部は最早統制の効かない状況となった。弘治2年（1556年）毛利元就は陶晴賢亡き後の大内領への侵攻を開始した。それにも関わらず杉氏や陶氏、内藤氏が山口周辺で内紛により衝突。親族の吉見氏も毛利氏へと従属。まともな戦闘能力を失った大内義長は、内藤隆世の守る長門国且山城に逃亡。弘治3年（1557年）、大内義長は自害。戦国大名としての大内氏は、この時点で滅亡してしまった（防長経略）。

永禄12年（1569年）、大内氏の生き残りである大内輝弘は、大友宗麟の支援を受け、周防山口に侵攻した。宗麟にとって輝弘は所詮毛利氏の後方攪乱用の捨て駒に過ぎず、一時は、山口の一部占拠に成功するが、北九州より転進してきた毛利軍の逆襲に遭い、逃亡の後、自害した。

## 江戸時代

江戸時代牛久藩主であった山口氏は、大内氏分家であり大内義弘の次男・大内持盛の系統である。明治維新まで譜代大名として存続した。

※以上、ホームページより参考抜粋

# 大内義隆公次男・幾代丸の話

以上、大内氏について紹介しましたが、次に、大内義隆の男児、豊田幾代丸のことや大内氏にかかわる伊予での豊田氏（二神氏）の関連について紹介したい。

## 1 利重忠氏による幾代丸の推論

山口県地方史学会及び長門市郷土文化研究会の利重忠氏が、大内義隆の男児について書かれた論文があるので、先ず紹介したい。

天文20年（1551）8月下旬、重臣陶晴賢の謀反により大内義隆は山口を脱出し、大津郡深川の大寧寺で9月1日に自害した。

この時点で、義隆には大内氏系図によると、次の男児があった。義尊・弘盛・義教（御郷）・亀鶴（問田）の4人であった。彼らの母親は全部違っている。大内氏研究家達の一致した見方は、義隆の実子は、これ以外にも何人かいたということである。

陶晴賢は、義隆を自害させたあと、豊後から大友義鑑の次男晴英（後の大内義長）を山口に招いて義隆の後継者とした。晴英は、大内義隆の姉が大友義鑑のもとに嫁いで産んだ子であり、山口に来たのは13歳。大内義長と名を改め、陶晴賢を後見役とする大内新体制の頂点に立ったのである。

この体制を確固たるものにするため、反対派や義隆の遺児たちには厳しい監視の目を向けた。そのような状況下で、周防・長門にいるよりも安全な地へ逃れ住もうとするのは当然なことであろう。この傾向がさらに強まったのは、防長両国が毛利元就に支配されてからのことである。

弘治元年（1555）、元就は巖島の戦いで陶晴賢を破り、2年後の弘治3年に大内義長を討って、大内氏を滅亡させた。これによって、元就は防長両国を完全に支配下に置いたのである。これ以後、毛利

氏は特に大内氏再興の動きを警戒したのである。北条氏の布屋の始祖、幾代丸もこうした状況のもとで、伊予国へ逃れたものと思われる。

問題は、義隆の遺児としての幾代丸の存在を推理したのが、次の3つの場合であります。

### ① 義尊が生存していた場合

義尊は、義隆の側室おさいの方が産んだ子どもで、当時7歳（12歳という説も）の義尊は、義隆の自殺後、大寧寺の異雪和尚が義隆に依頼され、義尊を助けるため寺から連れ出し、西方数キロの地、俵山まで逃れたが追手の兵に殺害されたことになっている。

しかし、これを疑問視する人もいる。異雪和尚は、義隆と親交もあり、高僧としての権威もあったから、義尊を容易に助けることができたのではあるまいか。その俵山から南方へ十余キロ離れた場所に、義隆に好意を持っていた豊田氏の居城があった。義尊が、この豊田氏のもとに引き渡されたら、さらに安全な地へ逃れることができると考えられる。

もし、これを幾代丸と想定すれば、その後、幾之進本義と改名し、寛永14年（1637）93歳で没したとあるから、逆算すればちょうど義尊の年齢に一致する。

### ② 亀鶴（問田）が助けられた場合

亀鶴は、内藤興盛の娘が義隆の側室となって産んだ子どもである。義隆の自害したときは5歳。内藤氏は、山口の問田に住んでいたので、問田殿とも呼んでいた。

弘治3年（1557）4月、大内義長が自害し、大内氏が滅んだ後、この年の11月10日、大内氏の遺臣草場越中守、小原加賀守、河越伊豆守らが、当時11歳になっていた亀鶴を盛り立てて、山口の障子岳に大内再興の旗揚げをした。



毛利元就は、これを討伐すべく、当時、既に毛利家の家臣となっていた内藤隆春に命じてこれを討たせた。此の時に、亀鶴は殺害されたことになっている。内藤隆春は、亀鶴の母の弟であり、叔父・甥の関係にある。肉親の情愛は昔も今も変わるものではない。隆春が、亀鶴を助けて安全な地へ逃れさすことは不可能なことではない。

これに幾代丸を想定すると、年齢に2歳の誤差があるが、それほど問題にすることではあるまい。

③ 記録にはないが、義隆に仕えたその他の女性を母とした場合  
(この中に、豊田氏出身の女性がいたかもしれない)

この場合、遺児が何人いたかは不明である。

以上、いずれの場合を考えても伊予国へ逃れる場合、そこには必ず豊田氏の関与があったと考えられる。それは、豊田氏が早くから伊予国と深い関係を持っていたからである。このことについて、今少し、ふれておこう。

豊田氏は元来、藤原氏の一族である。平安時代の中頃、長門国豊田郡の郡司として赴任していたが、後、この地に土着して豊田氏を名乗ったのである。その後、豊田氏は繁栄を重ねたが、室町時代の正平年間（1346～1370）に一族の中にで内紛が起こり、その一族が伊予国の二神島に移住した。その後、この豊田氏の一派は二神氏を名乗ることになった。しかし、長門の豊田氏との交流は、その後も続いたようである。

こうした事情から、豊田氏及び二神氏を通して、伊予国へ逃れ住むことは、前述のいずれの場合を想定しても容易なことであったに違いない。

以上、3つの場合は、単なる推論にすぎませんが、今後とも研究を進めていきたいと思っています。

## 2 伊予・法善寺を建立した豊田幾之進

愛媛県北条辻にある、日蓮宗本妙山法善寺の由来記について紹介したい。ここに、大内義隆公の遺児「幾之進」君の話がある。

天文20年（1551）山口の領主第31代大内義隆公は、家臣陶隆房（のち晴賢）の謀反により、9月1日長門湯本の大寧寺にて45歳の若さで自刃。次男の幾代丸君は、御歳7歳にして伊予国風早の地に落ち延びて、北条にて酒造を営むに至り、屋号を布屋と称し、姓を豊田、名を幾之進本義と改めた。

大内義隆公（常信院殿法寿日劔大居士）の菩提と布屋豊田家の繁栄を祈り、開山本妙院日法上人を招いて元亀元年（1570）2月15日上難波の寺之谷の地に法善寺を創立した。しかし、隣寺の火災を契機に、これより前の貞応2年（1223）3月28日北条の地埋め立ての際、人柱となった貞松姫と多喜姫を弔うため、埋葬の地である現在地へ移転した。

尚、豊田幾之進本義と妻節女の墓は、法善寺の境内にあり、  
豊田幾之進本義

保眞院殿浄本日義大居士 寛永14年（1637）1月8日没 享年93歳  
同妻節女

壽性院殿妙春日理大姉 寛永17年（1641）2月9日没 享年95歳  
2基の立派な五輪塔が寄り添うように並び眠っている。



法善寺（松山市北条辻）



豊田幾之進夫妻の墓石



豊田幾之進夫妻墓地案内

景福琳聖太子者 推古天皇十一年百濟國降化人也 帝勅賜出陽八列以內為氏乃修大宰大貳從二位大納言子孫受業承九百餘年武成赫然以若  
 宮下八上兵部卿奉隆驍德壽皇太后官陶尾聖皇時賢諱及於子長法泉皇有一男福養代九猶在禰禰具臣佐木信倫開府道籍奉來奔於伊勢  
 大正元承養代九年甫一思賊再侵改氏豐田更名本我種族之進終隱民間而開酒肆任風早郎位後復寬文丁未秋八月以病  
 卒于家因葬法善寺法諱曰保貞院淨本日教居士是布屋氏之祖也其妻妙春靈女者黑川刑部少輔隆像之女也初隆像屬大  
 內氏居防州德山城戰而死奉隆之難有女名節姬其臣真鍋彌作言言奉之同奔于伊豫長而遂嫁豐田氏至四男各分產傳業到今日  
 先師逢公者豐田氏之孫九所門子也初而釋氏諱曰覺亮貞後遊京師修練於護國寺具平功也兼觀天台法華之淵源諸明主之南部功蓋  
 一山德聞四方既而住金砂山再移妙立寺轉號覺山之地創積善積德後應 國君之招遂住于妙向山覺度諸法靈應甚奇故法古之靈虎教門之良龍也

大師逢公者豐田氏五代之孫權冠衛門了諱三三之隨先師逢公到道言者福田法藏名者各父孫出於此字不既逢公曾持諱玄又而部  
 性才聰敏而性一無倦也始住妙立山又輔任本妙山後應 召住于妙向山守公不信其言之確正不出山也 其孫正即淨入第三子也  
 其孫泰西師行儀在法名尚鶴記又登山科營合研精常思探述不之異旨逆諸之其後歷衆請初住持公亦不承讓出後奉 君命身住妙向  
 山而歸隱至于朝無於常養之由宿因而突現異外助同列法天弟家 國屋春遇瑞世官利荒也九公歷世之靈福為封贈諱云之術標也  
 其天皇故康平之應和先子出家之孫云金言者由我葉後之宮不讓參之三人無邊願法同感無常無常託而即奉以列諸公傳為報謝云爾

拙偈曰  
 城北布金地 傳法報君恩  
 欽修華實本 永奉世雄尊

維普文化第十卷丙五卷  
 法華精舍 日蓮 謹識

法善寺の御厨子扉裏にある由来記

## 豊田家出身僧位牌扉文

「曩祖、琳聖大子は推古帝十九年百濟國の帰化人也。帝、勅して山陽八列を賜い大内を以て氏と為す。乃ち、大宰大貳從二位大納言に任ず。子孫業を受くること九百餘年、武威赫然として以て著る也。第二十八主、兵部卿義隆と曰い驕逸にして度し無し。其の臣陶尾張の守晴賢謀反し、之を長州に弑す。法泉寺に一男有り、幾代丸と称し、猶襁褓（おしめ）に在り。其の臣佐々木信衛門春近竊かに奉じ来りて伊豫に奔る。天正元（1573）年癸丑幾代丸、年甫めて十一。賊再び侵すを恐れ氏を豊田に更に名を本義に改め幾之進と稱し、終に民間に隠れ、而して酒肆を開き風早郡辻街に住す。後、寛文丁未秋八月病を以って家に卒す。因りて法善寺に葬り法諱を保眞院（殿）淨本日義（大）居士と曰う。是れ布屋氏の祖也。

其の妻妙春靈女は黒川刑部少輔隆像の娘也。初め隆像大内氏に屬し防列徳山城に居す。戦いて義隆の難に死す。娘有り名は節姫、其の臣眞鍋彌作兼吉、之を奉じ、同じく伊豫に奔る。長じて遂に豊田氏に嫁ぐ。四男を産み、各々産を分け業を傳え今日に到ると云う。

先師逢公（本具院日逢上人）は豊田氏四代の孫、六左衛門の子也。幼くして釋氏に帰し、諱は覺亮と曰う。笈を負い京師に遊び護国寺に於いて修練す。其の卒するや功おう也。兼て天台法華の淵源を窺い、玄文兩部を講明す。功は一山を蓋おい、徳は四方に聞こゆ。既にして本妙山（法善寺）に従し、再び妙立山（大法寺十一世）に移り、又、鷲榮山（妙清寺九世）に轉じ、又積善精舎を草創す。後、國君之招きに應じ遂に妙向山（法華寺十世）に住す。廣く郡生を度し、普く衆盲を化す。誠に法中之義虎釈門之良龍也。（法善寺第七世・積善寺開山、寶歴十二（1762）年三月二十四日遷化、行年八十二歳）

次師遵公（遠成院日遵上人）は豊田氏五代の孫、権左衛門了融の第

三子也。先師逢公の訓導に随い福田法服、名は学隆と著す。又、山科學林に籍す。既に台當之奥旨に達し、特に玄文兩部を講ず。性質聡敏に而て化導して倦む無き也。始め妙立山（大法寺十四世）に住し、又本妙山（法善寺）に轉任す。後、招に應じて妙向山に住す。實に才徳兼全の硯匠也。（天明九（1789）年一月二十二日遷化）

不肖祥也（誠興院日祥上人）豊田氏五代の孫平四郎淨久の第三子也。兩師の徳風を景慕し薙染（剃髮墨染）し、名づけて鶴瑞と曰う。又、山科學舎に登り、研精覃思し、迹本の異目を探り、遂に玄義を講ず。後衆請に随う。初め伏水慈現山に住持し、後、君命を奉じ妙向山に見住す。竊かに同宗三子を惟い、窮巷の中に生くると雖も宿因内に契り、現果外に助け、同じく法に列なる三末弟は国君の眷遇を蒙り瑞世の官刹に先公歴世の冥福を薦め、封疆謐寧（国域安らか）の祈禳を為す。

竊かに天幸を喜ぶこと此くの如く、祖先を辱め不ることを庶（こいねが）う。一子出家すれば九族天に生まるの金言は由有る哉。冀後來の子弟謹しみて之を念い共に無辺の願海に入りて無漏の果報を同感せよ。謹みて兩師の徳を記し、以って諸木牌に刻む。聊か報謝と為すと爾か云う。

拙偈曰ク、城北布金地 傳法報君恩 欽修華實本 永奉世雄尊  
（城北に金の地を布き、法を傳えて君恩に報う。欽んで華実の本を修め、永く世雄の尊を奉る。）

維告、文化第十（1813）癸酉 孟春 法華精舎 日祥 謹識  
（松山市法華寺第十四世、誠興院日祥上人、弘化三（1846）年十月十八日遷化）

【以上、原文はすべて漢文体】※この漢文は豊田和平氏奥様の弟、荻家寛一郎先生に和訳をして戴きました。

### 3 「豊田家系譜」に見る義隆公の遺児たち

#### ～大内家と豊田家と法善寺～

大内義隆の次男幾代丸のことは、北条・法善寺の御厨子扉裏に書かれたものしか資料がありませんでしたが、その後、「豊田家系譜」が発見されました。そのことについて、法善寺のご住職の記録から紹介します。

法善寺の創立は、元亀元年（1570）ですが、豊田幾之進さんが大内家の菩提と豊田家の繁栄を祈念して、本妙院日法上人を招いて建立されたと伝えられていました。しかし、古文書等の資料がなく、本堂に祭る豊田家出身の三人のお上人（法善寺7世本具院日逢上人、準歴代日遵上人、松山法華寺第14世誠興院日祥上人）の御厨子扉の裏に漢文で書かれたものしか、現存しませんでした。

平成10年5月14日に、神戸の松本有容さんが、突然、「布屋を知りませんか？」と法善寺に訪ねてこられました。松本さんは、北条豊田本家の御子孫にあたるとのこと。お話を伺うほど、法善寺や北条の豊田家で代々伝えられてきた内容と全く同じでびっくりしました。惜しくも、豊田家の由来・過去帳が紛失して手元に無いとのことでした。

翌年の3月28日、北条・豊田百合子さんのご主人亀三郎さんの十三回忌法要の際、偶然にも「豊田家系譜」の写しが発見されました。分家の豊田定一さんが、昭和7年に書写された約120ページにも亘るもので、大内家～豊田家の経緯が記されていました。

その4月7日には、大阪の黒田悦子さんから、別の「豊田家系譜（系譜Ⅱ）」が送られてきました。これは、昭和20年3月14日大阪大空襲の際、焼夷弾の降る中、兄の嘉彦さんによって焼失を免れたとのこと。これも、約90ページに亘る貴重な資料です。

（1999年12月29日記）

## 【豊田家系譜】



落款（直而靜）  
天 壤 無 窮

昭和七年拾壹月  
峰松齋一雲書（峰松齋）（一雲）

豊田家系譜 伊豫松山領風早郡北條町  
豊田家由来并系圖之寫

抑、先祖ハ百濟國ノ始祖都慕大王に始まり其第拾參代威徳王第三王子琳聖太子推古天皇之十九年本朝に移り来里同帝能思召に因りて山陽八箇國を賜はり子々孫々相嗣ぎ武を煉り勇を磨き傍ら殖産工業及び鋳業を奨め尚ほ海外貿易を司り其富強海内無雙と称えられ且は第四十式代大内義弘に至りて南北兩朝統一に盡して大功有り。第四十六代大内義隆に至りてハ實に覇を争ふ者之無き迄に富強昂り志が茲に於て心漸く驕りて文弱に流れて政道を疎かにし為めに此ノ虚に乗ぜられ遂に逆臣乃起りて主家を滅ぼせり。當時幼遺子の幾代丸君伊豫國風早郡（風早郡とは現在之温泉郡の一部にして温泉郡に合併せらる）北條町に落ち延び来り天正元年姓を豊田と改め業を営むに至りて屋号も布屋と称へ連綿として今日に至れるもの也

本書一子相傳不出門外不繙妄者此儀堅相守可申者也

昭和七年十一月 第六十式代孫 豊田 定一

初代 百濟國大祖 都慕大王、第二代 直支王、第三代 阿美王、第四代 腆支王、第五代 久爾辛王、第六代 毘有王、第七代 蓋圖王、第八代 文園王、第九代 三斥王、第十代 東城王、第十一代 武寧王、第十二代



聖王、第十三代 威徳王、(第十四代 恵王、第十五代 法王、第十六代 辰爾王、第十七代武王、第十八代義慈王、第十九代豊璋王、第廿代禪廣) 第十四代琳聖太子義照、第十五代道照王義光、第十六代道法王義道、第十七代 道忠王義治、第十八代 道房王義方、第十九代道経王義清、第廿代道政王義経、第廿一代 道定王義頼、第廿二代道清王義定、第廿三代 道俊王義貞、第廿四代 道美王義道、第廿五代 俊忠王義塞、第廿六代俊実王義行、第廿七代 俊照王義政、第廿八代 俊成王義表、第廿九代 俊重王義巴、第三十代家玄王義平、第三十一代家萬王義元、第三十二代家満王義英、第三十三代家定王義満、第三十四代家徳王義安、第三十五代家房王義兼、第三十六代家平王義成、第三十七代家吉王義家、第三十八代家埜王義之、第三十九代 大内之介、第四十代 大内弘道、第四十一代 大内弘世、第四十二代 大内義弘、第四十三代 大内持世、第四十四代 大内政弘、第四十五代 大内義興、(73ページ内容省略)

第四十六代 大内義隆、(もう一冊の系図Ⅱには66代・歴史上では31代)

義興没後其の子義隆が享禄元年家督を嗣げり。義隆は中国之豪族尼子氏を滅ぼして因幡伯耆武国を併合し周防山口に根拠を設けて、明と交通し彼我の往来殊に繁くなり。武力を背景として數々朝鮮より仏寺の修繕費及び経文を求め儒者漢籍其他学者の渡来を大いに歓迎せり。山口之文化を進めしハ一面朝鮮文化之影響を受けたるものなり。後世大内板の体裁ハ全く高麗板を模し多るなるべし。又当時之皇室之式微ハ殊に甚敷り後奈良天皇ハ践祚より十年経過後、大内義隆之金貳十萬疋の献金に因つて始めて即位禮を行ひ給へり。又宮殿之修理日美門脩築も成りて義隆ハ大宰太貳に昇進し、天文十七年には従二位大納言に進めり。大内氏の黄金時代を代表するものハ義隆で其の居城の有る山口は西之京と呼ばれる程の大都市で其の所にハ京都の文化が輸入せられ学問藝術・浏览歡喜悦楽之浄土たるが如き觀がありしなり。大内家

を其く偉大ならしめたるものにハ素より其ノ家柄勲等にも與かつて力有りしが、久しく外国貿易を管理して其れより非常なる利益を得たる事の重因をなして居る。応仁の乱後、京都の公卿輩が難を避けて山口に落付く者が多く為に京都を山口に移さむと市街を改造して京都に劣らぬ壯麗なるものとせり。又町名之如きも京都の其れに故ひ其の当時の所在を町名に用ひたり。

其の吉敷郡大内村にハ其ノ別館を置き又重臣陶氏にハ莊園を与へ陶村と称せり。義隆公も祖先以来之功績に因り愈々に強大となり、並ぶ者無きに至りて漸く心の弛み王朝時代の貴族趣味に心酔して国政を疎かにし情弱優柔之氣風領内に満ち武事は閑却せられ彼れは粉薫を施せし公卿達に囲まれて詩歌管弦の逸樂に耽らぬ日の無き迄に軟化せり。

#### 切支丹宗門官許之事

天文十八年七月廿三日イスパニア人ザヴィエルが鹿児島に到着せり。彼れは印度副王とマラッカ総督とを説ひて自分に判官的性質を帯ぶる旨之書面を与へしめ日本を基督敬の下に置かむと志て印度を出発せしハ全て日本人之信者たるポールヤシロの勸説に依れるものなり。

ザヴィエルは薩摩之領主島津貴久に謁見して布教之許可を受け其ノ年の暮までに百余名の信者を得多るも、仏僧等之迫害に逢ひて鹿児島を見捨て、彼は日本中央政府之所在地に赴かんと周防之山口を訪へり。山口は西の京都と謳われ繁華之中心にして京都を此処に移さんという程之都市で有つ留が城主大内義隆は京都風の公卿之生活様式に心酔して歎喜と淫蕩とに耽るのを其ノ日課と考へて居多。加之惑が有りてとても基督教の道を説くも能、夢想を現実せしめる様な場所ではな可りしなり。

彼れは屢、途上に罵られ辱められ礫さえも投げ付けらるるに至る。彼れは遂に山口を去って京都に向ひしが朝廷も幕府も其レに無力で到底全国に命令志て彼れの布教之安全を保障する様な力が無きのみならず所要之壱萬貫を納める事の不可能之為め甚だ冷遇せられ已むなく半

月計里にして退京して再び山口に入り、印度副王及びマラッカ総督之信書ト宝物を義隆に献ぜり。曾てハ薄汚き乞食坊主と思はれしザヴィエルが式度目に山口へ来りし時にハ金色燦爛たる式服を着し且つ副王や総督の代理と云ふ資格を帯びて居多ので山口之上下ハ酷く驚か左れ多。自然に時を刻む時計不思議な音を出す楽器、珍しい三本筒小銃が宝物として差し出され多時ハ義隆の顔には微笑と怪訝の表情とが浮かべり。斯くして布教之許可を得、町之辻々にハ切支丹宗門官許之制札の立てられたり。彼れは直ちに教会堂を建て、式ヶ月の間に約五百人の改宗者を出せり。

一方仏僧側に於てハ揚言して曰く「耶蘇教宣教師等ハ夜半小児を捕へて之を絞殺し其生血を舐り生肉を食ふ悪鬼之類で有る。頃日夜半悪魔が電光之如き火を国主之宮殿に吹き掛けて居るのを見可けり。其は我神仏之讎敵たる他宗之宣教師を府下に招いた神罰なりと仏僧等ハ国家之紊乱に乗じて人民を惑はし神に供養を志なければ大なる災禍が生ずる」と、云いふらしたが、乱世の事とて反乱騒動は間断なく起り、彼等之言が能く的中し大内家に陶氏之反乱が起って義隆は自殺せり。すると賊共は城下に乱入して人家を焼き略奪を縦にし大内氏之居館も亦焼可れ多。市民ハ其ノ変乱に乗じて私怨を晴らし略奪を行ひ互に殺傷ハヶ月に亘りて残酷なる市街戦可演ぜられた。

良民は城外に脱出せんとするも城兵は関所を扼して外へ出ださず為めに濠に身を投じて死する者さえ有つ多。仏僧等之を見て雀躍し成せし予言之的中せるを誇りとして告げて曰く今回の変事ハ皆神之怒りより起つ多禍で有る。神怒を鎮めるには此ノ騒乱之原因たる邪教者を誅戮せざるべからずと。果してザヴィエルの一身が危うくなりたるを以って彼れハ死を覚悟して居たらしいが日本人の信者に保護されて不思議にも一命を助かり、其ノ年即ち天文二十年十月遂に印度に渡れり。

大内義隆ハ父祖傳來の富強を恃んで漸く奢侈に流れ武備を怠りしが老臣尾張守晴賢が国政を専らにし遂いに兵を挙げ、天文二十年九月御

年三十九歳にて城内にて御生害遊ばさる。法号、常信院殿法壽日劔大居士

斯く大反逆を敢て成したる晴賢に対し大内家の旧臣らは大抵屈従して其ノ非行を責むる者無く、山口の実権を握りて頗る強大となれり。

當時安芸には毛利元就あり大内氏之部将にして方略に富み用兵之術に長じて居た。義隆終りに臨みて遺言を嘱して曰く「吾不孝にして賊臣の殺ぼす所と為り恨みを呑んで地に入る。卿に非ずんば誰か能く我仇を復せん。」(現漢文)元就氏を見て主君復仇の議を諸将に謀る。

小早川隆景進み出でて曰く彼れ狂稲?方に熾にして今争う可らず。宜しく内威力を養ひ外柔弱を示して後、動くべきなりと進言し元就之に従ふ。

斯くて朝廷に乞ひ晴賢を討つ詔を請ひたるも朝廷に於てハ晴賢之非行を聞き將軍管領ニ西伐せ志めんとせるも應ずる者無く遂に元就に詔下る。

元就津和城主吉見正頼之世ニ陶氏に讎有るを知り之に應ぜ廿三年五月元就ハ銀山草津櫻尾之諸城を陥れ南行して草津に至り晴賢と海を隔て、陣す。又陶氏の骨硬之将たる江島興房之琥珀城にも款を通ず。晴賢興房を誅し、防、長、豊前、筑後、石見の兵を集め東下し厳島に陣す。

伊豫に得能・来島の二族ありて水軍晴賢も元就も並びて之を招く。二族之百艘を以て元就に属す。弘治元年十月風雨を待みて警邏するものなし。賊艦を縫ふて「筑前之兵徴に応じて来れり」と船避けて岸に上り、天将に明けんとする頃不意に起ちて晴賢之軍を破る。晴賢肥大にして歩行ニ不便。従者が扶掖して海岸に至り船を求むるも無く進退谷まり此処に自刃す。後、晴賢の首ハ洞雲寺に葬る。

當時義隆公にして斯なる不祥事を惹起せずして剛直に進まんか、(或は)一層海外発展すべきものなるを惜しむべき也。毛利氏ハ陶氏を滅ぼし起ち多れ其の草創之事業多端を極め、海外貿易どころの沙汰でなく、又幕府ハ殆んど倒壊に頻せり。

## 義隆公奥方及び幼児式方の御事

御奥方鶴代御前、並びに御長男竹千代丸君御年十一歳、御次男幾代丸君御年七歳にして、義隆公の御難に遭い給ふ。此の時御三方共々御菩提所にて御生害の用意ありし所へ、其の臣佐々木孫之進及び佐々木信右衛門等之走り寄り涙と共に御諫め申奉り、幼君の御成人を待って御祖先来の御領地奪回を進言して御取り止め申し上げ、一先づ山口を離れて機を窮ふ内、旧臣毛利元就の起こって晴賢を巖島に破り斬射の機を逸す。

## 長男竹千代丸君

此に於て御母君者竹千代君を伴ひ臣等十一騎を従がへ東海道の落ち行き給ひ暫く御遊覧之内常州水戸氏に招かれ一万石之城主となり姓を改め山口周防守となれり。紋に曰く、大内氏の本紋 多々羅菱を用ふ。竹千代丸君御供の臣

佐々木孫之進英勝、同妻未津女、同下男、五百川伊賀之助、多田信太郎、時進之助、浅井源太、永井寛平、松田傳内、久保瀬源右衛門、次男幾代丸君御供の臣、佐々木信右衛門春近・同妻きく女・同下男、亀井進八郎、清川格之進、白石勝太、土居左近、徳野甚五衛門、尾久保染郎、柳井田伸郎、森傳五衛門、宇都宮左傳吾、早瀬四五六、幾代丸君右十一騎其の他を従へさせられ伊豫に落ち給へり。

## 改姓と布屋に號之事 第四十七代豊田幾之進本義

斯くして豫州松山領風早郡北条に渡海有りて、武を捨て屋館を開き、長さ廿弍間、横十五間八ツ棟作り土蔵五棟上下廿八人相勤め酒造りを始めしが日毎に隆盛にして繁盛せり。此地曩に河野氏之都の時より毎年廿六日以後晦日迄、物売人の集ひ来りて市を成し、近郷近在より老若男女の人出多く雑踏を極む之例しなりしが廿六日見すばらしき一老婆乃白布一卷を持ち入り来る有り。

折柄当日者大雪にて寒さ厳しく老婆も憐れ身を震ハし有りければ早

速勝手元にて勞はらしめけり。さる程に老婆も疲れ之出でしや一時計りうとうとと微腫む内ふと眼をさまし冬の日足も早くて日も早西に傾けり、いざ家路を急ぎなんと云う折柄春近不在なりしかば幾代丸君自ら小判一枚取り出だし老婆び与へければ、彼云う様さて御身ハ只人には非らざるべし。茲に福を授け申すべしと持ちたる白布を渡して曰ふ、此布日に七折宛切り取りて跡を捨ず日毎に七折宛裁ち断る時は御身一代にても尽きざるべしと云い終わって失せにける。

折柄春近も帰館したるにより老婆の挙動其の他を詳さに語りければ、春近手を打って歎び、寄なり妙なり之天福皆来之兆なりとて、日毎に之を七折宛裁ち取り、するも尽きず、妙なる哉。斯くして日毎に裁断る中家は富み業は榮ゆ。よって屋号を布屋と称へり。尺の曰、一折ハ鯨尺にて四尺有り、よって七折ハ式丈八尺となる。此時より式丈八尺を一反と云い伝ふ。

天正元年由有りて大内姓を豊田姓に改め、幾代丸君を改名し幾之進本義と号す。

防州山口城より本義公持来り道具、天國（あまぐに）刀 参尺五寸、全 大小大 式尺五寸、小 壹尺五寸、五郎入道正宗、大 式尺七寸、小 壹尺八寸、金小核の鎧 壹領、大見槍 参筋、祖の他道具數々。

#### 義隆公旧臣、黒川刑部少輔隆吉娘之事

天文式十年九月逆臣之叛乱に際し防戦よく努めたるも御武運拙なき義隆公之最期を見届けて隆吉殉す。

其の姫に節女君御年六歳之方、其の臣真辺弥作御供して四国に落ち来り国々回遊の折柄、豫州に來り大内氏の繁栄を聞き伝へて姫を伴ひ訪ね稀れば、春近大いに喜び是を迎へ入れて姫御成長の後申受けて本義君之奥方と定め茲に家運長久之基を築き給へり。

## 法善寺建立之事

斯して業成り名遂ぐ流に及び、兼ての御宿志たる祖先之靈を慰め奉り、且津父君義隆公の菩提之為め、元龜元年三月十五日、一寺を建立し本妙山法善寺と稱え、衆生濟度に尽し給ふ。幾之進君者有徳之為め信徒の帰依する者極めて多く、寺附近に居住するに至り、遂に今日の辻町之繁栄之基礎を作れるものなり。

本妙山法善寺開祖 本妙院日法大和尚（を招請して、元龜元1570年法善寺を建立）

豊田家元祖並びに布屋開祖（法善寺開基檀越）

豊田幾之進本義

保眞院殿浄本日義大居士 寛永十四1637年一月八日没 行年93歳

同妻 節女

壽性院殿妙春日理大姉 寛永十七1641年三月九日没 全95歳  
辻町之東南の菩提所法善寺に葬れり。

長男 豊田七右衛門義國

本理院壽仁日信居士（元禄八1695年五月十九日没）

同妻 きよ

圓壽院妙長日榮大姉（元禄七1694年三月二十一日没）

次男 豊田勘左衛門義定

長園院宗壽日量居士（寶永元1704年四月七日没）

同妻 亀め

圓喜院妙安日隨大姉（元禄八1695年五月三日没）

第四十八代

三男 豊田茂右衛門義信

浄玄院宗保日養居士（享保七1722年十二月十三日没）

同妻 きぬ

榮松院長清日涼大姉（享保十六1731年七月二十二日没）

四男 豊田保兵衛義為

保壽院宗仁日長居士（寶永四1707年一月九日没）

同妻 をよ

壽清院妙遠日珠大姉（正徳二1712年三月一日没）

五男 豊田茂左衛門義忠

淨壽院春海日陽居士（寶曆七1757年三月十二日没）

同妻 以よ

淨心院妙敬日法大姉（寶曆十二1762年二月十三日没）

右兄弟各々別家して、現在乃北条町布屋七家之祖登なれり。（以下の系図は省略）

諡号※本具院日逢聖人（当山七世）寶曆十二1762年三月二十四日没  
（積善寺開山）



# 大内氏の末裔の話

このほかにも、いろいろと大内義隆公をはじめ、大内氏に関わる話が残っているので紹介する。

## 1 中島・熊田地区に残る「岩丸」伝承

大内義隆の側室の子「岩丸」についての伝承が、伊予・中島に残っている。

義隆自刃の後、賢明な乳母と女中に付き添われて忽那島に逃れてきたという。が、それを立証するものはない。

大内義隆の晩年の側室として、公卿広橋兼秀の娘と内藤興守の娘の二人の名が見える。前者には子が無く、後者には、内藤興守一女一亀鶴丸とある。正室には義尊があり、義隆が天文20年（1551）9月1日大寧寺において切腹した、翌2日、義尊も殺害されている。明治22年毛利元徳が墓碑を新たにし、義隆、義尊を並べたという記述があるが、前記、亀鶴丸の墓標もなく、最後の記述も無い。若しかしたら、亀鶴丸が忽那島に逃れ来て岩丸を名乗ったとも考えられる。なお、大寧寺の過去帳に15歳の義隆息女と乳母操、下女お倉の3人の殉職が伝えられているけれども、大内系図にはその記述は見当たらない。

岩丸は賢明な乳母に付き添われて来島したということを信用するほかは無い。分家の宇和間村庄の石丸家から別家を建てた一族が大内氏を名乗っているから、あるいは潜在してきた大内姓を名乗ったとも考えられる。

## 2 山口家の先祖大内重隆の墓

現在の宇和島市津島町楨川に「大内重隆の墓」がある。

周防長門をはじめ、付近7ヶ国の太守としてその名を海外にまで轟かせた大内氏は、31代義隆に至り家臣陶晴賢の謀反により天文20

年（1551）一家滅亡した。

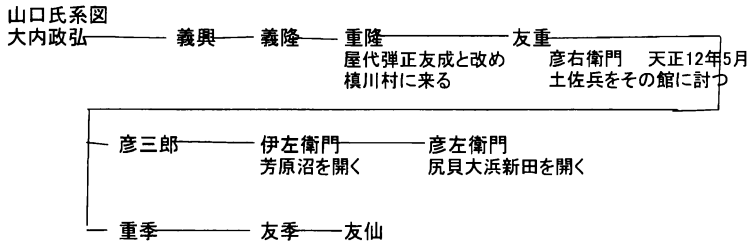
この時、一族のうち重隆公十六歳、難を逃れ四国に渡り津島城主越智通統の領内槇川村に住みつき、山口と姓を変え屋代弾正友成とも名乗り、通顯公に至るまで幼君二代を補佐して、土佐長宗我部勢に対するため砦を築き戦備を整え、天正8年（1580）45歳で亡くなった。

その子友重は、天正8年、土佐奥屋内栗木城を攻め、天正12年には土佐兵を討つ武勇をおさめた。山口彦右衛門友重と改称し、天正15年槇川村の庄官を務めた。

その子彦三郎は、槇川村の庄屋に、その子伊左衛門は篠山の境界線論争の折、正木村庄屋と共に江戸へ行き解決した。その功績により、岩松芳原沼を新田に開墾して芳原村を開いた。その子、彦左衛門は北灘尻貝浦の大浜新田を開いた。



### 山口氏略系図



### 3 あるホームページから

ある時、見つけたホームページ「防長墓城掃苔録」の中に、大内義隆公に関する記述があったので紹介したい。

大内氏の第31代当主・義隆は、天文20年（1551）、長門大寧寺において自刃した。この際、実子7歳（12歳とも）の「義尊」、15歳になる「中将姫」も自害した。弘治3年（1557）には、内藤興盛の娘「問田殿」を母とする「亀鶴」も、毛利側に寝返った内藤隆春に襲われ、自害したという。

その他義隆の子としては、弘盛、義教という人物が系図にある。この兩人については、その後の事蹟等は、はっきりしていないようだ。

しかし、驚いたことに、大内義隆の二男「幾代丸」を先祖とする「豊田」姓の一族がおられるという。この情報はその豊田氏の菩提寺である愛媛県北条市の「法善寺」副住職の村口師から情報提供頂いた。

豊田氏は、代々大内義隆の末裔であることを、一子相伝門外不出の家伝として来られたそうで、法善寺の方々の勧めでそれらの事実を最近になって公開されたという。その為、未だこの事実は多くの人には知られてないようだ。

豊田氏の家伝に拠れば、大内義隆の二男7歳の「幾代丸」が、家臣と共に伊予の風早に落ち、名を豊田幾之進と改め、酒造業を営んだ、その後、父義隆の菩提と、豊田氏の発展を祈念して「法善寺」を建立したということになっている。

興味深いのは、「亀鶴」（＝問田亀鶴丸）と豊田幾之進（幾代丸）との、同じような名前の響である。法善寺筆頭総代山田氏の指摘のように、「問田」→「豊田」、「亀鶴丸」（きかくまる？）→「幾代丸」（きだいまる？）と、確かに不思議な因縁めいたものを感じさせる。残念なのは、家伝のみで、完全な証拠となるような明確な史料がないことである。

余談ながら、豊田幾之進が酒造業を経営したというのは、山中鹿介の子孫が酒造業を営んだ（鴻池家）という話と共通しており、酒造業というのは、大名・武将の子孫には取っ付き易い業種だったのだろうか？と思った。

#### 4 中島・宇和間地区の「多々良介」

伊予史談会に保管されている「大洲領庄屋由来書」（筆者不明）の中に、次のような記載がある。

##### 宇和間村

大内多々良姓、百濟余鞆璋王第三皇子琳聖太子周防着、推古天皇廿□歳崩、六十九才（隆）大内介、後長門守正恒、其子大内介義際、後太宰大貳従二位、防、築、長、芸、備、石之太守、天文廿年石丸良国、後甚左衛門

宇和間村は、現在の松山市中島にある旧大洲領の集落である。参考までに、前述した熊田地区は、安永9年（1780）2月20日に宇和間村から分村している。もともとは1つの村であった。

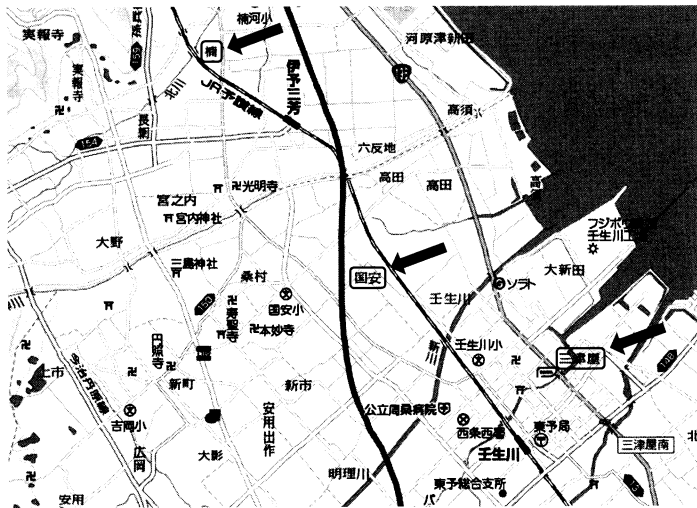
# 系譜、家紋紹介 (No.12)

事務局長・二神英臣

## 東予(とうよ)二神氏<楠、国安、三津屋>

### 1. はじめに

愛媛県は大きく分けて東、中、南の三地域に分類されますが、東部地方のことを東伊予、つまり東予と呼び、行政区域で申しますと今治市、西条市、新居浜市、四国中央市が該当します。因みに、県庁所在地松山市を中心に、東温市、松前町、伊予市などの地域を中予、大洲市、八幡浜市、西予市、宇和島市、愛南町の地域のことを南予と呼んでいて立地条件の違いから地質、気候、人情なども少しずつ異なります。今回の系譜紹介は愛媛県の東予地方の中でも、旧周桑郡地区で現在の西条市に所属し、幕末から明治初年頃に楠村、国安村、三津屋村と呼ばれていた地域にそれぞれ居住されていた三系譜を紹介します。



楠、国安、三津屋二神氏関係地図

## 楠（くすのき）二神氏

### 【由来記】

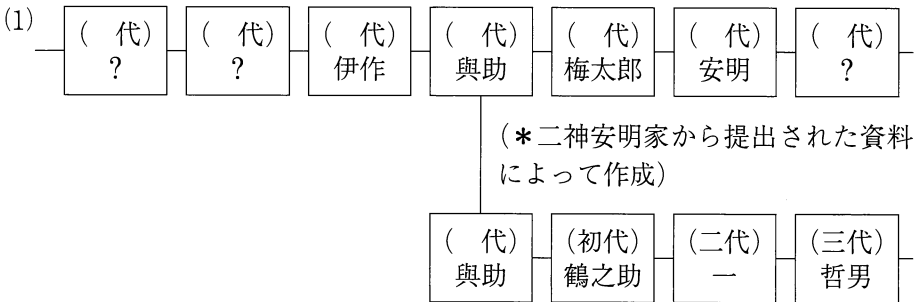
楠二神氏は南北朝時代の歴史的舞台となった世田山城跡や二神氏が長門国豊田氏の時代から崇拝する宇佐八幡神社を村の西北方面に控えた楠村に発展してきた一族です。

正平17年（1362）讃岐国から細川氏が世田山城を攻めた時、寺の一部を焼失した道安寺を菩提寺としている系譜だけに、それに繋がる伝承の存在を確認中ですがこれまでのところ未確認です。

宗家の裏庭には60年程前に二神島の宇佐八幡神社から勧請したと伝わる二神社が建立されています。家紋は「織田瓜」で三津屋二神氏とは異なっています。道安寺境内裏の墓地には古い時代の墓石が少なくまた道安寺の同系譜過去帳にも藩政時代以前の記録がないため今後の調査が待たれます。

| 楠二神氏  |                  |
|-------|------------------|
| 菩提寺   | 道安寺<br>(真言宗高野山派) |
| 神社    | 二神社              |
| 墓地    | 道安寺境内裏           |
| 系図・文書 | 特になし             |
| 家紋    | 織田瓜              |
| 系譜拡大地 | 北九州、近畿           |
| 系譜会員  | 二神哲男、二神正巳        |

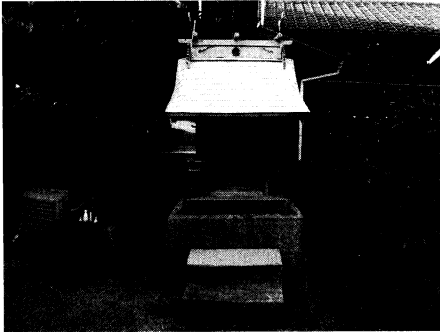
### 【楠二神氏宗家系譜】



(\*二神哲男家から提出された資料によって作成)

## 祖父の代に楠村を後にする

楠二神氏の分家初代になる祖父の鶴之助は大正時代初期、祖母シモと結婚後、福岡県遠賀郡上津役村に農地開拓民として楠村から移ってきました。大正8年には父、一が生まれ分家二代目となりました。父は昨年6月10日に亡くなり、現在私が三代目を継ぎ北九州市八幡西区で理髪業を営んでいます。今回、楠二神氏や東予二神氏の全体像が判明することを楽しみにしています。  
(二神哲男氏手記より構成)



楠二神社



歴代楠二神氏が眠る道安寺墓地

## 国安(くにやす)二神氏

### 【由来記】

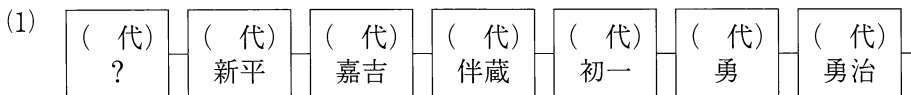
国安二神氏の家紋は三津屋二神氏と同じ「丸に桔梗」紋であり、明治10年8月の畝順帳には二神嘉吉所有の水田が三津屋村に有り元々は三津屋系譜であったと思われます。しかし、菩提寺は国安村の壽聖寺でご先祖はここに祀られていて、墓地も寺

### 国安二神氏

菩提寺……………壽聖寺  
(臨濟宗東福寺派)  
神社……………三島神社  
墓地……………国安村墓地  
系図・文書…特になし  
家紋……………丸に桔梗  
系譜拡大地…九州地区、関西地区  
系譜会員……二神勇

の西方面にある村墓地にあります。どの時代に国安村に移ったのか未確認ですが、「国安二神氏は桜井漆器の月賦販売を全国に拡大するため九州地方へ移住していった一族である」と地元では伝えられており現在では博多、太宰府、田川等で系譜が発展しています。

### 【国安二神氏宗家系譜】



(\*二神勇氏から提出された資料によって作成)

### 桜井漆器を全国へ紹介

国安二神氏のご先祖は山から木を切り出す仕事をしていたと聞いていますが事業に失敗したため国安を離れなければならなくなり、当時最盛を極めていた桜井漆器を月賦販売する事業に乗り出し福岡地方へ移っていったと伝えられています。最近、三津屋二神氏系譜であるとの情報を得たので今後はいつ、誰の時代に国安へ転居していったのか、菩提寺の過去帳が誰の時代から記載されているのかについての確認がされるとより明確になると思います。  
(二神勇氏の話から構成)



壽聖寺山門



国安二神氏墓地



## 三津屋 (みつや) 二神氏

### 【由来記】

「三津屋の二神家と一色家とは昔からの親戚ぞな……」の一言が系譜解明のきっかけとなりました。楠二神氏とは歴史的な位置関係からして系譜由来が異なるとの推察は家紋や菩提寺確認等によっても証明されたようです。「三津屋一色氏家系図伝書略記」に記載された二神善右衛門の存在が三津屋の二神氏の由来を証明しているのではないかと見られます。今後、善右衛門の出自を確定することが焦点

になってきますが菩提寺等の経緯「一色又三書状」の記述内容から見て柳原、片山二神氏周辺人物の可能性が推察されます。

### 三津屋二神氏

菩提寺……………

長福寺 (臨濟宗東福寺派)

本源寺 (臨濟宗妙心寺派)

神社……………宇佐八幡神社

墓地……………旭新開墓地

系図・文書…一色又三書状 (片山二神文書)、一色氏系図伝書略記

家紋……………丸に桔梗

系譜拡大地…九州地域、関西、北海道

系譜会員……二神喜久雄、二神正國、二神和義

### 系譜由来の謎を解く文書を発見

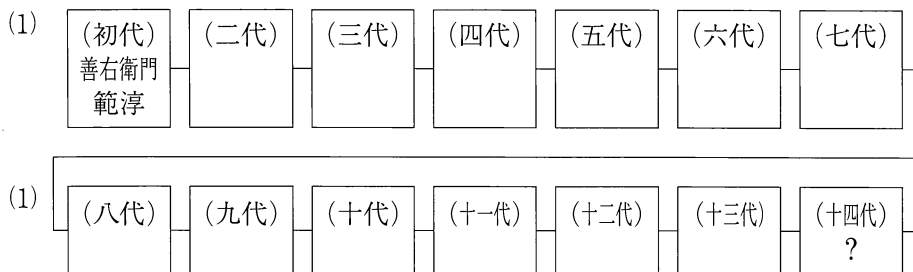
#### 「一色又三書状 (片山二神文書)」と「三津屋一色氏系図伝書略記」

東予地方の旧周布郡に所属していた三津屋村は河野氏の時代からその支配下にあり、藩政時代は松山藩に属していました。当初、会では「三津屋二神氏は二神氏が河野氏の家臣になった経緯から世田山城に近いこともありその時代から住み着いていた系譜ではないだろうか」と考えていました。しかし、三津屋二神氏の系譜由来について、これまで調査研究された記録があるのか調べてみ

ましたが系譜周辺では見当たりませんでした。そこでもう少し掘り下げて調査を試みた結果、意外にも三津屋にお住まいの一色敏弘氏（79歳）から「昔から一色家と二神家は親戚ぞな……400年前のこと大阪冬の陣と夏の陣に際し一色氏に出陣命令が出されたとき家に男子が少なくてたった一人の年少の跡取りを出陣させた。その際二神氏が援護をしてくれた事もある無事に帰還し跡取りが年少のため二神氏が一色家の養子に入ってくれた。そのため絶家にならずに済んだとの言い伝えがあり系図と伝書が残されている」との情報を入手。事務局では早速JR壬生川駅近くの一色家を訪問し『一色家（清和源氏）系図』を取材しました。

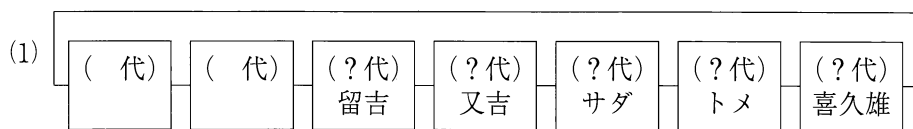
それより前に会では「片山二神文書」の中に「一色又三書状」の存在に気付いていましたが、内容については不承知のままでした。そこで解明作業を試みたところ、なんと、先に一色氏が話された内容が記録されてありました。「一色又三書状」と呼ばれる文書は天明年間頃に三津屋の一色又三と云う人物が親しい知人の中川権平宛に書いた私信で、大阪の陣の後、一色氏の養子となった二神善右衛門範淳の出自について問い合わせた内容でした。二神系譜研究会会員で高槻市にお住まいの三津屋系譜の喜久雄氏から送付された過去帳31霊の没年代の一部が正に「一色又三書状」に記載されている人物の時代と符合していることも判明し、二神氏が一色家の養子に入った事を記した「一色家系図伝書略記」にも「二神善右衛門。慶長19（1614）年の冬、重元もまた一色党に伴い大阪に入城せんと欲す。（中略）重次そのころ重政・重明のほか子なし。よりに強いて善右衛門をとどめて養子となす」とあり「一色又三書状」の内容とほぼ符合することが判明しました。今後、三津屋一色家の菩提寺、長福寺過去帳とを併せた総合的な調査が待たれます。

## 【三津屋二神氏系譜 A - 1】



(\*一色又三書状、一色系図伝書略記等資料参考によって推定作成・具体的人物は調査中)

## 【三津屋二神氏系譜 A - 2】

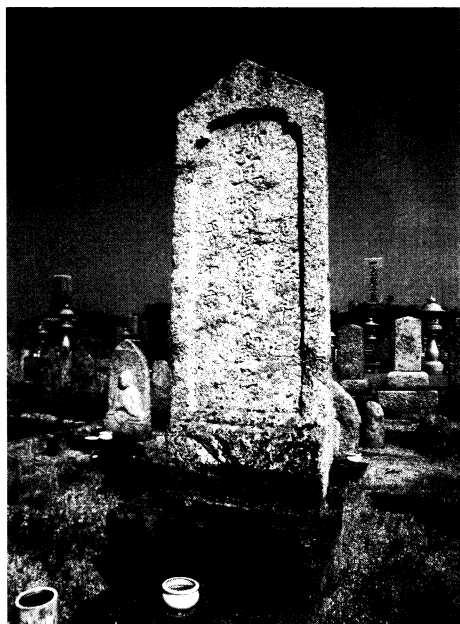


(\*二神喜久雄氏から提出された資料によって作成)

### ご先祖の生まれた家を確認

大阪生まれの私には三津屋二神氏の事は判りませんが、昭和23年頃に私が病気になり三津屋で療養をさせて頂いたことがありました。その時の療養先が宗家の二神一雄氏のお家であったように記憶しています。その時は一雄氏は戦地にて復員をされていなかったのとお会いしていませんが13年前、私の退職を機に再び宗家を訪問し、一雄氏からお墓、過去帳などを拝見したら、私の祖母が記録していた過去帳と同じ戒名が発見されたのでこの家をご先祖の生まれた家であることを確信しました。

(二神喜久雄氏の手記などから構成氏)

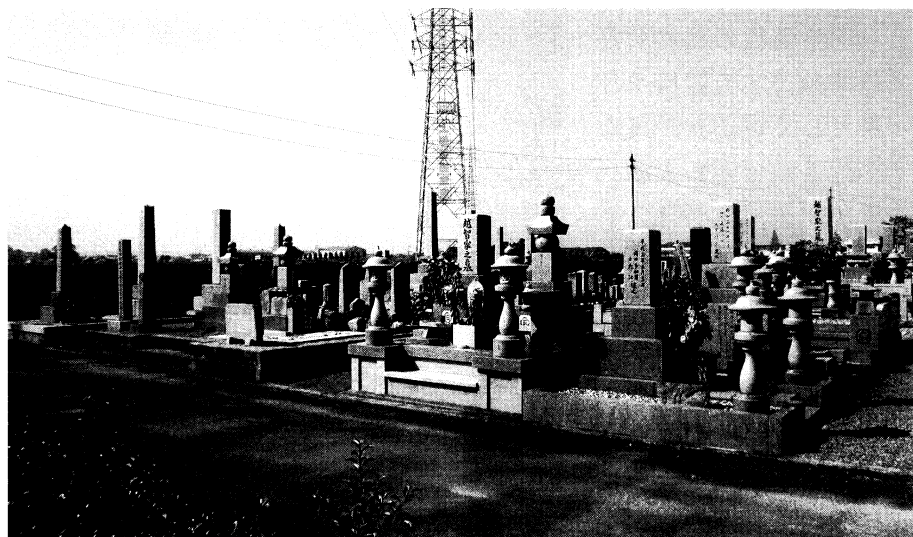


【二神善右衛門範淳の墓】

### 宮崎で海運業を営む

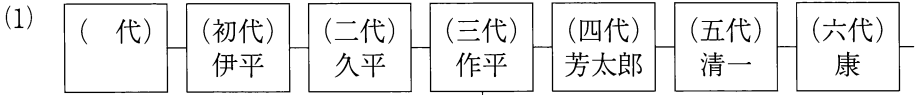
私の家は三津屋二神氏の中でも一度讃岐国へ出てその後、宮崎県へ移り海運業を営んでいましたが不振となり破産。一家は歩いて三豊まで帰ってきたと聞いています。今は父方の栗熊に住んでいますがこの機会に三津屋二神氏系譜が明らかになることを期待しています。

(二神正國氏の話から構成)



【三津屋二神氏の眠る旭新開墓地】

### 【三津屋二神氏系譜B】

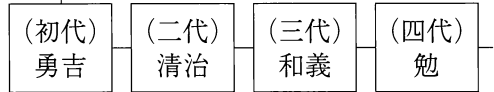


### 【佐呂間二神氏系譜】



二神和義氏

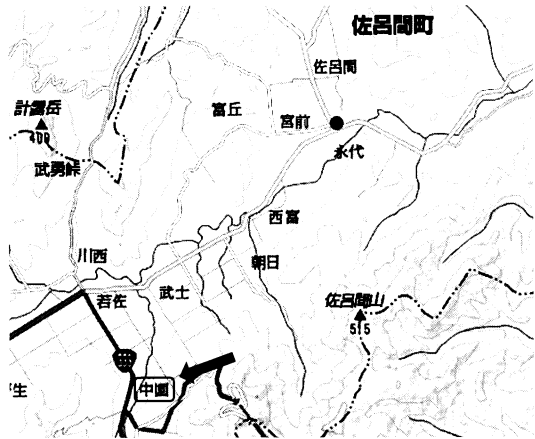
(\* 二神清一氏から提出された資料によって作成)



(二神和義氏から提出された資料によって作成)

### 佐呂間二神氏

明治時代の初め北海道開拓と北方警備を任務として屯田兵制度が施行され全国の失業士族が北海道へ移住しました。伊予国・愛媛県からも明治25年(1892年)屯田兵として松山藩士13名を含む107名の屯田兵とその家族が旭川上・下兵村などに移住しましたがこの中に二神氏はいっていませんでした。その後明治37年(1904年)に屯田兵制度が廃止されました。



佐呂間町若佐地区

佐呂間二神氏の初代二神勇吉は明治7年4月愛媛県周桑郡多賀村三津屋で久平の二男として出生。明治33年4月、26歳の時に三津屋村の父方の従姉妹、カクと結婚して分家、長男の清治はそれから11年後の明治44年8月に北海道で出生しています。「祖父の勇吉は日露戦争に従軍し203高地作戦に参加、背囊が穴だらけになっていた。と祖母のカクがよく話していました」と現在の当主で二神系譜研究会会員の二神和義氏（69歳）は話しておられることから考察すると日露戦争終結後、北海道開拓民として明治43年から始まった国の第1期拓殖計画（10年計画）に参加する形で初めに常呂郡當沸村に入植、その後佐呂間町若佐村に定住したのではないかと見られます。因みに明治40年頃までの佐呂間町若佐村入植者の中には二神氏を名乗る人物は無く（『さろま物語・開拓百年小史』より）常呂郡當沸村に暫く住み、その後若佐村に来たものと見られます。このことに関して和義氏も「愛媛県の方々は明治39年から44年頃にかけて佐呂間町若佐村に入植してきたと考えられますから両親もその頃に当地にやってきたものと思われます」と話され「昔、祖父の出身地であった周桑郡三津屋の実家に父と共に訪問し数日間お世話になったことを覚えています」と回想されています。このように佐呂間二神氏は三津屋二神氏系譜から明治後期に分家した系譜で、系譜呼称の基準である「幕末、明治初年にご先祖が生活基盤を持って居住していた町村名」からすると、少し時代が下がりますが、当時の北海道の持つ特殊な位置付けから敢えて「佐呂間二神氏」と呼ぶことにしています。

（二神和義氏談などより構成）

\* 『愛媛県人名大事典』（愛媛新聞社刊 1986年）によると三津屋二神氏の出自と見られる人物の中に二神喜十がいますがこれまでのところ系譜は未確定となっています。以下プロフィールを紹介しますので心当たりの方は、二神系譜研究会事務局までご連絡を願います。

## 二神 喜十（ふたがみきじゅう）

明治23年5月10日～昭和56年8月11日（1890～1981）

教育者・牧師。桑村郡壬生川村（現東予市壬生川生まれ。松山夜間学校で校長西村清雄、コーネリア・ジャドソンの感化を受けキリスト教に入信。教員養成所を卒え松山市の道後および石井小学校に勤めたが、母校に帰り西村校長の片腕となって勤労青少年教育に一生を捧げ、西村引退後二代校長となる。昭和32年退職その間同志社大学神学部に学んだ。70歳で日本基督教団正教師の試験に合格、36年から9年間松山古町教会牧師をつとめた。晩年、『西村清雄伝』の編集に専念した。松山城南高等学校〔松山夜学校〕－西村清雄（西村拓）〈『愛媛県人名大事典』愛媛新聞社刊・1986年〉



明治中期、二神喜十の父は達筆で知られた人物でした。このため松山の提灯屋にスカウトされ壬生川から松山に転居してきたと云われます。八坂公民館長五代目として昭和31年4月から翌年まで歴任するなど社会的にも貢献した人物です。明治中期に壬生川村生まれとあることから三津屋系譜ではないかとの推測が成り立ちますが出自は未確認となっています。

- \* なお、三津屋二神氏全体の調査結果は今回の古文書発見により、菩提寺など関係箇所調査などもあり会報第12号原稿締め切り迄には間に合わないのでは、全体像を明らかにしながら公表することを検討し、速報などでの報告をする予定です。

## 2. 畝順帳（明治10年8月）に残る東予二神氏

明治10年8月作成の東予二神氏関係の畝順調には合計6名の二神氏が記載されています。桑村郡関係では楠二神氏の二神伊作名で三カ所に所有し、周布郡関係では三津屋二神氏、国安二神氏、未確認の合計5名の二神氏が田、宅地をそれぞれ所有しています。

| 畝順帳 明治10年8月 |    |      |        |       |          |
|-------------|----|------|--------|-------|----------|
| 桑村、周布郡      |    |      |        |       |          |
| 小 字         | 地目 | 地番   | 面積     | 氏 名   | 備 考      |
| (楠 村)       |    |      |        |       |          |
| 池之谷         | 松山 | 乙46  | 1 畝00歩 | 二神 伊作 | 楠二神氏系譜   |
| 宮ノ前         | 田  | 甲367 | 5 畝06歩 | 二神 伊作 | 楠二神氏系譜   |
| 兼 光         | 畑  | 甲819 | 1 畝08歩 | 二神 伊作 | 楠二神氏系譜   |
|             |    |      |        |       |          |
|             |    |      |        |       |          |
| (三津屋村)      |    |      |        |       |          |
| 寄 田         | 田  | 59   | 3 畝26歩 | 二神 久平 | 三津屋二神氏系譜 |
| 川 北         | 宅地 | 137  | 2 畝15歩 | 二神 藤平 | 三津屋二神氏系譜 |
| 川 北         | 〃  | 160  | 1 畝14歩 | 二神 時蔵 | 未確認      |
| 水 取         | 田  | 676  | 1 畝01歩 | 二神 嘉吉 | 国安二神氏系譜  |
| 水 取         | 田  | 682  | 1 畝04歩 | 二神千代吉 | 未確認      |
|             |    |      |        |       |          |

\* 備考欄は事務局で記入



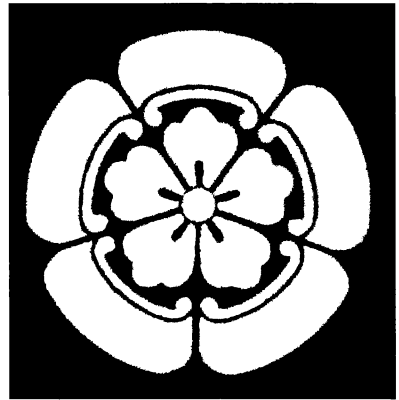
### 3. 東予二神氏家紋

東予二神氏の家紋はこれまでの調査で二系統が確認されています。このうち楠二神氏は「織田瓜」紋、国安二神氏と三津屋二神氏は「丸に桔梗」紋をそれぞれ使用しています。

#### 楠二神氏家紋

瓜はウリ科の植物で、胡瓜、まくわうり、へちま、さらにかぼちゃ、西瓜、とうがんなどの総称です。瓜が文様として用いられるようになったのは、鎌倉時代と見られ『北野天満宮縁起』や『春日権現験記絵巻』などにこの文様が描かれています。

楠二神氏の家紋は「織田瓜」紋と云われ、戦国大名であった織田信長が使用していたことでも知られます。織田家の家紋であった木瓜紋は信長が京都の八坂神社（感神院）に御輿を寄進した時から祇園祭りでも用いられるようになったものです。（『家紋 知れば知るほど』より）



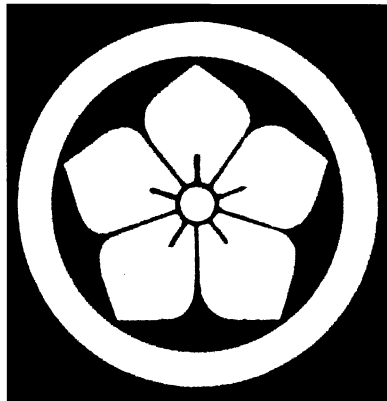
「織田瓜」

楠二神氏の家紋は東予二神氏の中でも他の二系譜とは異なりますが梅太郎、安明と二代続けて左官業を営み、後を継いだ安明も愛媛県建設業協会の役員を歴任するなど公務での活躍をしています。特に梅太郎は高い鍔絵の技術を持ち昭和8年には鍔絵「雲龍」を製作しその作品は今も旧東予市の郷土館に保存されています。梅太郎の鍔絵技術を持ってすれば楠二神氏家紋の「織田瓜」紋も立派に製作されたでしょうが、これまでのところ未発見です。宗家庭表に建立されている二神社の屋根にもこの家紋が使用されています。

## 国安二神氏家紋

## 三津屋二神氏家紋

桔梗は秋の七草のひとつとして、愛されてきました。桔梗紋はその清楚な気品（花ことば）を貴ぶところが、もとになっていますが「見聞諸家紋」をみると、土岐氏のように、「戦陣で桔梗の花を兜にさし、敵を大いにうち破った」と出ているところを見れば、戦勝記念の意味もありました。桔梗紋がはじめて出てくるのは「太平記」で「土岐氏が桔梗一揆に六、七百騎を従えていた」と云われます。戦国時代では明智光秀、加藤清正一がこの紋を用いていますが、なかでも、光秀の「水色桔梗紋」は信長を激怒させたという曰くつきのものです。このように桔梗紋は源頼光を祖とする土岐一族の代表的家紋となっています。（『家紋 知れば知るほど』より）



「丸に桔梗」

現在、国安二神氏、三津屋二神氏は共に数多い桔梗紋の中で「丸に桔梗」紋を使用しています。この事や畝順帳の事実から見ると、国安二神氏と三津屋二神氏は元々同じ系譜で、初期国安二神氏がさほど遠くない時代に三津屋から国安へ分家したものと見られます。

# 文書紹介

## 二神家内記

「二神家外記」「二神家内記」について

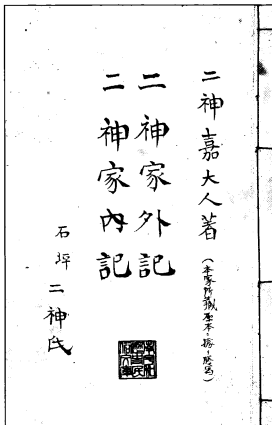
愛媛県御荘二神氏の城辺二神家には、伝わっている「二神家外記」「二神家内記」があります。これは、城辺二神家8代目禮和（深蔵）氏の弟「嘉<sup>あやなり</sup>」氏が書いたものを、堀舎の二神伝蔵氏が書き写したものです。嘉氏（藤種、号は回天）は、江戸から明治にかけて生きた方ですが、いつごろ書かれたのかは定かではありません。

「二神家外記」は、ご先祖藤原鎌足から種基の子どもたちまで。

「二神家内記」は、城辺二神家の正種から9代駿吉までのことを記しています。

（参照：海の民ふたがみ第2号P58～P73）

前号の第11号では、「二神家外記」。今号の12号では、「二神家内記」を掲載します。なお、原稿作成に関しては、藤田儲三氏（愛媛県愛南町在住）が謄写したものを使用しました。文字など十分でない部分や常用漢字にしている部分があります。



藤田儲三氏が謄写した  
「二神家外記・二神家内記」

### 本宗二神家内記

高祖 二神忠恵子

諱ハ正種字ハ新左衛門ナリ伊予国南宇和郡緑村人種基ノ第二子ニシ

テ母ハ某氏ノ女ナリ正種ハ英明豁達ニシテ文武ノ才幹アリ父母ニ事<sup>ツカエ</sup>テハ能ク孝ヲ盡<sup>ツク</sup>シ兄弟ヲ待シテハ極テ悌有ナリ廣ク衆ヲ愛シテ賢士ヲ親シ上ニ事<sup>ツカエ</sup>ル事ハ忠ニシテ下ヲ御スル事ハ寛ナリ凡ソ公事ヲ視ル事一切慎重ニシテ未タ曾テ過失アラザルナリ平生本支ノ子弟ヲ召シテ之レニ語テ曰ク老父広ク名門右族ノ興廢ヲ觀ルニ祖宗ノ忠孝勤儉ニ由ッテ家門ヲ成立セスト云フ事莫シ子孫頑率奢傲ニ由ッテ家門ヲ覆墜セスト云事莫キナリ經ニ云フ惟レ上帝ハ常ナラス善ヲ作セハ之レニ百祥ヲ降シ不善ヲ作セハ之レニ百殃<sup>ヨウ</sup>ヲ降スト此レハ是レ天地間必然ノ定理ナリ夫レ忠孝勤儉ハ善ニシテ吉ナルモノナリ頑率奢傲ハ惡ニシテ凶ナルモノナリ忠孝勤儉以テ善ヲ作セハ則チ吉ニシテ百祥自ラ至リ而テ家門ハ益々榮昌スルナリ頑率奢傲以テ惡ヲ作セハ則チ凶ニシテ百殃自ラ至リ而テ家門ハ必ス衰替スルナリ請フ見ヨ成立ノ難キハ天ニ升ルカ如シ覆墜ノ易キハ毛ヲ燎<sup>ヤ</sup>クニ似タリ汝等之ヲ勉メ之ヲ慎メト其ノ子弟ヲ訓督スル事多クハ此ノ類ナリ父種基在世中ニ於テ正種嘗テ本藩ノ郡務庁ニ出仕シテ専ラ土地租税ノ事ヲ掌リ数々恩賞ヲ受領シタリ當時世人皆ナ之ヲ榮ト為セリ正種ハ天和二年八月末テ父ノ官ヲ承襲セリ而テ天和ノ末ニ至レバ則チ家第ヲ弟種通<sup>ユス</sup>ニ禪リ而テ乃チ身ハ家族從僕ト共ニ隣邑ノ城辺村ニ転徙シタリ然リ而テ元禄元年三月二日卒ス在官スル事七年ナリ忠惠子ト諡ス浮屠<sup>フト</sup>法諡ヲ授テ善惠院即巖是心居士ト曰フナリ妻某氏ハ享保九年十二月二十三日ヲ以テ没ス忠慈臺ト諡セリ浮屠ノ法諡ハ紅梅院妙香大姉ト曰フナリ高祖忠惠子以下ノ墓ハ総テ皆ナ伊予国南宇和郡城辺村曹洞宗少林寺山中ニ在ルナリ正種四女一男アリ曰ク女某ナリ曰ク女某ナリ曰ク女某ナリ曰ク通直ナリ

長女某ハ内海浦村司実藤伊之輔ニ嫁適ス

第二女某ハ吉田藩下某村正兵頭彦左衛門ニ嫁適ス

第三女某ハ川石村正田中喜三治ニ嫁適ス

第四女某ハ宮内村正都築憲行ニ嫁適ス

適子通直ハ父ノ後ヲ承繼シタリ即チ英照子ナリ

## 第二世 英照子

諱ハ通直字ハ新蔵ナリ正種ノ適子ニシテ母ハ即チ忠慈臺ナリ

通直ハ天資英明ニシテ果斷頗ル人ヲ知ルノ鑒カガミ（鑑）アリ節操堅確ニシテ篤ク士人ノ道ヲ守レリ平素義ヲ審ニシ信ヲ重ンシテ利ノ為メニ迷ハス仁ヲ擲ヒ命ヲ立テ、害ノ為メニ懼レサルナリ藩下ニ郷アリ御莊ト曰フ享保四年ニ當リ其ノ郷内米穀惣テ登成セス百姓大ニ困苦セリ通直乃チ上書シテ米二百斛スナワ（石）ヲ請ヒ而テ即日之ヲ郷内ノ貧困者ニ散施シタリ是ニ於テ百姓其ノ恵ヲ受テ歡声ハ田埜ニ滿テリ藩主嘗テ密事アリ而テ其ノ發遣ス可キノ人ヲ難ナリ老臣ニ通直ヲ推シテ之ヲ薦ムルモノアリ之ニ於テ通直乃チ公命ヲ奉ッテ竊ニ出テ摂津国ノ浪華ニ在リ周旋探察具サニ至レリ其ノ事畢リテ復命スルニ及フヤ則チ善ク藩主ノ旨ニ称副セリ因テ重賞ヲ受タリ通直ハ元禄元年三月父ノ官ヲ承襲セリ而テ寛保元年某月ニ至リ家ヲ義子ニ伝テ老ス在官スル事五十四年ナリ然リ而テ安永五年正月二十一日卒ス壽八十八ナリ英照子ト諡ス浮屠法諡ヲ授テ南山院柏翁樹庭居士ト曰フナリ通直ハ早ク妻某氏ヲ喪ヒ而テ再ヒ某氏ヲ娶レリ前妻ハ享保十四年四月廿七日ヲ以テ没ス英慈臺ト諡ス浮屠ノ法諡ハ貞蓮院倫戴妙旨大師ト曰フナリ後妻ハ則チ明和五年正月廿八日没ス照慈臺ト諡ス浮屠ノ法諡ハ妙法院陽山義春大師ト曰フナリ通直ハ七男一女アリ曰ク秀種ナリ曰ク嘉種ナリ曰ク直種ナリ曰ク守種ナリ曰ク繁種ナリ曰ク季種ナリ曰ク香伯ナリ曰ク女某ナリ

長子秀種字ハ大十郎早ク没セリ

第二子嘉種字ハ佑八郎乃チ産ヲ分ッテ別ニ一家ヲ称ス嘉種二女ヲ生テ没セリ而テ其ノ後裔終ニ絶斷シテ享祀セラレス

第三子直種字ハ十三郎早ク没ス

第四子守種字ハ安之進即チ支家ニ神種綱ノ後ト為リタルナリ

第五子繁種字ハ源蔵早ク没ス

第六子季種字ハ小三郎ナリ乃チ出テ宇和島藩士修験者正覚院某ノ後ト為レリ藩主号ヲ賜テ壽松軒ト曰ヒ以テ季種ヲ信チヨウ寵セリ

第七子香伯ハ支家ニ神善種ノ後ト為リ医術ヲ以テ業ト為セリ

一女某ハ緑村司長近藤東左衛門エ嫁適ス  
義子綱好ナルモノアリ立テ通直ノ後ヲ承継シタリ即チ宣靈子ナリ

### 第三世 宣靈子

諱ハ綱好字ハ新兵衛後チ更テ新左衛門ト称ス宮内村正都築経貞ノ子ナリ而テ通直曾テ養ヒ以テ子ト為ス所ノモノ即チ其ノ外姪ナリ綱好人ト為リ恭謹ニシテ士ヲ尊ヒ寛洪ニシテ衆ヲ愛セリ且ツ天性敏疾ニシテ善ク事ニ応リ以テ功ヲ成シタリ受禪以來善ク義父ノ志ヲ継ギ善ク義父ノ業ヲ守レリ而テ高祖所定ノ家法ニ於テハ克ツ遵奉シテ未タ曾テ変更スル所アラス家風益々振イ義父嘗テ疾病アリ有馬ニ通テ温泉ニ浴スル事数月ナリ綱好代ハリテ公事ヲ摂行ス乃チ能ク藩意ニ称合セリ特ニ賞与ヲ受タリ當時世人皆ナ以テ榮トナセリ

綱好ハ寛保元年某月義父ノ官ヲ承襲セリ而テ明和四年某月家ヲ長子ニ伝テ老セリ官政ヲ服スルコト二十七年ナリ然リ而テ安永二年六月十一日卒ス宣靈子ト諡ス浮屠法諡ヲ授テ一繩院墨外居士ト曰フナリ妻某氏ハ明和四年十月二日綱好ニ先ツテ没ス宣慈臺ト諡ス浮屠ノ法諡ハ説參院妙法大姉ト曰フナリ綱好ニ女五男アリ曰ク女某ナリ曰ク綱秋ナリ曰ク辰四郎ナリ曰ク綱紀ナリ曰ク譽次兵衛ナリ曰ク綱修ナリ曰ク女某ナリ

長女某宮内村正都築春行ニ嫁適ス  
適子綱秋ハ父ノ後ヲ承継ス即チ穆肅子ナリ  
第二子辰四郎ハ早ク没ス

第三子綱紀ハ傳蔵ト称ス天資蒙邁ニシテ小節ニ拘ハラズ見識超然ト人ニ追絶セリ乃チ別ニ一家ヲ結構シテ肆店ニ開設ス因テ諸品雜器ヲ販賣セリ即チ店前ノ帳簾ニ題シテ堀舎ト曰ヒ以テ商農ノ二事ヲ兼行ス綱紀ハ三男一女生メリ長ハ綱方ナリ次ハ女覚ナリ次ハ綱定ナリ季ハ綱情ナリ長子綱方ハ入ッテ本宗叔父綱修ノ後ヲ承継セリ女覚ハ即チ二神綱精ノ妻ナリ事績ハ下文ニ詳カナリ第二子綱定ハ父ノ後ヲ承継セリ第三子綱情ハ通称ハ春太郎出テハ宮内村正都築某ノ後ト為リタリ

綱定字ハ佐太郎ナリ後チ永世<sup>ナガヨ</sup>ト改名シテ十兵衛ト更称ス又更テ秀平ト称ス永世ハ天資恭謹ニシテ嚴重ナリ学ハ和漢ヲ兼ネ且ツ書法ヲ悟リ早々ニ和歌ノ奥妙ヲ得タリ永世三男三女ヲ生メリ長ハ女順ナリ次ハ女仲ナリ次ハ綱永ナリ次ハ傳治ナリ次ハ信敏ナリ次ハ女高ナリ長女順以下傳治ニ至ッテハ前妻ノ出ナリ信敏並ニ高ハ則チ後妻ノ出ナリ長女順ハ僧都村正岡原九右衛門ニ嫁通ス次女仲ハ支家二神貞綱ニ嫁適ス子綱永ハ即チ父ノ後ヲ承継ス第二子傳治ハ恭勤ニシテオアリ不幸早く世ヲ去レリ第三子信敏ハ周三郎ト称ス人ト為リ短小ニシテオアリ産ヲ分ッテ専ラ商事ヲ行フ季女高ハ下灘浦村人赤松友幸ニ嫁通ス綱永ハ通称ハ熊一郎ナリ後チ更テ十兵衛ト称ス又更テ成蔵ト称セリ天性謹謙ニシテ礼ヲ守レリ経史ヲ受テ大義ニ通セリ嘗テ民事掛ト為リ出テ広見村ニ在リ未タ幾ラナラス官ヲ辞シテ家ニ帰レリ綱永四男三女ヲ生ム長ハ胤永ナリ次ハ女時ナリ次ハ女秀ナリ次ハ一治ナリ次ハ来三郎ナリ次ハ幾久平ナリ次ハ女夏南<sup>カナナ</sup>ナリ長子胤永ハ父ノ後ヲ承継セリ長女時ハ北宇和郡宇和島町某ニ嫁通セリ次女秀ハ北宇和郡丸穂村某ニ嫁通セリ第二子一治ハ医学ヲ修テ業ヲ城辺村ニ開キタリ第三子来三郎ハ出テ北宇和郡某(明治)村某(註：芝家)ノ後ト為レリ第四子幾久平ハ専ラ商業ニ従事セリ季女夏南ハ学ヲ修テ裁縫教員トナリ専ラ女子ヲ教授セリ胤永ハ彦一ト称ス天資恭謹周密ナリ而テ工思文オアリ乃チ村郷ノ吏員及ヒ縣会ノ議員ヲ歴テ皆ナ命誉アリ胤永ハ平城村中尾十内ノ長女某(千代)ヲ娶リ而テ男女ヲ生ムモノ既ニ数子ナリ長男傳蔵ハ□於テ綱紀ノ子孫益々繁盛ニシテ家運<sup>イヨイヨ</sup>愈榮昌ナリ経テ日ク積善ノ家ニハ餘慶アリト信ナリト謂フ可キナリ

二神綱精ハ通称ハ良之丞ナリ綱紀ノ義子ニシテ内海浦村司実藤通方ノ子ナリ綱紀嘗テ兄綱秋ト謀リ乃チ資産ヲ分与シテ妻ハス、二女覺ヲ以テセリ以テ支家ト為ス所ノモノナリ綱精一男一女ヲ生メリ男ハ一松ナリ女ハ新ナリ一松ハ父ノ後ヲ承継セリ新ハ長月村正清水善右衛門ニ嫁適ス一松ハ後チ貞綱ト改名シ而テ十蔵ト更称セリ貞綱天性恭謙ニシテ温順ナリ世ニ長者ノ名アリ頗ル鉄砲ノ妙ヲ得タリ貞綱四男一女アリ

長ハ峯一郎ナリ次ハ勝次郎ナリ次ハ徳松ナリ次ハ豊四郎ナリ季ハ女清ナリ長子峯一郎季女清ハ皆多病ニシテ事ヲ執ル事能ハス第二子勝次郎即チ父ノ後ヲ承継セリ第三子豊松ハ出テ和口村中尾源三郎ノ後ト為レリ豊四郎ハ赤松某ノ傭人ト為リ乃チ勤苦スルモノ多年ナリ而テ稍々資産ヲ得タリ因テ別ニ一家ヲ興セリ勝次郎ハ天資孝順ニシテ敏穎ナリ孝行ヲ以テ名ヲ著ハセリ勝次郎ハ平城村中尾某ノ長女某ヲ娶リ而テ男女数子ヲ生メリ其ノ長男ヲ篤ト曰フ篤勤儉ニシテ怠傲ナラス乃チ父ノ後ヲ承継シタリ

第四子與次兵衛ハ早ク世ヲ棄リ

第五子綱修ハ伯兄綱秋ノ後ヲ承継ス即チ楨威子ナリ

季女某ハ早ク世ヲ去タリ

#### 第四世 穆肅子

諱ハ綱秋字ハ源三兵衛ナリ綱好ノ通子ニシテ母ハ即チ宣慈臺ナリ綱秋ハ天性恭慎ニシテ嚴肅ナリ博ク經史ニ涉リ善ク文章ヲ綴ス尤モ書法ニ長セリ世人其ノ筆績ヲ得ルモノ以テ模楷ト為シ而テ之ヲ宝蔵セリ綱秋世ニ盡スル事必ス當然ノ理ヲ盡クス而テ口ニハ非礼ノ事ヲ言ハス身ニハ非礼ノ事ヲ行ハス一言一行都テ擇（択）棄ス可キモノアルナキナリ乃チ藩主ニ於テハ必ス敬ヲ用ヒ吏員ニ於テハ必ス礼ヲ用ヒ親戚ニ於テハ必ス愛ヲ用ヒ百姓ニ於テハ必ス慈ヲ用フ且ツ在官中ハ夙ニ起キ夜ニ寢ズ以テ公事ヲ治ム終始一日ノ如シ世ノ士人皆ナ其ノ人ト為リヲ欽慕シテ子弟ニ命シ以テ法則ト為ラシム當時令名ハ同僚ニ冠タリ綱秋ハ明和四年某月父ノ官ヲ承襲セリ而テ天明二年某月家ヲ季弟綱修ニ禪ツテ老セリ官政ニ服スル事十又八年ナリ然リ而テ文化四年七月十一日卒ス壽六十七ナリ穆肅子ト諡ス浮屠法諡ヲ授テ杏雲院正法了向居士ト曰フナリ妻某氏ハ寛政四年七月二日ヲ以テ没ス穆慈臺ト諡ス浮屠ノ法諡ハ荷屋院妙葉大姉ト曰フナリ綱秋ニハ男女ナシ家ヲ綱修ニ伝ル所以ナリ



## 第五世 楨威子

諱ハ綱修字ハ十吉ナリ後チ更テ新左衛門ト称セリ綱好ノ第六子ニシテ綱秋ノ同母弟ナリ綱修ハ天資豪邁ニシテ朗豁ナリ剛毅ニシテ方直ナリ巍然トテ犯ス可ラザルノ威嚴アリ文芸武術學習シテ其ノ概畧(概略)ヲ得タリ見識高卓ニシテ義理分明ナリ終身未ダ曾テ小人姦徒ノ為メニ欺罔セラレサルナリ常ニ忠誠以テ上ニ事ヘ而テ仁愛以テ下ヲ御ス百姓之ヲ尊敬スル事神明ノ如シ之ヲ親慕スル事父母ノ如シ祖宗以來百姓ノ為メニ敬服セラルル事綱修ノ如キモノハ未タ曾テ之レアラザルナリ文政年間非常ノ勲功アリ藩主嘉尚シテ賜フニ重賞ヲ以テセリ乃チ班格一級ヲ進ム因テ大ニ門光ヲ発シタリ綱修ハ文明二年某月長兄ノ官ヲ承襲セリ而テ文政二年某月家ヲ親任綱方ニ禪ツテ老ス在官スル事三十年又八年爾後ハ或ハ山ニ獵シ或ハ河ニ漁シ或ハ雲ヲ詠シ或ハ花ヲ吟シ以テ娛樂ト為ス然リ而テ文政九年正月式日卒ス壽ハ七十一ナリ楨威子ト諡ス浮屠法諡ヲ授テ以心院別外実傳居士ト曰フナリ妻某ハ川石村正二宮某ノ女ナリ文政二年六月二日綱修ニ先ツテ諡ス壽ハ六十三ナリ楨慈臺ト諡ス浮屠ノ法諡ハ松樹院繁林妙昌大姉ト曰フナリ綱修一男アリ名ハ種綱字ハ嘉太郎ナリ不幸ニシテ早世シタリ而テ復タ嗣子アルナシ乃チ家ヲ綱方ニ傳ル所以ナリ

## 第六世 光憲子

諱ハ綱方字ハ源三兵衛ナリ即チ支家綱紀ノ長子ニシテ綱修ノ親姪ナリ綱方天性謹謙ニシテ穎敏ナリ整肅ニシテ嚴重ナリ學問ハ洽博ニシテ深ク義理ヲ窮ハメ□□□ヲ知レリ且ツ善書ノ名ハ世ニ赫赫タリ平素上ニ事テハ忠敬ヲ盡シ下ヲ侍シテハ愛惠ヲ□□タリ吏員乃チ觀感シテ其ノ人ト□□□或ハ尊之ヲ慕ヒ或ハ□ノ之ヲ愛セリ承繼以來ハ夜□思ヒ□トニ施シ能ク叔父ノ威業ヲ守リ而テ家門ノ風格ハ益々盛ンニシテ未タ曾テ少シモ衰頽セサルナリ當時同僚ノ士皆ナ以テ師表ト為セリ綱方ハ文政二年某月叔父ノ官ヲ承襲セリ而テ其ノ十二年九月十一日卒ス在官スル事十有一年ナリ光憲子ト諡ス浮屠法諡ヲ授テ文林員忠愛正法居士

ト曰フナリ妻某ハ吉田藩宮下村正竹葉吉十郎ノ女ナリ天保四年九月十一日ヲ以テ没セリ光慈臺ト諡ス浮屠ノ法諡ハ蓮華院意存貞烈大姉ト曰フナリ綱方二女一男ナリ曰ク女門起曰ク具種曰ク女佐保ナリ

長女門起ハ当藩寄松村正都築三介ニ嫁適ス

適子具種ハ父ノ後ヲ承繼ス即チ英烈子ナリ

季女佐保ハ吉田藩宮下村正竹葉某字ハ兵左衛門ニ嫁適ス

## 第七世 英烈子

諱ハ具種字ハ源三郎ナリ後チ更テ十郎左衛門ト称セリ綱方ノ適子ニシテ母ハ竹葉某即チ光慈臺ナリ具種ハ容貌魁偉ニシテ膂力絶倫ナリ隆準赭顔ニシテ音吐甚タ洪ナリ眼光ハ爛爛ト人ヲ射テ仰現ス可ラス声ヲ發シテ一叱スレバ人畜皆ナ懾伏セリ天資英明ニシテ果断ナリ剛毅ニシテ恢豁ナリ善ヲ好ム事ハ好色ノ如ク悪ヲ惡ム事ハ惡臭ニ似タリ常人ノ憂ニ先ツテ人憂ヒ人ノ樂ニ後レテハ樂ム愛慕ス可キノ仁アリ畏悼ス可キノ感アリ広ク経史ヲ讀シ而テ義理ハ審力ニ成敗ハ明ナリ篤ク武芸ニ志シ而テ劍法ニハ達シ御術ニハ通シタリ且ツ土佐藩士立田某ニ師事シテ鉄砲ノ奥妙ヲ得タリ人ト為リ寡欲ニシテ義ヲ好ミ利ノ為メニ疾シカラス害ノ為メニ懼レス頗ル人ヲ知ルノ鑒（鑑）アリ正人善壬ハ則チ挙テ之ヲ用ヒ姦徒佞夫ハ則チ黙テ之ヲ舎テリ見識ハ超然ト衆ニ越シ而テ其ノ為ス所多クハ人ノ意表ニ出タリ調カニ古今ノ事体ヲ徹觀シ灼サニ将来ノ変革ヲ豫知セリ或ハ其ノ遍ク出テ門外ニ在リ而テ邑人卒爾ト具種ニ会逢スアルハ則チ皆ナ肅然ト容ヲ改テ逡巡ス具種自ラ人ノ為メニ畏レタル事ヲ知り毎ニ温顔柔聲以テ之ニ接セリ當時北越ノ藥商來テ成剂ヲ郷内ニ販シタリ乃チ始テ具種ニ謁スルモノハ則チ其ノ相表ヲ視テ愕然ト恐怖ヲ生シテ口ハ言フ能ハス退テ人ニ謂テ曰二神大人ハ関靈長藤鬼將ノ再生ナリト具種之ヲ聞キテ曰ク余ハ二公ノ所為ヲ喜ヒ竊愛慕シテ節義ヲ励マス乃チ諸レヲ内ニ思ヘト自然ト諸レヲ外ニ形ハス耳ヲ失シテ関將軍藤肥州ノ徳且ツ材アルモノニ非サルナリト藩下ニ村邑アリ名テ城辺ト曰フ即チ具種ノ住里ナリ此ノ地嘗テ昆蟲ノ害毒

ヲ被ルモノ連歳ナリ乃チ田畝ニハ秋実ナク百姓ニハ飢色アリ村中ノ困苦座視スルモ忍ヒサルナリ具種慨然ト祖宗以来蓄積スル所ノ倉稟ヲ発テ百姓ヲ振救スル事再三ニシテ其ノ費ス所ハ数千苞ナリ一村百姓頼シ以テ飢餓ヲ脱免スル事ヲ得タリ且ツ百姓ノ下田ヲ取り而テ自己ノ上田ヲ與ヘ以テ産業ヲ授ケ活路ヲ開ケリ村人今ニ到ルマデ其ノ賜ヲ受ケ往々為メニ富ヲ致スモノアリ藩主深ク其ノ義挙ヲ嘉尚シテ数々賜フニ重賞ヲ以テス乃チ終ニ進テ郷土溜間格ニ斑セリ是レニ由テ門光益々赫赫タリ当時畫（画）工ニ佐藤嘯山ナルモノアリ具種ノ愛寵スル所ナリ嘗テ嘯山ヲ召シテ孔聖杖ヲ揮テ原穰踞脛ヲ叩ク即チ顔面闕損等ノ十詰（哲）促行セリ及ヒ仲田少壯ナル時家貧ノ為メニ米ヲ千里ニ負フノ像ヲ圖カシメ以テ子弟休息室ノ障面ニ繫ケタリ蓋シ將サニ以テ朝暮子弟ヲシテ觀感シテ学志ヲ興起セシメントスナリ常ニ子弟從僕ヲ教誡シテ曰ク余ハ諸レ聖人ニ□ク志士仁人ハ身ヲ殺シ以テ仁ヲ成スト老父百歳ノ後千萬一大事アレハ則チ汝等須ク皆ナ身分トヲ擲棄シテ祖宗以来受ル所ノ国恩ヲ報シ以テ仁ヲ成スヘシ是レ人道ノ第一義ナリ而テ汝等ニ於テ老父ニ報スル所以ノモノ亦タ焉シタリ大ナル事莫キナリト固テ銃砲彈藥甲冑劍鎗ノ類ヲ蓄藏シ以テ豫メ非常ノ用ニ準備セリ具種天性田獵ヲ好メリ平素獵犬八十餘頭ヲ畜養セリ而テ僕ニ門丈夫ナルモノアリ善ク鼓ヲ擊テ乃チ命シテ之ヲシテ獵犬ヲ管掌セシム門丈夫声ヲ發シ鼓ヲ擊テハ則チ夫ノ八十餘頭ノ畜犬一時ニ來會シテ復タ後ルモノアル事莫キナリ是レニ於テ具種身ニハ鹿皮ノ獵衣ヲ穿ケ腰ニハ長短ノ利刀ヲ帶ヒ鳥銃ヲ携提シ部下ヲ引率シ而テ嚴寒烈風ノ中ニ田獵シテ親ク自ラ艱難辛苦ヲ嘗試スル事終身己メサルモノハ晋ク陶侃カ朝ニハ百甓ヲ齋外ニ運ヒ暮ニハ百甓ヲ齋内ニ運フノ所為ニ倣ヘルナリ乃チ安政某年親族ニ神貞綱都築右門及ヒ部下ノ衆ヲ率テ備前国塩飽島ニ出獵スルニ至テハ則チ隊伍ハ正整ニシテ号令ハ嚴肅タリ頗ル源征夷カ富士埜ニ田獵シタルノ意趣ニ類似セリ因テ殆ント全島ノ獸鹿ヲ塵書スルニ至レリ世人驚テ以テ土類未曾有ノ豪挙ト為シタリ爾シテ乃チ島人今ニ至マテ其ノ惠ヲ忘語セスト云ヘリ明治癸卯ノ歲第二子回天ナルモノ幸ニ備

後国尾道市ニ寓在セリ乃チ亡父ノ古蹟ヲ探ント欲ス而テ未ダ果ス能ハサルナリ然ニ島人尾商相ヒ互ニ往来シテ売買スルモノ終繹ト絶ヘス回天因テ之ヲ其ノ全員ス事既ニ数回ナリ具種ハ文政十二年某月先人ノ官ヲ承襲セリ此ニ至ッテ官政ヲ服スル事三十年ナリ乃チ安政五年正月上表シテ心情ヲ陳シ官職ヲ辞シテ老セリ當時親族ト相ヒ謀リ而テ大ニ家法ヲ改革シ且ツ命ヲ三子ニ遺スモノ極メテ切実ナリ其ノ年二月二十九日病ヲ以テ卒ス壽ハ五十三ナリ英烈子ト諡ス浮屠法諡ヲ授テ浄性院忠含義城居士ト曰フナリ具種早ク妻ヲ喪テ再ヒ妻ヲ娶レリ前妻某ハ宇和島城下長瀧某ノ女ナリ弘化二年九月二十六日ヲ以テ没ス英惠臺ト諡ス浮屠ノ法諡ハ静肅院貞列護法大姉ト曰フナリ後妻諱ハ異智ナリ即チ西外海浦山本某ノ女ナリ異智ハ天資貞正ニシテ節義アリ朝暮亡夫具種ノ行事ヲ談シ以テ三子二女ヲ奨励セリ明治五年六月二十六日ヲ以テ没ス壽五十三ナリ具種ニオノ後ルル事十五年ナリ烈慈臺ト諡セリ二神家ハ烈慈



二神深蔵

臺ヲ葬ルノ時ニ當時ハ既ニ仏葬ノ儀ヲ廢スルモノ二年ナリ因テ神葬ノ礼ヲ用ヒタリ後チ十餘年豊後国□岬町日蓮宗法心寺坐主権大僧正安部日厚法諡ヲ授ケ英慈院忠教義成大姉ト曰フナリ具種三男二女アリ曰ク禮和ナリ曰ク藤種ナリ曰ク英種ナリ曰ク女セン鞆ナリ曰ク女末ナリ皆チ後妻山本異智ノ出ナリ嫡子禮和（ひろやす）字ハ道治郎ナリ淡水ト号ス後チ更テ作馬ト称シ又更テ深蔵ト称セリ安政五年某月亡父ノ後ヲ承継ス禮和時ニ齡甫テ十四ナリ支家ニ神綱永（成蔵）専ラ家事ヲ撰セリ綱永ハ厚重正直ノ士ナリ禮和兄弟ヲ視ル事ハ猶ホ己レノ子ノ如クスルナリ後チ禮和ノ成長スルニ及テ乃チ家政ヲ返還シタリ禮

和ハ長大ニシテ高額ニ鷹目ニシテ赭顔ナリ勇健ニシテ頗敏ニ寛裕ニシテ簡畧（略）ナリ父ヲ喪スルノ後ハ常ニ三條家ノ親臣小澤種春字ハ子敬ニ事テ經史ヲ受讀シ本藩ノ教授官巽為風字ハ掃門ニ從テ劍法ヲ修練セリ而テ乃チ郷先生ニ就テ或ハ銃砲ノ技ヲ質<sup>クダク</sup>シ或ハ騎馬ノ術ヲ習ヒ或ハ算數ノ法ヲ問ヒ或ハ詩歌ノ芸ヲ叩キ皆ナ畧之ニ通曉スル事ヲ得タリ慶応元年某月覇主源家茂大ニ天下ノ諸侯ニ号令シテ萩藩毛利之親ヲ征スルニ當リ乃チ藩主伊達宗城<sup>マ</sup>亦タ遣中ノ一將ニシテ且ツ先鋒ノ命ヲ受タリ時ニ禮和年齡ハ二十一ナリ嘗テ募ル所ノ兵卒若干引率シテ之レニ從行セリ即チ出テ西宇和郡ニ在ル三机村ニ屯留シタリ將サニ令ヲ待テ敵地ヲ踏ントスルナリ明年事平テ乃チ部下ト共ニ郷里ニ皈還セリ是ニ於テ親族相議皆ナ禮和ノ徵<sup>レ</sup>恙<sup>レ</sup>ナキ事ヲ賀シ而テ其ノ敵地ヲ踏マサル事ヲ恨メリ藩主深ク禮和ノ忠士勞苦ヲ嘉尚セリ因テ重賞ヲ受ケ即チ郷士溜間格ニ班シテ大ニ門光ヲ宣著シタリ而テ部下ノ兵卒ハ各々鳥銃一口玄米八斗ノ賞ヲ領シタリ乃チ時勢一變シテ皇政回復廢藩置県ノ世ト為リ而テ明治某年ニ至テハ則チ縣人ノ公撰（選）ニ當リ愛媛縣会ノ副議長ト為レリ時ニ頗ル令名ヲ世間ニ伝播シタリ禮和ハ和口村正中尾與樂ノ第四女名ハ雪江ヲ娶リ而テ三男一女ヲ生メリ曰ク修藏曰ク駿吉曰ク女麟曰ク以藏ナリ長子修藏ハ法学ヲ東都ニ修メ將サニ以テ為ス所アラントスルナリ而テ不幸病ニ罹リ早ク世ヲ去リタリ第二子駿吉ハ東都ニ遊学シテ專ラ法律ヲ講窮セリ自分ハ三井物産合資会社ノ事務員ト為リ即チ佐賀県肥前国杵島郡ノ□雄町ノ出張所ニ在ルナリ駿吉ハ人ト為リ長身ニシテ脊體ハ円顔ニシテ鷹目ナリ勤儉ニシテ



二神駿吉銅像

義ヲ守リ寛裕ニシテ人ヲ愛セリ（この間省略）

既ニ男女数子ヲ生メリ女麟ハ土佐国幡多郡宿毛町華族岩村通俊ノ長男八作ニ嫁適シテ早く世ヲ没シタリ季子以蔵ハ修学中不幸ニシテ早く世ヲ棄タリ今茲明治三十六年禮和春秋適サル知命ニシテ九ヲ加フ老テ益壯ンナリ第二子藤種字ハ源三郎ナリ回天ト号セリ後チ嘉ト改名シ而テ回天ト更称シタリ嘉ハ身ノ長サハ五尺四寸ナリ而テ骨ハ隆ク肉ハ少シ頭髮ハ壯ンニシテ白ク顔面ハ老テ黒シ目ハ窪ク準（鼻のこと）ハ隆クシテ口ハ広ク声ハ洪ナリ天性酒ヲ好ミ肉ヲ嗜メリ壯歳ナル比ニ及テハ毎日清酒ヲ飲ム事一升ニシテ獸肉ヲ食スル事三斤ナリ青年ノ時ヨリ心ヲ神聖賢詰ノ術ニ潜ソメ而テ歩ヲ山嶽水溪ノ間ニ散スルニ違アラス故ヲ以テ遂ニ胃病ニ罹リ時々疾痛ヲ起発セリ因テ毎日胃薬ヲ服スルモノ三回ナリ而テ以テ食物ノ消化ヲ贊助セリ平常食スル所ハ必ス碎麦ノ飯ヲ用フ而テ精米ヲ混スル事甚タ稀少ナリ人ト為リ愚魯ニシテ学ヲ嗜ミ剛直ニシテ義ヲ好メリ而テ富貴ニ詔ハス貧賤ヲ侮ラス天ヲ樂テ命ヲ安シ身ヲ潔クシテ道ヲ守レリ而テ利ノ為メニ疾シカラス善ノ為メニ懼レス平素悪ヲ惡ム事ハ正ニ蛇蝎ヲ僻ルノ如ク善ヲ好ム事ハ恰モ芝蘭ニ就クカ如シ是ヲ以テ正善ノ士ハ愛慕シテ之レニ親近セリ邪惡ノ人ハ畏忌シテ之レニ避遠セリ朝暮青年者ヲ奨励シテ曰ク男子生テハ須ク分明ニ封候ノ富貴ヲ受クヘシ死テハ須ク分明ニ英明ヲ万世ニ□クヘシ然ラサレハ□サニ潜蔵シ以テ心士ヲ養フヘシ若シ不義不正ニシテ曖昧言フ可ラサルノ富且ツ貴ヲ取ルモノハ吾之ヲ視ル事糞土ノ如シト蓋シ其自ラ樹立スル所ノモノ乃チ然ルナリ嘉ハ志学ノ時ヨリ京人小澤東陽ニ事テ專ラ儒道ヲ講窮セリ蓋シ天下萬国ニ於テ善中ノ他善義ナルモノヲ撰撰スレハナリ爾來或ハ漢儒ノ学ヲ講シ或ハ宋儒ノ学ヲ研キ或ハ陽明ノ学ヲ習ヒ或ハ仁斎ノ学ヲ味ヒ或ハ徂徠ノ学ヲ茹ヒ或ハ水藩ノ学ヲ窮メ或ハ国学ノ理ヲ探リ或ハ古今ノ史ヲ貪リ或ハ兵法ノ略ヲ窮シ或ハ老莊ノ道ヲ翫ヒ或ハ仏者ノ譯ヲ繙キ或ハ耶蘇ノ説ヲ試ム凡ソ聖經賢伝諸士百家ヨリ漢唐宋明皇朝諸儒ノ著述註解疏釈演義ノ類ニ至マテ夙夜誦読シテ之ヲ講窮セリ乃チ三十餘年ノ星霜ヲ積ミ普ク天下ノ書籍ヲ通觀達

覽スル事ヲ得タリ而テ一旦悦然ト所謂道ナルモノヲ得タルアルニ似タリ是ニ於テ大ニ和漢諸儒ノ論說ヲ会萃シ而テ自己ノ心ニ適稱スルモノハ則チ之ヲ取り然ラサルモノハ則チ之リ<sup>ス</sup>捨ツ然ルニ特得發明スル所ノモノヲ以テシ以テ全ク一家ノ学ヲ成就シタリ乃チ其ノ講修研究中ニ在テハ或ハ昼夜一時<sup>マツグ</sup>モ<sup>カサ</sup>睫ヲ交サル事日ヲ連ネ或ハ一室ニ独坐シテ足ハ地ヲ踏サル事日ヲ累ヌルニ至リタリ為メニ数々胃痛ヲ發シテ殆ント一命ヲ失ントスル事二三四ナリ然リ而テ嘉ハ自若ト以テ意ト為サス人或ハ之ヲ止ムルモノアリ嘉之レニ謂テ曰ク夫レ大空ニ太極ナルモノアリ然後チ天地アリ天地アリテ然後チ万物アリ万物アツテ然後チ男女アリ男女アツテ然後チ夫婦アリ夫婦アツテ然後チ父子アリ父子アツテ然後チ兄弟アリ兄弟アツテ然後君臣アリ君臣アツテ然後上下アリ上下アツテ然後人道全ク天地間ニ成立スルアリ而テ天下乃チ安寧ナリ人道トハ何ソ道德政治ノ類皆ナ是レナリ今マ人類ヲシテ人類ノ道ヲ知ラサレバ則チ草木焉年シ禽獸焉年シ何ク以テ天地ノ間ニ立テ万物ノ靈長ト称スルモ足ランヤ<sup>ミガ</sup>経ニ云フ玉琢カサレハ光ヲ發セス人モ学ハサレハ道ヲ知ラスト余日夜勤学シテ厭ス且倦マサル所以ノモノハ将サニ以テ所謂人道ナルモノヲ知ントスルナリ朝夕ニ斯ノ道ヲ聞カハ則チ難モタヘニ棺ヲ蓋フトモ而モ何ソノ遺恨カ之レアランヤ比レ嘉ノ本懐ナリ請フ婦且ツ去レ復タ懸念シテ開口スル事ヲ休コト愈々<sup>イヨイヨ</sup>講窮シテ念ノ己メサルナリ比ノ勤苦ヲ以テ遂ニ<sup>ユ</sup>斬ノ道ヲ得タリ嘉常ニ門人ニ語テ曰ク余ガ儒者ナリ儒者トハ儒道ヲ修ムルモノナリ儒道トハ本ト漢土神聖賢喆ノ嘉言善行戴テ典籍ニ在ル所ノ事理ナルモノ即チ天地間凡百ノ美德萬般ノ芸術皆ナ是レナリ蓋シ東周ノ世ニ當リ孔聖勃興シテ故ヲ温存新ヲ悟リ物ヲ格シ知ヲ致ハメ固テ損益折衷シテ全然ト之ヲ大成シタリ乃チ所謂祖述憲章ノ大道ニシテ天理人情ノ當然ナルモノナリ然ハ則チ儒道ナルモノハ即チ孔子ニ至ッテ斬新開發シタリト断定セサルコトヲ得サルナリ是ノ故ニ或ハ之ヲ先王ノ道ト謂ヒ或ハ之ヲ神聖ノ道ト謂ヒ或ハ之ヲ儒者ノ道ト謂ヒ或ハ之ヲ孔子ノ道ト謂フ其ノ言ハ誰モ異ナルモ而モ其ノ義ハ一ナリ而テ乃チソノ本原ヲ推尋スレハ則チ宇宙天然ノ大主宰萬世

無変ノ一太極ナリ其ノ運用ヲ適称スレハ則チ誠意正心修身齋家治国平天下ノ要法ナリ其ノ効驗ヲ畧挙スレハ則チ天下萬姓皆ナ太平ノ中ニ含哺鼓腹シテ百祥萬福ヲ受ルノ実樂ナリ蓋シ天然無変ノ太極ナルモノ天ヲ開キ地ヲ闢テ□ニ萬物アリ萬物中ニ人類ナルモノアリ太極乃チ人類ニ賦與スルニ天理ノ貴ク且ツ重キモノヲ以テセリ萬物ノ靈且ツ長ト為ス所以ナリ而テ天下ノ人受得アル所ノ性質ハ萬人萬様ニシテ同一ナラス然ニ大別シテ之ヲ約スレハ定テ上中下ノ三品ト為スニ過キス蓋シ善至テ多ク而テ惡至テ寡キモノハ之ヲ上品ト謂フナリ善惡相ヒ半ハシテ一定スル所ナキモノハ之ヲ中品ト謂フナリ善至テ寡ク而テ惡至テ多キモノハ之ヲ下品ト謂フナリ夫レ上品ハ專ラ善事ヲ作シテ常ニ天理ヲ全クセリ中品ハ諸レヲ善路ニ導ケハ則チ善事ヲ作シテ天理ヲ全クシ諸レヲ惡路ニ誘ヘハ則チ惡事ヲ作シテ天理ヲ闕ケリ下品ハ專ラ惡事ヲ作シテ常ニ天理ヲ闕ケハ則チ復タ忌憚スル所ナキナリ上品ニシテ常ニ天理ヲ全クスルモノハ学聞ヲ借ラスシテ義理益々<sup>クワシ</sup>精ク知識益々明ナリ所謂神聖ノ人ナリ中品ニシテ或ハ天理ヲ全クシ或ハ天理ヲ闕クモノハ学聞ヲ借り而後チ義理<sup>ヨウヤ</sup>漸ク精ク知識<sup>ヨウヤ</sup>漸ク明ナリ然ラサレハ則チ否ラサルナリ所謂凡庸ノ人ナリ下品ニシテ常ニ天理ヲ闕クモノハ欲情甚タ炎ンニシテ更ニ禮義ヲ顧ミス教養ノ化ス可キニ非ス嚴ニ刑罰ヲ示シテ<sup>ヤヤ</sup>稍々之レニ罪戾ヲ寡ラレムル所謂頑愚ノ人ナリ孟子曰ク人ノ性ハ善ナリト荀子曰ク人ノ性ハ惡ナリト揚子曰ク人ノ性ハ善惡混スルナリト韓子曰ク人ノ性ハ上中下ノ三品ナリト蓋シ孟子ノ性善ハ專ラ上品ヲ説キタルナリ荀子ノ性惡ハ專ラ下品ヲ説キタルナリ揚子ノ人性善惡混スルハ專ラ中品ヲ説キタルナリ韓子ノ人性ニ三品アルハ天下古今ノ性ヲ通説シタルナリ余竊ニ<sup>ヨレソカ</sup>天下古今ノ性ヲ貫察スルニ上品ト下品トハ數百歳ノ中ニ於テ罕ニ<sup>マレ</sup>見ル所ノモノナリ而テ夫ノ天下ニ森羅雜列スルモノハ皆ナ凡庸中常ノ人ト為スナリ是レハ則チ学問ノ弊ス可ラナル所以ナリ今マ孔聖ノ教ヲ熟察スルニ多クハ皆ナ中品人ノ為メニ之談説セシモノニ似タリ其ノ言ニ曰ク教アリテ類ナキナリト教トハ教養政令ヲ謂フナリ類トハ人ノ種類ヲ謂フナリ蓋シ天下ノ人ニハ上智アリ中庸アリ下愚



アリ然ニ上智ト下愚トハ数百歳ノ中ニ於テ罕ニ出ツル所ノモノナリ而  
テ常ニ見ル所ノモノニ非サルナリ然ハ則チ天下ノ森羅雜列スルモノハ  
皆ナ中庸ノ人ト為スナリ夫レ既ニ天下ハ皆中庸ノ人ト為セハ則チ四海  
ノ内都邑ヲ論セス鄙陟ヲ問ハス皆ナ政教ノ感化ス可キアリ而テ別ニ又  
タ教化ス可ラサルノ種類アル事無キナリ又曰ク性ハ相ヒ近キナリ習ヘ  
ハ相ヒ遠キナリト性トハ人ノ夫ヨリ受テ以テ生スル所ノ性質ナリ而テ  
大小長短剛柔闇明強弱利鈍ノ類千差万別ニシテ同一ナラサルモノナリ  
然ニ本文所謂性ハ即チ中品ノ性ナリ而テ上品下品ノ性ニ非サルナリ蓋  
シ天下ノ人ハ皆ナ既ニ凡庸ノ中品ト為セハ則チ人々受ル所ノ性質ハ皆  
ナ畧（略）同様ニシテ其ノ相ヒ遠カラサルナリ然ウニ習フ所ノモノ善  
ナレハ則チ善士ト為リ習フ所ノモノ悪ナレハ則チ悪人ト為ルナリ但シ  
其ノ習フ所ノ善ト悪トニ於テ終ニ分別達遠ヲ致スナリ然ハ則チ人々其  
ノ習慣スル所ノモノ擇（<sup>エラ</sup>）ヒ且ツ審ニセサル可ラサルケリ又曰ク唯  
ノ上智ト下愚トハ移ラサルナリト上智トハ即チ上品ノ人ナリ下愚トハ  
即チ下品ノ人ナリ移トハ上智ヲ移シテ下愚ト為シ下愚ヲ移シテ上智ト  
為ス事ヲ謂フナリ蓋シ天下ハ皆ナ中品ノ人ナリ之ヲ善ニ導ケハ則チ移  
ツテ上品トナリ之ヲ惡ニ誘ヘハ則チ移ツテ下品ト為レリ然ル所以ノモ  
ノハ善惡一定スルナケレハナリ唯シ上品神聖ノ人ト下品頑愚ノ人トハ  
<sup>イエド</sup>雖モ同一ノ人類ナルモ而モ其ノ性質ハ大ニ相ヒ懸隔スレハ則チ上智  
ノ人ハ之ヲ移シテ下愚ト為ス事ヲ得ス下愚ノ人ハ之ヲ移シテ上智ト為  
ス事ヲ得ス乃チ凡庸中常人ノ或ハ上品ト為リ或ハ下品ト為ルノ比類ニ  
非ラス然ル所以ノモノハ善惡一定スレハナリ此レヲ言ヒ以テ天下ハ皆  
ナ凡庸中常ノ人ニシテ教化ス可ラサルノ種類ナキ事ヲ明カスナリ是レ  
以テ孔子立教ノ意ヲ見ル可キナリ然ハ則チ凡庸中常ノ人ハ須ク学テ故  
ヲ温<sup>タス</sup>ネ新ヲ悟リ物ヲ格<sup>ク</sup>ン知ヲ致ハムヘシ若シ然ラサレハ則チ終ニ下達  
シテ下品トナリ上達シテ上品ト為ル事能ハサルナリ夫レ学テ受ケ且ツ  
備ハル所ノ貴ク且ツ重キモノヲ昭明スルニ至ツテハ則チ天理ハ顯レ人  
欲<sup>アラワレ</sup>ハ徴テ勃然ト徳義興起シ豁然ト知識開啓スルナリ徳義ト知識ト皆ナ  
太極ノ賦興スル所ナレハ則チ太極即チ人類ト為ルナリ人類ニシテ徳義

ヲ興シ知識ヲ開ケハ則チ人類即チ太極ト為ルナリ是レ之ヲ天人合一ト謂フナリ是ニ於テ乎乃チ其ノ発スル所ノモノ皆ナ節度<sup>アタ</sup>ニ中リ而テ或ハ孝ト為リ或ハ悌ト為リ或ハ信ト為リ或ハ忠ト為リ或ハ仁ト為リ或ハ義ト為リ或ハ智ト為リ或ハ禮ト為リ或ハ恭ト為リ或ハ勇ト為リ或ハ謙ト為リ或ハ中ト為リ或ハ讓ト為リ或ハ正ト為リ或ハ和ト為リ或ハ順ト為リ或ハ利ト為リ或ハ謀<sup>ボウ</sup>ト為リ或ハ金ト為リ或ハ穀ト為リ或ハ船ト為リ或ハ車ト為リ或ハ城ト為リ或ハ橋ト為リ或ハ路ト為リ或ハ法ト為リ或ハ政ト為リ或ハ刑ト為リ或ハ兵ト為リ或ハ池ト為リ或ハ河ト為リ凡ソ諸善諸能以テ天地ノ化育ヲ賛ス可キナリ經ニ云ク人ハ天工ニ代ハルトハ此レノ謂ナリ乃チ所謂勃然ノ徳義ト豁然ノ知識ト此ノ二ツノモノ天下ニ並立スレハ則チ大本成就シ大道実行シテ君ハ君タリ臣ハ臣タリ父ハ父タリ母ハ母タリ子ハ子タリ兄ハ兄タリ弟ハ弟タリ夫ハ夫タリ妻ハ妻タリ士ハ士タリ農ハ農タリ工ハ工タリ商ハ商タリ朝庭ハ朝庭タリ郷臺ハ郷臺タリ凡ソ舅姑孫侄朋友僮主男女親疎遠近ノ類各々恰好相當ノ方法ヲ得テ乃チ内ハ以テ意ハ誠ニ心ハ正ク身ハ修リ外ハ以テ家<sup>トトノ</sup>ハ齊ヒ国ハ治リ天下ハ平ナルニ至ッテハ則チ四海ノ内風俗於テ変リ時シ雍ケリ而テ都ト莫ク鄙ト莫ク安泰且ツ文明ナリ是レニ於テ天下ノ人安泰ノ内ニ含<sup>ガン</sup>哺<sup>ボ</sup>鼓腹シ文明ノ中ニ運智開物セリ而テ人々無量ノ幸福ヲ受ケ無比ノ実樂ヲ得ルナリ是レ以テ儒道ノ成蹟效驗ヲ想見ス可キナリ柳<sup>ソモンモ</sup> 儒道ナルモノハ巍々然ハ至高ニシテ其ノ巔頂ヲ踏ム事能ハス蕩々然ト至広ニシテ其ノ畔涯ヲ望ム事能ハス愈々窮ハメテ愈々極リナリ愈々久クシテ愈々新ナリ愈々用テ愈々盡<sup>ツキ</sup>（尽）ルナリ愈々叩テ愈々出ルナリ巍々然ハ天ニ配スル所以ナリ蕩々然ハ地ニ配スル所以ナリ盍<sup>タダ</sup>シ天ニ配スルハ天下ノ物ヲ開ク所以ナリ地ニ配スルハ天下ノ物ヲ救フ所以ナリ夫レ物ヲ開クハ智ナリ物ヲ救クハ仁ナリ仁且ツ智ナルハ是レ即チ斯<sup>コ</sup>ノ道ノ極致奥義ナリ乃チ之ヲ放テハ即チ洋々ト六合ノ間ニ充塞<sup>ジュウサイ</sup>シ之ヲ卷レハ則チ密爾ト方サノ裏ニ潜蔵セリ神ニシテ且ツ妙ナルモノト謂フ可キナリ夫レ是クノ如シ故ニ諸レヲ心ニ施セハ則チ心ハ治リ諸レヲ身ニ施セハ則チ身ハ治リ諸レ家ニ施セハ則チ家ハ治リ諸レヲ国ニ施セハ則

チ国ハ治リ諸レヲ天下ニ施セハ則チ天下ハ治レリ凡ソ施ス所トシテ當  
リ且ツ宜シカラサル事莫キモノハ国ヨリ天理人情ト当然ニシテ大中至  
正ノ眞道ナレハナリ然リ而テ儒道ノ蘊奧ヲ探リテ之ヲ天下国家ニ錯キ  
且ツ施スニ至ツテハ則チ才德兼備ニシテ義理精明ナルハ無論ナリ広ク  
古今ノ得夫ヲ通察シ深ク天下ノ情態ヲ傍觀シタルモノニ非ラサルヨリ  
ハ安ク開泰ノ重任ヲ荷擔（担）シテ四海ノ人心ヲ風化スル事ヲ得ルカ  
經ニ云フ道ハ人ヲ弘ルニ非ラサルナリ人カ能ク道ヲ弘ルナリトハ此レ  
ノ謂ナリ且ツ夫レ儒道ハ大中大正ニシテ純善純美ノ眞道ナリ夫ノ權教  
ヲ奉テ口ニ任セ理ヲ誤リ以テ愚瞽ヲ欺クモノハ比類ト大ニ旨趣ヲ異ニ  
スレハ則チ吾等擔（担）フ所ノ任ハ極テ重ク而テ行ク所ノ路ハ甚タ遠  
キナリ何トナレハ道德經濟以テ己レカ任ト為ス亦タ重任ナラス乎棺ヲ  
蓋ヒ骸ヲ埋メ而テ後チ事始テ已レリ亦タ遠路ナラス更ニ豈ニ奮勵且ツ  
勤勉セサル可シ哉ト門人皆ナ唯々シテ退出セリ嘉ノ妻ハ南美ト称セリ  
天資寡欲ニシテ清廉ナリ即チ平城村岡原某ノ長女ナリ嘉ト共ニ諸縣ヲ  
周行シテ專ラ衣服飲食ノ事ヲ掌リ善ク天時ニ從ヒ審ニ土俗ヲ察シ而テ  
衣服ヲ作り食味ヲ調フ且ツ嘉過失アレハ則チ之ヲ言ヒ念怒スレハ則チ  
之ヲ謝セリ以テ偕老ノ道ヲ全ウセリ嘉ノ裏質病體ニシテ今日ニ至マテ  
身ヲ保チ命ヲ延ハスモノハ南美ノ力ナリ南美平常門生ヲ侍スル事甚タ  
公平ニシテ毫モ私愛私憎ヲ生セス而テ之ヲ親撫スル事母子兄弟ノ如ク  
スルハ終始更ラス異ナル事アルナキナリ門生頼ミ以テ業ヲ卒ハリ徳ヲ  
成スモノハ但シ一二人ノミニ非ラザルナリ明治三十四年九月十四日豊  
前国下毛郡小楠村ノ東浜ニ於テ不幸病没セリ門人相識者会合シテ厚ク  
之ヲ埋葬ス智光山主大講□首藤日慈字泰然ハ嘉ノ門弟ナリ乃チ法諡ヲ  
授テ温良院貞室大姉ト曰フナリ墓ハ小楠村ノ大新田ナル日蓮宗秋月寺  
境内ニ在ルナリ嘉ハ禮和ヨリ少キ事四歳ナリ今茲明治三十六年春秋正  
ニ五十又五ナリ

第三子英種字ハ重四郎ナリ身ノ長ハ五尺四寸ニシテ體ハ稍々肥大ナ  
リ人ト為リ汎ク衆ヲ愛シテ邪正ヲ擇（択）ハス天資剛勇ニシテ膂力ア  
リ放縱ニシテ惡念ナシ然リ而テ問フ言行相違ノ失アル事ヲ免レス是レ

ニ由リ世人ノ信ヲ取ル事能ハサルナリ<sup>カネ</sup>嘗テ出テ吉田藩下宮下町菊池伊勢治ノ嗣ト為リ既ニシテ男子ヲ生ムモノ二人ナリ中途離絶シテ乃チ実家ニ復販シタリ英種ハ嘉ヨリ<sup>ワカ</sup>少キ事二歳ナリ今茲明治三十六年ノ春秋正ニ五十三ナリ

長女<sup>セン</sup>輒ハ吉田藩郷土鍵山村正菊池雅膽ニ嫁適セリ居ル事若干年ニシテ男女ヲ生セス蓋シ石胎ナリ終ニ偕老ノ契ヲ絶ツテ実家ニ大販シタリ季女末ハ南宇和郡平城村人中尾初太郎ニ嫁適セリ而テ今既ニ男女数子ヲ生ミタリ

二神家外内記終

城辺二神家 (城辺村庄)

実藤伊之助 (内膳庄)

代官  
① 正種  
二神種差  
新左衛門

新左衛門

兵藤彦右衛門 (官田内庄)

次女某

田中喜三治 (川之石村庄)

三女某

都築憲行 (官内庄)

四女某

② 通直  
城辺村庄  
新安

守種  
安之進

李種 (修練寺正覚院の跡)  
小三郎 海松軒

香伯  
支家善種 (跡)

近藤東左衛門 (緑村庄)

女某

③ 網好  
宮内村庄 (都築路より)  
新安

都築春行 (官内庄)

長女某

④ 網秋 ⑤ 網修  
某女 (川之石村庄) 官之玄  
某女 (川之石村庄) 官之玄

網紀  
堀舎二神祖  
網方  
網修  
兄網秋の跡

⑥ 網方  
某女 (官野下庄藤村善十郎の玄)  
某女 (官野下庄藤村善十郎の玄)

⑦ 具種  
都築二介 (谷松村庄)  
門起

某女 (和泉長流の玄)

⑧ 礼和・深藏  
淡木 昇龍閣  
通治郎 作馬

⑨ 岩村八作  
白河 飛騨屋  
岩村八作 (男藤岩村通能家男)

⑩ 嘉  
藤種 嘉  
(因次)

南美 (平城原の玄)

英種 (官野下南池)

菊池雅勝 (巖山村庄)

綱七

中尾初太郎 (平城)

末

注  
— 実字  
— 養子  
— 婚姻  
— 省略  
~ 非号等

春三郎  
妙  
武  
節  
二郎  
静子  
健二  
稔子  
愛子

## 二神島への楽しい釣行

会長 二神 浩三



友人に誘われるままに釣りを始めたのは、昭和38年頃であった。当時は、自家用車を持っている者も少なく、ましてや釣りに行くのに車を用いることなど思いもよらないことであった。しかし、釣り道具は錘やリールを含め、かなりの重さがあり、釣り場は港の近くかバス停の近くに限られていた。しかも、二神港の石積みの波止周りにはチヌ釣り場として

中国路にまでその名を馳せていた。そのような状況の中で、二神港は絶好の釣りポイントであった。

中学時代からの友人と共に船に乗り、甲板の上で釣り仕掛けを作るのが常だった。その頃は既製の仕掛けは釣り道具屋にも見当たらず、専ら手製が使われていた。また、船の速度が遅かったために、この仕掛けを作る時間が充分にあった。余談ではあるが、当時、島の人々は船の姿を眼にすると、「蒸気が来た！蒸気が来た！」と云っていた。これは、その少し前までポンポンとリズムカルな音を響かせる蒸気機関の船が通っていたため、船を「蒸気」と呼んでいたのだろう。夏の心地よい夜風に吹かれながら、石積みのゴツゴツとした波止の上にシュラフを敷き、満天の星空を仰ぎつつ短い眠りにつくのが習わしだった。

その日も太陽が西の山に隠れ、夜の帳がおり電気浮きを付けて竿を横にウトウトしていた時、浮きが何の前触れもなくスーッと沈み、間もなく電気浮きの明かりが見えなくなった。すぐさま立ち上がって竿

を立てた。ズシリとした魚の釣りがかりを感じ、魚の暴れる振動で竿がガタガタと音を立てる。海面に白い魚影が見えた。お目当てのチヌである。しかも大物らしい。友人に助力を乞いタモアミを出して貰い、魚を掬って波止に上げて貰った。40cm超の大物である。息を弾ませながらクーラーボックスに入れたが蓋をしないまま二人とも思わぬ釣果をシゲシゲと見つめていた。「よくぞ、我が針に食いついてくれたものよ!」と。



一人で一夜の釣果

それ以降、この友人と何度か二神島を訪れ、その都度、メバル、ホゴ、黒魚（グレ）、カレイ、ベラ等をクーラーに満たした。当時の海岸には護岸がなく、砂浜があり、港を取り巻く民家の近くは石畳となっていて、夜には漁船が砂浜に行儀よく引き上げられていた。

そんな時であったと思われるが、アメリカの親戚から「アメリカの書店で、日本語で二神島と書かれた雑誌が目にとまったから」という

ことで、一冊の雑誌を送ってきた。私の見た二神港周辺のことがカラー写真入りで詳しく書かれていた。その当時の船着場は木製の浮き桟橋で、その桟橋の中には鯛や平目等の大型の魚が出荷までの間飼われていた。島には、今よりははるかに多くの人々が和やかに住んでいた。小学生も沢山いたように思い出される。

楽しかった釣行を思い、二神島の今昔を併せ考えるとともに、将来の二神島がどうなるのだろうか心配するのは、私一人ではないと思う。



昭和47年頃の二神島メインストリート  
(ナショナル・ジオグラフィック誌より)



# ホタル

副会長 二神 俊一

私が、小さい頃、実家の直ぐ前と裏の小川に、ホタルがいた。まだ松山市に編入されていない、温泉郡小野村の時代である。道路も幹線を除いて舗装はされていなくて、砂埃が舞っていた。小川では、ドジョウ、フナ、シジミ貝などが捕れたものである。そこかしこに、自然が一杯残っていたように思う。

その頃、縁台で涼んでいると、ホタルが、すいー、すいーと飛んでいて、追いかけて捕まえたりしたものだ。特に、南側の裏の小川は、泉から流れてきており、隣の家の竹やぶを境にしていたこともあり、かなりのホタルがいた。

しかしながら、時代は変遷し、田畑に農薬が散布されてから、また、小川がきちんとコンクリートで造られた水路となってからは、家の近所ではホタルを見かけることはなくなった。いろいろな意味で、環境破壊が進んできてしまったのであろう。

ホタルといえば、山口県豊田町では、木屋川のゲンジボタルとして天然記念物にも指定され、毎年6月には「ホタル祭り」が盛大に行われている由。5年に一度、豊田種長追善供養祭に訪問したときに、豊田町の地元の方から聞いた話しであった。そういう意味では、ホタルに関しては、豊田町の方がホタルの成育には極めていい環境なのだと思う。

私の母校である松山東高等学校の同級生M氏は、4、5年前から、ホタルの養殖と自然界への放流を通じて、人と自然の絆を共に創ろうという呼びかけを行い、ボランティアを募って、自然環境を守って行く活動を始めた。M氏、仲間のI氏など、強力なメンバーが中心とな

って、NPO法人「人と自然の絆を創る会」を平成17年の暮れにスタートさせた。

かつては、全国的にも有名なゲンジボタルの生息地だったと伝えられている道後公園周辺の水辺に、翌年の春には成長したホタルの幼虫を放流し、暮らしに優しい生活環境の復元を目指し、市民の環境問題への関心を喚起して行くという目的だった。地道な活動であるが、極めて大切な運動であり、献身的な奉仕精神、行動力には脱帽である。

高校の同期会の時に、上記のような、活動状況の話聞いて、私もその活動に共感し、早速、賛助会員に入会させてもらった。現在は側面からの些細な応援である。

ある時、NPO法人、「人と自然の絆を創る会」M理事長、M副理事長と話をしている、「アイテムえひめ」でホタルは飛ばせるかな？ということになり、さっそく、現地を見てもらった。

「アイテムえひめ」は平成8年にオープンした国際見本市・展示場であるが、庭園の庭木も大分大きくなり、芝生も生えているところに「ビオトープ」を造り、ホタルを放流しようということになった。

それから、M副理事長とI理事がほぼ、毎日、ビオトープ造りに通ってくれた。

ところが、問題が出てきた。「アイテムえひめ」の庭園に掘ったうち抜き井戸（以前、松山地方が濁水となった時に樹木の散水用として掘った井戸）は、「鉄分」（所謂、カナケ）があった。試行錯誤のさまざまな手法で「鉄分」を濾す方法をトライしてくれた。

その献身的な作業には、頭が下がった。鉄分をほぼ、濾すことができたとよろこんでいたら、今度は、「油」だった。およそ、2年間、いろいろ、対策を行ってきたが結局、鉄分と油のために、「アイテムえひめ」でのホタル乱舞の夢は見送りとなった。

NPO法人のI理事は、M副理事長と、井戸水を浄化する過程で、

松山市の郊外の川から、カワニナを集めてきては、「アイテムえひめ」のビオトープで放ち、ホタルを育てる環境造りに奔走してくれ、毎朝、早く、我々が出勤する前に、一仕事を終えている状態であった。そんな状態であっただけに、鉄分と油に汚染された井戸水を浄化するに至らず本当に残念な結果となった。特に、IさんとMさんの、活動・行動力は素晴らしく、「アイテムえひめ」の役職員は驚嘆し感謝の気持ちで一杯である。

いつか、今度は、新たな水源で循環式のビオトープを設置し、「アイテムえひめ」にもホタルの乱舞する時がくることを期待したい。

なお、「人と自然の絆を創る会」はホームページ[www.ai-humanature.org](http://www.ai-humanature.org)で、ブログなど活動状況がよくわかるので、ご一読をお願いしたい。



アイテムえひめ内のビオトープ



ビオトープ内の筆者

## 追記

鉄分と油が混じっている水のため、その後、ビオトープは撤去しています。

## 注 ビオトープとは

(フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』より抜粋)

ビオトープ (Biotop、ドイツ語) は、バイオトープ (biotope、英語) とも表記し、生物群集の生息空間を示す言葉である。日本語でもカタカナのまま用いられるが、あえて訳す場合は生物空間、もしくは生物生息空間とされる。語源はギリシア語からの造語で、「bio (いのち) + topos (場所)」である。転じて生物が住みやすいように環境を改変すること、したものを指すこともある。

生物学における用法では、例えばヘイケボタルが生息する典型的な環境をヘイケボタルのビオトープと呼ぶ。最近では、ちいさな水辺に水草や抽水植物、小魚等を飼育する環境を「ビオトープ」と呼ぶ語法も出てきた。

# 弟を偲ぶ

理事 二神 重成

昨年7月、私は脳梗塞にやられてしまった。以後、病状は一進一退、浮世の烈しい移り変わりの裡にまごまごしている間に、この夏、弟ががんで逝った。ただ一人血を分けた、しかも「同志」であった。二神島や豊田町には再三行を共にした。彼は、考古学に興味があり日本の古代・中世を広く東南アジアの地勢の観点から眺めては、私を啓発してくれた。こういう趣味の関連で、彼は焼きものに興味を抱き、自宅に小さなかまどをしつらえ、自分や弟子の作品を焼き展覧会なども開いていた。何しろ行動的だった。

土木技術を生業としていた彼は、現場を大声を出して走り回ってい



二神島の二神御本家外観

た故か、詩を吟ずるのが病みつきになり、漢詩の跡を偲んで中国によく旅をし、詩吟の会を催したりして結構充実した晩年であった。幼いころは取っ組み合いの喧嘩もよくしたが、剣道の有段者になって、私も一寸ひるむようになった。

ある年、豊田町で二神系譜研究会の集まりがあり、そのあと彼の発案で広島の小さい港から和船で二神島に向かった。波の間から二神島がだんだん迫ってきた。島の港には魚がうようよしていた。湾に沿って御本家を訪ねた。途中、たこつぼがたくさん並べられていた。翌々日、彼は道後の近くの陶芸の里を訪ねて帰京した。

私は梗塞で頭が鈍ってしまったらしいが、こういう思い出は鮮明に残っている。そのうちもう一度くらいは、船旅に出たいと思っている。水軍の血は争われない。

弟の納骨は明後日だ。

(2009.9.25)

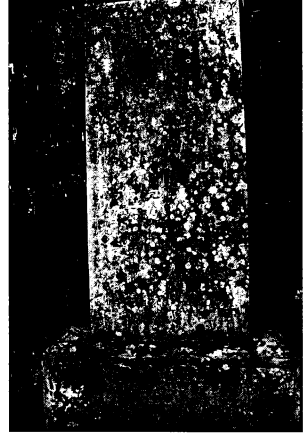


二神島での集い（1999年5月30日）

## 接点

理事 二神敬之助

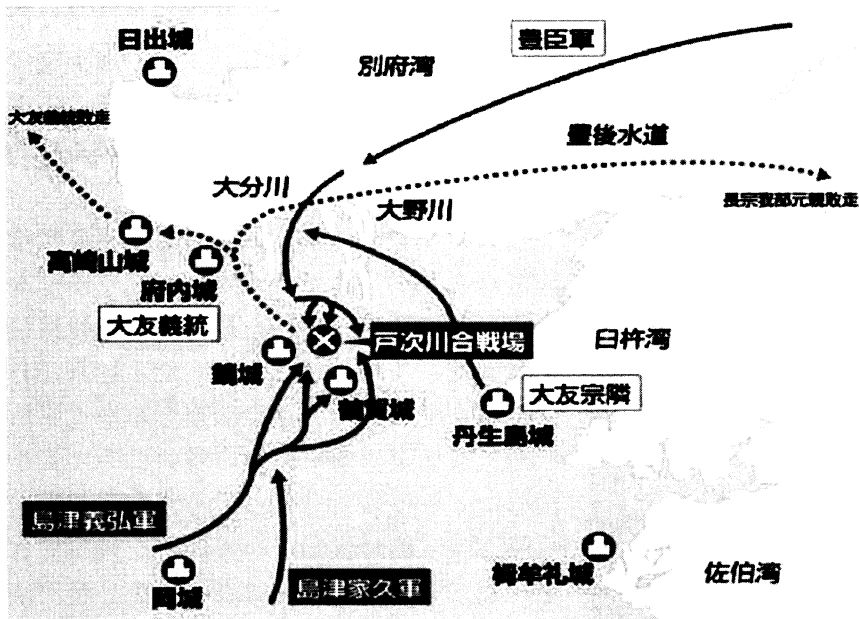
妻睦<sup>むつみ</sup>の旧姓は「坂本」である。在所は、高知県大月町芳の沢。坂本一族の墓所は、芳の沢北の一角「坂本谷」にある。昔は、墓石が林立していたが、現在は今風で家毎に納骨石碑に整理され、それでも14、15基ほどになっている。その墓地縁の中央に台座を含め、高さ250cmの一族の来歴を刻んだ石碑が建てられており、基部に「昭和9年坂本惣太郎建立 75才」の刻字が見える。惣太郎は、妻の祖父名である。



坂本一族の碑

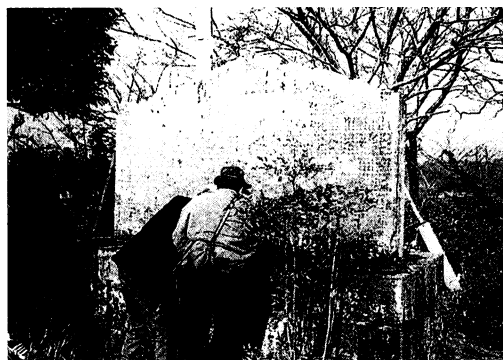
### 碑文

一代従三位中将藤原朝臣坂本右近之尉重吉嫡男坂本源八郎永正十一  
一戌年京都日枝ヨリ出土州長岡郡へ渡り大津村城主天笠萬五郎ニ  
仕エ知行五百石拝領其後長宗我部信濃守国親公ニ被討亡右源八郎  
ハ勿論惣領吉左エ門二男彦エ門ニ至迄戦死ス三男七郎四男七郎左  
エ門浪々之身トナリシガ元親公ニ被召出戦功ニヨリ感状ヲ賜フ二  
代坂本七郎元親公之御嫡信親公太閤秀吉公ヨリ島津家御退治之御  
人数被仰蒙七郎及七郎左エ門モ信親公之御軍備之中ニテ天正十四  
戌十二月十二日豊州於<sup>へし</sup>戸次川<sup>がわ</sup>右兩人戦死ス（中略）五代坂本清兵  
衛一豊公御入国節御目見得且普請役被仰付祖先代々大津村ニ居住  
ス（中略）五男惣次郎右四人幡多郡開発郷士奉願明和年中新規郷  
士ニ被召出来郡五郎助一人芳ノ沢ニ留り他ハ帰郷……………（後略）



西南四国歴史文化研究会会誌「よど第3号」に宿毛市小筑紫町の郷土史家松岡正氏の執筆「戸次川へしがわの戦と日振島」がある。8つの小タイトルから成り、③戸次川の戦—渡河決行・中津川原の決戦・長宗我部信親の戦死—⑥戸次川戦跡探訪（宿毛市歴史を探る会）を見る。

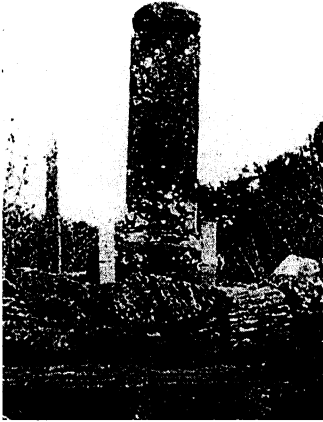
天正14（1586）年、薩摩の島津は九州統一を目指し2万の大軍をもって日向・豊後へと進攻してきた。島津軍は府内（大分）近郷の鶴賀城（大分市上戸次）を包囲、連日激しく攻めた。この地を守る大友宗麟は、秀吉の島津征伐出兵まで何とか進撃を食い止めようとしたが果たせず、



信親公忠死御共之衆の碑（大成寺）  
（戦死者700名の氏名が刻まれている）



ついに秀吉に援軍を請うた。請いを受けた秀吉は、長宗我部親子に計6千人の四国連合軍を編成させ（高松城主仙石秀久2千人、虎丸城主十河存保1千人、長宗我部3千人）大友救援を命じたのである。天正14年10月、各隊は伊予今治に集結。この地で舟団を編成して豊後府内に渡海した。



長曾我部信親の墓  
大分市上戸次嶺山崎の台地

一方、元親は、土佐水軍をもって直接土佐から出発。途中、伊予の日振島で軍団を整え、府内で連合軍に合流し鶴賀城救援に向かった。4里の道程であった。12月12日、鶴賀城を望む対岸の鏡城に連合軍が進出した時、薩摩軍は急に囲いを解いてその姿を消した。軍監仙石秀久は、それが薩摩軍の陽動作戦「釣野伏」であることが理解できず、長宗我部親子の反対を押し切り渡河決行、中津川原に進出、川沿いに伸びきった形で布陣。そこを兩岸に伏せた薩摩軍の鉄砲隊に集中銃撃を受け、長い紐を切る如く

分断され人馬の損害よりも戦いの指揮系統が潰乱してしまい、各隊各人がばらばらに戦うだけになり潰滅大敗、敗走した。4時間余りの激戦であった。生き残った700人の信親軍は包囲の中、引くに引かれず取り残され一兵たりとも脱落することなく、一丸となって



戸次川合戦400年祭記念碑（15トン以上）  
（昭和61年）宿毛の歴史を探る会一同

突進玉碎し中津川原の露と消え果てた。これが世に言う「戸次川の戦い」で、坂本兄弟も主に殉じたのである。時は天正14年12月12日申の下刻（午後5時）日暮れの早い師走の寒風吹きすさぶ中、中津川原は土佐武士700人の鮮血で染めぬかれた。

平成13年2月21日、「宿毛の歴史を探る会」により、「戸次川戦跡の旅」がもたれた。当時、大野川の分流としてこの戸次川は現在埋め立てられて中戸川地区の街並みとなっていたが、信親の墓所、山崎の丘（別名：長宗我部の丘）は、その広さ1町歩以上の土地に何十本かの桜を配した公園となっており、立派に管理されていた。この山崎の丘では、以来400年間、毎年12月22日の命日には地区民による慰霊祭が執り行われているという。土佐武士700人の戦いぶりが如何に当時の民衆の心を打ったか、今にしてなお民衆の心の中に生き続けていることには感謝感動の外はない。戸次川戦跡地域には、明治から昭和末年頃までに森鷗外叙事詩碑（昭和61年）、信親公忠烈顕彰碑（明治22年）、慰霊碑、記念碑など大きな碑5基を数えることができるという。



信親公忠烈顕彰碑



森鷗外叙事詩碑

この視察団の中に、宿毛市平田町の二神睦が参加した。睦の生家、高知県大月町芳の沢の旧家坂本家から、この信親隊で戦死した坂本七郎、七郎左衛門の兄弟がある。この祖先の仏に対し400年間も永代供養を続けてもらっていることに大きく感動され、公民館で丁重な謝意の言葉を述べた。この一言はかつての700人の戦死者の子孫を代表する言葉であったと、出席者一同、ここから深く感動したものであった。

当拙文題「接点」は、文中「天正14年10月、各隊は伊予今治に集結、この地で舟団を編成して豊後府内に渡海した」とあることから、二神水軍も年代があえば、高縄半島の東と西の距離、加わっていたのではないか？。想念を膨らませた結果であり、はからずも坂本一族の先祖と二神一族の先祖の接点、その奇縁を想ったからである。

(平成21年9月21日 敬老の日 記)



戸次川古戦場（現大野川）

# 私のふたがみ島

理事 二神 元信



私はもう何年も前に、本籍を松山市から横浜市に移した。これは子供たちの入学や就職の度に、いちいち松山から郵送で戸籍を取り寄せる手間を省く為だったからである。しかしその節は、それはそれで意味のあったことだった。今となつては文書類が電子化され最寄の役所から瞬時に入手可能でもあろうし（登記簿謄本などは正にその通り）、本籍を移さずとも良かったのではないかと幾分未練な気持ちがないではない。

一方、親戚や友人、知人の間でお墓の悩みがしばしば話題にのぼる。「親が亡くなったのだが、国元の先祖のお墓には必ずしも入れてくれない、たとえ入れてくれたにしても墓参りや法事をするのが遠方では大変だ」等などで、先祖とは縁もゆかりも無い、現に住んでいる近くにお墓を求める例が多い。しかし2、3世代も経つと子孫はおそらく分散し、当の子孫は親たちと同じような悩みを持ち、親のお墓をどこに建てようかとなる。かくして子孫は、自分の出身やルーツ、大げさに言えば「よって立つところ」、「拠り所」を見失い、人によっては、くらのごとく落ち着かない気持ちで生きざるを得なくなる。

このような時代状況にあつて我々二神一党は、何と恵まれていることであろうか。本籍を何所に移そうか、お墓を何所に建立しようか、「二神島」という存在が何と頼もしく、意義のあることかと思う。日本地図を開けばそこに明瞭に二神島と記されているのが目に入る。地名に一致、由来する姓は多くある。例えば大阪、神戸、山口、福島、

……。しかしこれにどれ程の意味を見出せよう。これに比し、地図に記された二神島という名称は（二神姓の希少、特殊とも相まって）自己の出身を紛れも無く示唆、想起させてくれる。父祖の地も墳墓の地も霞みつつある今日、時代が移ろうと長く子々孫々に亘ってその恩恵に浴することが出来る。ありがたいことである。

さて昨年（2006年4月）系譜研究会が開催された機会にそんな二神島を探訪したので、その折見聞きした島の様子を紹介しよう。

二神島は周囲およそ8 km、東西に細長く、ほとんどが山から成る島である。このうち北側の中程に港、集落があり島民の生活の中心地域である。港の北側には西より津和地島、怒和島、中島が目と鼻の先前面に広がっている。港から西回り、反時計回りに巡ることにした。島にはとにかく「二神」がいっぱい。施設は何でも二神を冠している。曰く、二神公民館、二神診療所、民宿ふたがみ荘。やや東には後述する二神小学校、など等である。

道脇でおばさんが何かの海藻を広げている。「何ですか？」と尋ねると「ひじき」という返事。しばらく眺めていると色々話を聞かせてくれた。昔から二神島の「ひじき」は身が厚く美味しいという評判で他所から注文が多かったこと。二神島の娘さんは



器量よしが多く、嫁にもらいたいとの申し入れが多かったとも話してくれた。山はほとんどがみかん畑である。西側の山地も例外ではない。海を眺め、道草を食いながら一時間ほどみかん畑を進み、西端を回ると島の南側に出た。舗装された道はずれ海岸に降りる。南側の海や海岸は北に比べ一転した景観を成す。波は荒く大きな丸い石がゴロゴ

口と一帯の自然海岸を占めている。アラレガ浜と云うそうである。人っ子一人見かけない無人の浜である。沖合いには遠く由利島が浮かんでいる。潮流が速そうだ。風がビュービューと吹きつけ、島が波に呑み込まれそうな一種恐怖に襲われる。追われるようにして元の道に戻る。

島の東部分に近づいた所で道がなくなっている。時間も気になるので先へ進むのをあきらめ、島の東部を分ける低い畑地を越すと程なく見慣れた島の北側に出た。ここから西に向かい出発点に近づいたと思う所になかなか大きく立派な「二神小学校」の表示のある建物に行き会った。成る程、ここでも校名はもちろん「二神」なのだ。海側に目を移すと正面の防潮堤に賑やかな愛らしい絵が描かれている。子供の顔や学校の建物に混じってイカや魚や船が描かれている。なかなか楽しい絵だ。よく見ると左側は平成9年度卒業記念、右側は平成11年度

卒業記念とある。卒業記念に慣例として描き残しているようだ。平成9年が11名、平成11年は9名の顔が描かれている。平成10年と平成12年以降は無い。卒業生はいなくなったのだろうか。何時までも続くことを願う。



卒業記念絵画のある防潮堤

時間の関係で東側は行けなかった。ここから見る限り海岸線に沿って道と防潮堤がうねうねと続いている。山も険しそうだ。岬を廻ったところの景観はどうなっているのだろうか。殆ど知られていない未知の領域を感ずる。次の訪問の時の楽しみに取っておくことにする。

(2009年9月28日記す)

# よろしくお願ひします

理事 二神 英輔

このたび、理事に選出されました、一本松二神氏の二神英輔と申します。

今年の4月の移動で松山に転居しました。二神系譜研究会に入会して、3年ほどになりましたが、系譜研究会で自分の先祖のたどってきた道を調べるほどに、自ら、そして、二神氏としてのアイデンティティがわいてきます。



一本松二神氏については、まだ分からない点もあり、これから調べていきたいと考えております。

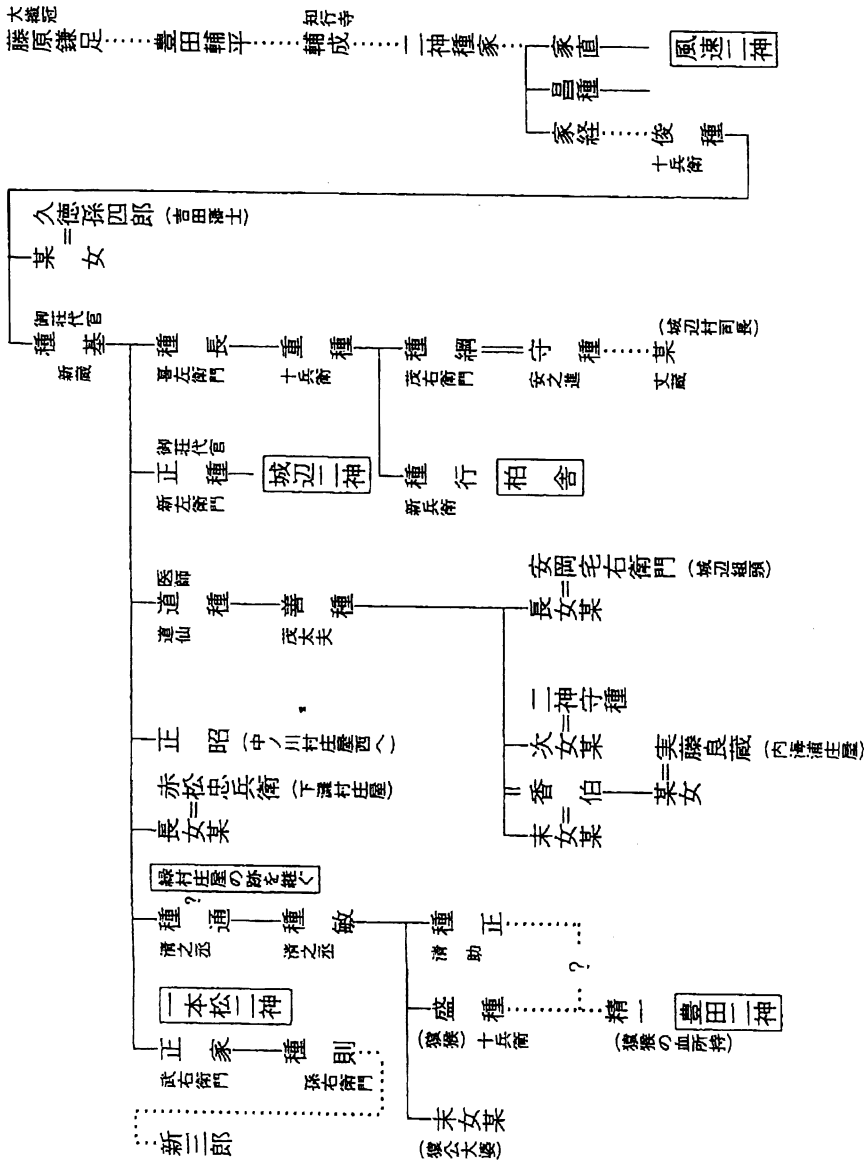
微力ではありますが、皆さまと二神系譜研究会を盛り上げていけたらと考えておりますので、今後ともよろしくお願ひいたします。



一本松二神氏の墓石

# 御莊二神氏家系図

(二神家外記・内記) その他により藤田作製、一部省略)





だいじん しょうじん  
大人と小人

理事 二神 久藏

昔、繁華街を連れと歩いていると遊園地や映画館等の入り口で、大人〇〇円小人〇〇円と書いて、「いらっしゃい、イラっしゃイ」と男が呼び込んでいた。「何々と小人は養い難しか」(注)とつぶやくと、連れが「オトナとコドモでしょう？」とすましている。大人君子は、大人は赤子の心、小人閑居して不善等言っても始らないので、「そうだよ」で、黙り込んだ事があった。



先日、国政選挙で民主党が衆議院で過半数の議席をとり、想いもよらぬ自民党の大敗で終り、両党にとっても、水と油の社民党に、参議院で5名の社民党に Casting vote を握られた。漁夫の利とは言いたく無いが、知性教養、文明人と称して威張っている現代人、何かが欠けている。簡単に過去を忘却する事だ。現代人は2千年前の人類等と言えば、木から木へ飛び移ったり、洞穴で毛皮を着ている人間しか想像しない人も居るが、決して原始人では無かった。その頃の東洋人はちゃんと小人と大人君子との区別をわきまえていた。西洋でも小我の利益に執する者を卑しむ思想は発達していた。

「売国奴は責められるべき、しかし社会全体の利益や福祉に冷淡な人間以上に責めるべきではない」

これも2千年前の哲人キケロの言葉である。今時の政治家の口から、こんな言葉を聞いた事が無い。

4年前の選挙で郵政民営化、賛成か反対かで民意を示しても、自民党は、首相が代われれば一夜で郵政「造反組」を復党させ、造反議員は舌も乾かぬ間に己の主張を己の保身、欲望の為に平気で民意を裏切る、



「改革」の芽を踏みにじる。そして大臣に成り上る人、党の要職に就く人、同じく今回の選挙では、自民党では当選出来無いから、これまた一夜で、自民から民主へ変心する者、これを公認する民主党。両党共、数の為に、国民の貴重な税を散蒔き、媚びる、小人のする事だ。

先日、舛添厚生労働大臣が「怠け者に貴重な税金を使わぬ」との発言で、謝罪発言撤回要求等の波紋が起きたが、少なからず正論で有りたい。世界情勢もわきまえず散蒔かれる事に馴れた国民

も決して大人では無い。働く能力、機会があっても、好きな仕事に就けない。就きたいが好きな会社が無い、あっても採用してくれない、組合が無い、休暇が少ない等々。そう言う者に雇用を造り出せと言う政党、政治家、エセ評論家。そんな我が儘な怠け者を雇用する会社が有ると、その政治家は、政党は思っているのか、舛添厚生労働大臣が「貴重な税金は使わぬ」と常識的発言をすると大騒ぎに成る。散蒔けば良かったのか。

国民の貴重な税をそんな連中に使われたく無い「物言わぬ国民」も多数居ると想いたい。

「考える葦」の人類の進歩は、考えの量より考えの質によってきた筈だ。現代は滔々として量の圧倒する時代である。小人と大人の観念さえ質から量の中に埋没してしまった。人間も金融資産の量的大小で計られ、区別、差別される様になってしまった。大人、発祥の中国がそれだ。講演者のランクが講演内容でなく、報酬の額で優劣を付けられている。

民意をあらわす一票を入れても、表しても当選すれば民意と反対の

事を平気でやる。当選すれば全て私に白紙委任されたと民意を無視、己の利益権力を第一に考える。

政治家たる者、当選せんが為、特定の階級、階層の利益のみの代弁者で無く、社会全体の利益、福祉の為に働いて頂きたい。

勿論、政治は状況の変化に対応し変化する。公約を曲げてても良い。

但し、大人君子の信念、非難覚悟で堂々と破ってほしい。歴史が証明する。国民の民意を、「当選すれば、白紙委任された、こっちのものだ」と影で喜ぶ政治家、これからは日本にも良い二大政党が根付く為にも謙虚に大人と小人を「量的」で無く「質的」に区別の出来る政治家、又、国民に成らねばと、自浄を込めて、残暑日の、自分の事は棚上げした愚か者の愚痴です。

(平成21年9月12日)

注1：女子と小人は養いがたし（じょしとしょうじんはやしないがたし）

女性と徳のない人間は、節度をわきまえず、近づけば無遠慮になり、遠ざければ恨みを抱くので扱いにくいものであると言うこと。

注2：大人（だいじん）

①体の大きな人 ②成長した人、成人、おとな ③立派な人、大人物 ④身分の高い人 ⑤父、師、学者その他、成人男子に対する敬称

## 二神島訪問外伝記

中部・関西支部理事 二神宏介

### 今年の夢

2009年正月に、娘夫婦の今年の夢は!!で、「二神のルーツである二神島に行きたい、婿も孫もおいしい魚を食べたい、魚釣りがしたい」と夢を語りました。一度は連れて行ってみたい気もあったので、「考えておくわ!!」と生返事をしてました。



2009年度二神系譜研究会総会の出欠について、俊一副会長に「今年は総会のみで前夜祭の楽しみもない為、欠席しまっさ!!」と返事をした際、「そや!!子供の夢を実現さしたるか」と二神島行きのことを思いつき、俊一さんを通じて涉さんに魚釣り、二神島訪問企画を頼みました。

7月29日～31日で予定を組み30日は二神島で泊まり、おいしい魚を食べ、釣り船で魚釣りをする計画が、涉さんからの返事でふたがみ荘も西野民宿も普段は休んでいるとの事、「さ～困った!!」。孫たちは釣具も準備し楽しみにしているので変更でけへん!! 取りあえず道後温泉に宿を取り、後は涉さんにお任せです。二神島には遊漁船がないため、向かいの怒和島の知人をお願いしたとの事で、娘夫婦には民宿のおいしい魚料理は食べられへんけど船釣りだけは出来そうや!!と返事。

29日の関西汽船で松山に渡り高浜港で涉さんと待ち合わせ、家内は船酔いするため、「釣りは、いやや」と一人二神島に行くことになりました。我々は怒和島で釣りをするため別行動です。高速船に乗り、怒和島で下船、家内は二神島直行です。当日は涉さんが家内のお供で二神島の案内をしてくれました。

家内の趣味は古墳と歴史探訪で、二神会会員の見る二神島と違った

観点で涉さんの案内を受けました。安養寺、二神氏の墓地、宇佐八幡神社、大サボテンの花（樹齢100年の大サボテン）、海水の淡水化浄化装置（島の飲み水作り）、町並みの路地を吹き抜ける涼しい風、二神島の人の人情に触れ、実り多い二神島訪問の旅だったそうです。

我々とは言えば怒和島で釣りです。高浜港で涉さんから紹介を受けた田中さんと名刺を交わしてびっくり!! 今日の釣りを世話してくれる方で、松山離島振興協会の会長さんです。最初は怒和島の漁師さんと思っていただけに恐縮至極!! 高速船でいろいろ話してたら、「今日は潮が悪いので沖に出ても釣果はない」との事やった!! 孫達は釣り船にも乗られへんし、島にも泊まれへんと思いつつ怒和島に上陸。ここから話は大転換、島に上がったら日ごろ都会の喧騒の中で生活しているだけに、悠久の郷に来た思いで良い島に来たと、気持ちはころっと変わり後は田中さんにお任せの状態!!……お宅に案内され奥さんが早速、大きな地のスイカを割ってくれました。孫たちは目を白黒、大きなスイカをかぶりつくことが初体験、種をプップッとバケツに吹くことが楽しかったみたい。勿論スイカの味は最高!! 田中さんはといえば、早速お昼の食材を準備（鯛、鰹、さざえ他）刺身、すし、焼き物、てんぷら、なんでもリクエストしてや、やと!! これやったら釣れんでも子供の希望のおいしい新鮮な魚は食べられるしええやろな。



潮が悪いため岸壁釣りです。婿も孫も初めての釣り、田中さんからリールの使い方、さびき釣りの方法を親切に指導され第一投すぐに大きな鰹が短冊で、あとは入れ食い状態で鰹、メバル、つばくろ、グレと大漁!! 「あまり釣ったら海に魚が居らんようになる」



と孫達を説得し、2時間ほどで納竿、釣りの途中で島の人から真蛸を2匹も差し入れにいただき、持って帰られへんのが残念!!あまりの水のきれいさに少し浜辺で砂遊び、又田中さんをごかいの養殖をされているとの事で養殖場の見学(ごかいが魚釣りのえさと

は孫たちも理解していないみたいなので後日触らせました)

お昼の食事は朝の生けメ食材と、釣りたての魚、孫たちは生きた蛸を触ったこともうれしかったのか、子供は魚離れであまり食べないのかなと思っていたら小魚もきれいにたいらげて大満足そう!! 娘夫婦はといえば大満足と大感激。田中さんともいろいろ話が盛り上がり安居島の話から家内の友達との繋がりもわかり、田中さんから教わった電話番号で、翌朝は家内が友達に電話し家内も田中さんに感謝、腹いっぱい、満足一杯で感謝の旅となりました。帰りは巡航フェリーで船上から子供に二神島の説明をしました。孫たちには、関西汽船フェリー、島に渡る高速船、島の巡航フェリーにも初めて乗り、釣り体験と、夏休みの初体験が宿題「絵日記」になれば、おじいちゃんの面目も立つな〜と勝手に満足の旅でした。

家内、娘夫婦と話したんやけど、今回の旅は人情とふれあい、ストレスのない美しい島、美しい海、ひと夏を悠久の郷で過ごせたことに田中さん、涉さんに紙面を借りてお礼申し上げます。

### ○田中政利さんの事

現在、田中さんは松山離島振興協会の会長をされ、来年の松山島博覧会に向けて大活躍されています。離島十島を考えておられる(勿論二神島も含む)事に感銘を受けました。

「しまはく」のホームページを紹介します。

<http://shimahaku.com/>

### ○怒和島の事

インターネットで調べてたら、怒和島では海面養殖でひらめの養殖が盛んと出てたので、ひらめが食べられるかな？と期待してたんやけど、今はあわびの養殖に変わってもたそうです。

あわびのブランド名は、「ぼっちゃん島あわび」だそうで松山島博覧会で食べられるかも!! 松山島博覧会に行かれてはどうでっか!! きれいな海と温かい人情に触れる事請け合いです。



又ごかい養殖も盛んです。 坊ちゃん島あわび養殖筏と綺麗な海岸

### ○呼びかけ!!

来年の二神系譜研究会総会は久しぶりの豊田町だそうです。

「豊田氏五年祭及び二神系譜研究会総会」

二神系譜研究会会員の皆さん、豊田町もいいところです。ぜひ参加しましょう。

### ○余談

家内が二神島から一足先に道後に帰り、湯築城歴史資料館を訪ねた際、河野氏に関する資料をもらいました。

### ○それに関連しての話

先日、琵琶湖堅田地区の遺跡資料館を訪ねた際、ボランティアガ

イドから堅田の湖賊は伊予から来た海賊だと説明がありました。吉川英治「新・平家物語」に堅田湖賊で出てくるので誤解のない様、今は堅田湖族と表現しているそうです。

琵琶湖堅田地区で発生した湖賊「伊予の海賊」は湯築城歴史資料館でもらった資料から河野氏一族ではないかと勝手に推測しています。

中世時代の海賊／湖賊について

現代社会において海賊の語はもっぱらマイナスのイメージで語られるのがつねであり本来の海賊衆の働きを表現できていない。(たとえば不法な複製をした出版物を「海賊版」と呼ぶように) 近代では海賊を水軍の表現になっていますが、海賊衆の多様な顔の一部分しか表していない。 山川出版「瀬戸内水軍散歩より」

呼び名 (田中様、奥様) と表記すべき様をさんにした理由

さんは (様) 大阪弁では 最上言葉 です。

天神さん、えべっさん、お伊勢さん。八幡さんと偉いものにはさん付けです (なにわことば研究会より)

注 俊一さん (二神系譜研究会副会長 二神俊一氏)

涉さん (二神系譜研究会常任理事 豊田 涉氏)

毎度おなじみ大阪手打ちで話は終わります。今回は大阪えびす打ちです。二神島に妙見神社と巖島神社で二神に成っているようにえべっさんの隣に大黒さんもおられ二神です (恵比寿町、大国町) えべっさんの福娘が打つ大阪手打ち……うーちまひよ よいよい もーひとつせー よいよい 祝<sup>いそ</sup>って三度 よいよいよい

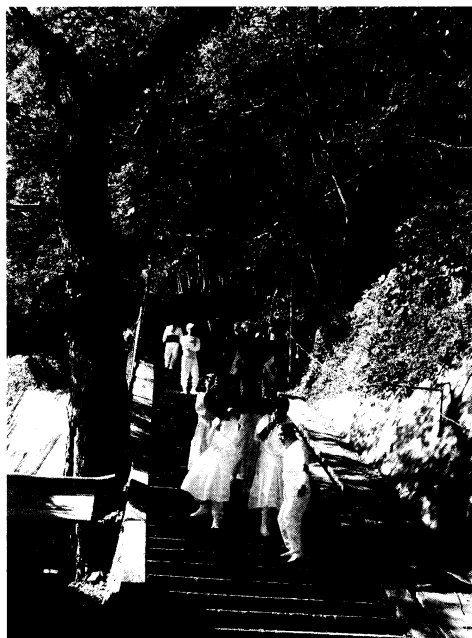


## 二神島の船踊り

常任理事 豊田 渉

10月18日、ふるさと二神島の秋祭りに帰った。「何年ぶりだろう」と自分でも感じるほど、御無沙汰していたのである。二神島も過疎化、高齢化の中で、かつての賑やかな祭りの状況にないことも事実である。

神輿100貫目と言われるが、この小さな島でも、大正9年（1920）



に作られた神輿が3体残っている。今は、そのうちの1体が練り歩くだけだ。今年も、神輿守（神輿の担き手）に若い人は少なく、人数も十分ではなかった。本来は、170段ある石段を登ったところに本殿があり、神輿に御神体を入れるのが筋である。しかし、何年か前から神輿は下のほうに降ろしてあり、本殿から御神体を運ぶのは、小さな神輿で行っている。石段の登り口のところで、本来の神輿に御神体を移し替える作業を行うのである。

3体の神輿が賑やかに練っていた30年前のことを思い出し、目の前の神輿に自分の姿をいつしか重ねていた。もうあの頃には帰れないが、あの時のエネルギーは、どこから湧いてきたのだろう。

朝9時に宮出しをし、夜の10時も過ぎてから宮入りを終えていた頃にくらべると、今は、朝10時に宮出しを行い、午後2時には宮入れをする。ただ比較することだけでは意味はないのだが、時代の流れと思

っては寂しいものを感じてしまう。この神輿が、いつ頃から始められたのか定かではない。賑やかな祭りの様子は、今では映像の中でしか見出すことができない。

もう1つ、寂しいものを感じたことがあった。100年以上に亘って伝えられ踊られていた「船踊り」が、今年は披露されないというのだ。二神島の船踊りは、明治13年（1880）頃、興居島こしほで踊られていたものを習って帰り、二神島で踊るようになったと聞いている。

最近、興居島で船踊りを観る機会があった。今の興居島の船踊りは、歌舞伎めいた演目を中心に海に浮かべた船台で踊られ、二神島のとは全く異にしていると思った。ところが、中央で踊っている形ではなく、両脇の子どもたちの踊りの所作に、二神島の船踊りの形を見出したのだ。

船台の両脇で、剣權と梵天を持った子供たちが踊っていた。「ああ、二神島の踊りに似ている。剣權と梵天の形や色合いは違っているものの、これを今に伝えてきたのだ」と思った。それは、北条の權練りにも通じる場所があり、山口県の祝島、愛媛県越智郡の島々の祭りにも、その形式がかいま見える。ひょっとしたら、そのルーツは、朝鮮半島にもつながる、海を渡ってきた、海の祭りなのではないのかとも思う。剣權と梵天の踊りについては、今後、じっくりと調べてみたいと思っている。

それにしても、人が少なくなり、高齢化していくことの現実の中で、島や山村はどうしていけばいいのだろうか。このままいけば、全国のあちこちで祭りが消えていってしまいそうだ。そうなることを想像したくはないが、凄い勢いで押し寄せるこの波をどう乗り切れればよいのだろうか。

そんなことを、久々に見たふるさとの祭りで、深く感じたのである。願わくば、来年は何とか船踊りを披露できないかと思うのみである。



二神島の船踊り（昭和30年代後半頃）



興居島の船踊り（平成20年10月）

「ふたがみ」にまつわる話

## 二神三姉弟、宮島管弦祭で篠笛演奏

広島市佐伯区に住んでいる二神菜恵さん（小学6年生）を筆頭に、慶紀さん、隆徳さんの三姉弟が、8月7日、宮島管弦祭に厳島神社国宝高舞台で、堂々と篠笛を披露しました。会員である二神洋臣さんのお孫さんです。その練習風景や演奏の様子が、中国新聞がバックとなっているケーブルテレビで放映されました。来年、7月28日の宮島管弦祭での、出演がすでに決まっているそうです。

普段は、地元佐伯区の藤の木公民館の篠笛演奏者の講師として活躍しています。将来が楽しみな二神姉弟です。頑張ってください。今後が楽しみです。みんなで応援しましょう。

左から慶紀さん、隆徳さん、菜恵さん



厳島神社で演奏する  
三姉弟

## テレビドラマ「風のガーデン」に 二神さん登場



倉本聡さんによる脚本で、俳優の緒形拳さんの遺作となった「風のガーデン」というテレビドラマで、「二神さん」が役名で登場しました。昨年（平成20年）の10月から12月にかけてフジテレビで放映されました。「二神」という姓は、珍しいと思いますが、倉本聡さんは「二神」への思いがあったのでしょうか。

主人公の麻酔科医が担当する患者が「二神達也」という名前でした。ちょっと、紙面を拝借して、あらすじを一部紹介します。

（あらすじ）

東京の有名医大の準教授・貞美（中井貴一）は、多忙な毎日を送る麻酔科医の権威。

北海道の富良野では、貞美の父・貞三（緒形拳）と娘・ルイ（黒木メイサ）、息子・岳（神木隆之介）が暮らしているが、貞美は妻の死をきっかけに6年前から絶縁状態だった。

貞美はVIP患者の二神（奥田瑛二）の手術を担当することに。進行性の末期がんだったが、仕事を優先させるために延命措置をとることにした。

そんな中、以前受けた血液検査の結果が判明。体の異変に気づいた貞美は、自ら肝臓とすい臓のエコー写真を撮る。

貞美は学会で札幌へ。開業医の水木（布施博）を呼び出し、自分のエコー写真を見せると、早急な検査を勧められる。

検査の結果に打ちひしがれる中、二神が病院に運び込まれる。

貞美は、親類のさゆり（森下千恵）から、ルイが「よさこいソーラン祭り」に出るので、見に来ればと誘われる。

そのころルイは、不倫相手の宮内（白石雄大）から、大阪転勤の話が聞かされる。また、看護師の妙子（伊藤蘭）は、貞美の異変に気づき、マンションを訪ねてみる。

貞美は、ルイが出演する「よさこいソーラン祭り」を見に行くことに。いっぽう、病状が悪化した二神は、貞美から自分も同じ病気だと告白される。

妙子にがんを知られた貞美は、退職届を病院長に預け、自分を監視するように頼む。

貞美は、二神の娘・香苗（国仲涼子）から、医療器具完備のキャンピングカーを譲り受ける。香苗は、父の心境の変化を尋ねるが貞美は言葉が出なかった。（以下、省略）

というような内容です。倉本聡さんらしく、舞台は北海道の富良野です。結果として、医師の貞美さん、患者の二神さんも亡くなってしまおうのですが、雄大な自然の風景が随所に登場し心を癒されます。でも、どうして「二神」さんという役名になったのでしょうか。倉本聡さんに聞いてみたいものです。

## 編集後記 その1

### 「忙中閑あり、石鎚山へチャレンジ!!」

今回も、予定より遅れましたが、会報第12号を皆様のお手許にお届けでき、編集委員の一員として、ほっとしております。ご寄稿頂きました皆様、編集委員の方々、ご苦労さまでした。紙面をお借りいたしました、感謝申し上げます。



ある日の常任理事会

さて、先般、以前は体育の日であった、10月10日、秋晴れの日、久しぶりに、西日本最高峰、石鎚山へチャレンジしてきました。若い頃は、面河などからの登山でしたが、歳相応に、土小屋からの歩きです。

たまたま、10日の土曜日は予定が入ってなく、「天気も良さそうなので石鎚山へ行こうか」とワイフに言ったのが前日のことで、(いきあたりばったり、を反省!) 大急ぎで支度を開始。早速、「土小屋白石ロジライブカメラ」のホームページを開けてチェック。流石に10月始めから、朝夕、冷え込みが続いているなどと思ったら、山の上では、

日の出前は氷点下になっている日もあるようだ。お天気次第であるが、これなら真冬の服装を用意しておくべきか？とかいろいろ、検討できた。(最近は本当に便利な世の中になったもので、事前にパソコンで、土小屋の白石ロッジの備え付けのライブカメラで天気などの状況をチェックし、服装などの装備を予め準備できるので、大分、楽である。)

それなりの装備をしてイザ出発。途中で弁当などを仕入れる。石鎚スカイラインは、いつ走っても素晴らしい。

松山から車で約2時間弱のドライブで、土小屋に到着したが、3連休とあって、駐車場は満車状態！他県のナンバーも多く、紅葉の季節には、いかに登山者が多いか、びっくりした。なんとか、空いている所に車を止め、必要な物をリュックサックに詰め、片道4.6kmの登山道に挑戦した。勿論、ベルトには、万歩計(笑)を携えて。午前11時頃には、土小屋では摂氏10度前後であった。たまたま、その日は、土小屋上空で荷物を運搬中のヘリコプターが飛び、行ったり来たり、結構うるさい音がする道中であった。暫く、歩いて行くと、ヘリコプターの音も大分聞こえなくなった。

登山道では、すれ違う時には、「今日は！」「お疲れさん！」など、登山者同士が挨拶をかわすのが、慣例になっており、清々しい気持ちになる。中高年の夫婦、グループで登っている人たち、親子連れ、いろいろな年齢層の人々が、思い思いに、(健康志向の影響も相当あるようで)黙々と一步、一步前進していて、気持ちがいい。

登山道そのものは、幅があまり広くないので、すれ違う時には、どちらかが、横へ寄って路を譲る光景も、登山者のマナーとして、定着している。いいことである。私たちは、どちらかという、ゆっくりしたペースなので、譲ってあげる方が多い。時々、素晴らしい眺めをカメラに収めたり、水分補給したり……。無理をしない、マイペースである。太陽の当たっている所と、日陰の風あたりの強い所では、汗をかいたり、汗で冷え込んだり……。山道に慣れていないせいか、そこらあたりのコントロールが難しい。

「頂上まで、あと、〇〇」の表示が出る頃には、目の前に断崖絶壁が迫ってくる。鎖を使わないで、迂回路、階段の方を選択して、歩くことにした。そこで、ワイフの膝に少しトラブルが出た。ちょっと、



キツイ行程を反省しつつ、ペースを超スローにして、なんとか、最後の力を振り絞って頑張った。頂上（<sup>みせん</sup>弥山、石鎚神社の山頂社がある所、標高1974m）へ着いたら、何処から来たのかと思うほど、登山者で溢れている。以前にも登ったことがあるが、こんなに、大勢の人でごった返している石鎚山は初めてだった。

秋晴れの上天気で、360度のパノラマの眺めが素晴らしい。素晴らしい眺めをみていると、疲れが吹っ飛び、登ってきてよかったなあとと思う。目の前にある、天狗嶽（標高1982m）（岩場を100mくらい行けば着くはずだが）は、帰路のパワーのことを考えて、今回は見合す。

帰路は、大分楽であるが、膝に負担がかからないよう、気をつけながら、下山した。だんだん、土小屋あたりが、近くなってくると、嬉しくなり、つい、ペースも速くなってくる。山は夕方になってくると、気温も下がってくるし、直ぐ暗くなるので、細心の注意を払わないといけない。

ワイフと二人でペースを調整しながら、土小屋ー石鎚山、往復約5時間のトレッキング（trekking、山歩き）であった。還暦も過ぎたら、疲れは翌日には出てこないで、2日、3日後に膝などが少々、痛くなったりした。まあ、あまり無理はしない方が賢明である。しかし、また、季節のいい時には再チャレンジしてみたい。



石鎚登山

平成21年11月1日記す  
副会長 二神俊一

## 編集後記 その2

8月30日の衆議院議員総選挙で、民主党が勝利し政権が交代しました。半世紀に亘って政権を執ってきた自民党からの交代。「今までとは何かが変わるのでは」という思いで、有権者が選んだ道となりました。しかし、日々の暮らしの中で、変わったという実感がまだ、ないように感じます。急に、方向転換ができるわけでもなく、結果は、まだまだ先のことのようなのです。

さて、「海の民ふたがみ」も12号となりました。今回は、『豊田氏、大内氏』で特集してみました。このほかにも、掲載すべきものがあるとは思いますが、それはまた、次の機会にとっておきましょう。

平成22年は、二神系譜研究会が発足して10年を迎えます。いつものことながら、時の流れの速さを感じます。やることは、いろいろあるのになかなか思うようになりません。でも、誰かがやらなければ、次に、繋げないのです。民俗学者の宮本常一が、「記録されたものしか記憶されない」と言っています。前進あるのみです。

そして、松山市では、4月から10月にかけて、松山島博覧会を計画しています。松山市・北条市・中島町が合併し、有人島が9島になりました。島からの発信をして、多くの人に島を知って、理解してもらい、島を訪ねてもらおうという思いのもとに、島の人たちがイベントなどを企画して行うものです。

私のふるさと二神島でも何かを計画したい。それは、新たに「ふたがみさん、集まれ」でと考えています。会員限定でもなく、多くの人に参加いただければいいなと思います。しま探検、船の旅、シンポジウム、忽那氏と二神氏のコラボ、二神家文書の里帰り、休校となっている二神小学校でのイベント、元気な島の祭り、無人島上陸など、どうことができるのか、思案しています。やるしかないのです。

2009.11.11記 豊田 渉